平成 23 年度博士論文

# 日中指示詞の対照研究

史　隽
LD072005
一橋大学大学院言語社会研究科博士課程

目次

第 1 部　研究の概観 ..... 1
序章 ..... 1
1　研究目的 ..... 1
2　研究対象 ..... 2
3　研究方法 ..... 3
4　理論上の枠組み ..... 4
5　論文の構成 ..... 4
第 1 章　先行研究とその問題点 ..... 6
1.1　日本語指示詞の先行研究 ..... 6
1.2　中国語指示詞の先行研究 ..... 14
1.3　日中指示詞対照の先行研究 ..... 18
1.4　先行研究から見られた問題点 ..... 21
第 2 章　日中指示詞の用法 ..... 23
2.1　日中指示詞 ..... 23
2.2　日中指示詞の構成体系 ..... 24
2.3　日中指示詞の形態 ..... 30
2.4　日中指示詞の文法的機能 ..... 31
2.5　日中指示詞の語用的機能 ..... 33
2.5.1　“这”“那”の機能 ..... 33
2.5.2　日本語指示詞の機能 ..... 36
2.6　本章のまとめ ..... 37
第 3 章　日中指示詞に関する諸問題 ..... 38
3.1　概念 ..... 38
3.2　日中指示詞の対応形式 ..... 38
3.3　中国語指示詞の「虚化」 ..... 40
3.4　この論文で扱う日中指示詞の問題点 ..... 41
3.5　先行研究との結びつき ..... 44

3.6　本章のまとめ……45
第 2 部　日中指示詞の具体的な対照……46
第 4 章　「N1+指示詞+N2」構造における日中指示詞の対照……46
4.1　問題提起……46
4.2　同格構造……47
4.3　所属構造……52
4.4　両構造の類似性……56
4.5　日本語との対照……57
4.6　指示詞の虚化現象……60
4.7　本章のまとめ……61
第 5 章　「指示詞+QN」構造における日中指示詞の対照……62
5.1　問題提起……62
5.2　両指示詞の比較……63
5.2.1　音調面……64
5.2.2　共起要素……64
5.3　指示詞の機能に関する考察……66
5.3.1　「強調の指示詞」の機能……66
5.3.2　「概数の指示詞」の機能……68
5.4　使用条件の再考察……71
5.5　指示詞の機能……73
5.6　本章のまとめ……75
第 6 章　複数の修飾要素を含む名詞句における日中指示詞の対照……77
6.1　問題提起……77
6.2　先行研究……79
6.3　分類……81
6.4　中国語指示詞の考察……82
6.4.1　指示詞先頭型(D+M+M+N)……82
6.4.2　指示詞末尾型(M+M+D+N)……84
6.4.3　指示詞中間型(M+D+M+N)……86
6.4.4　まとめ……88

6.5　日本語指示詞の考察 ..... 89
6.6　指示詞の機能 ..... 92
6.7　本章のまとめ ..... 93
第7章　照応用法における日中指示詞の対照 ..... 95
7.1　照応 ..... 95
7.2　問題提起 ..... 96
7.3　「その」の照応用法 ..... 97
7.3.1　「外延レベルの照応」と「内包レベルの照応」 ..... 97
7.3.2　「持ち込み」と「言い換え」 ..... 99
7.4　中国語指示詞の照応用法 ..... 101
7.4.1　量詞および「持ち込み」「言い換え」の問題 ..... 101
7.4.2　量詞なしの指示詞使用 ..... 103
7.5　本章のまとめ ..... 106
終章 ..... 108
1　この論文の視点 ..... 108
2　先行研究との理論づけ ..... 109
3　各章の内容 ..... 111
3.1　現場指示 ..... 111
3.2　文脈指示 ..... 113
4　残された課題 ..... 114
引用文献 ..... 117
参考文献 ..... 121
データ資料 ..... 125

# 日中指示詞の対照研究

## 第１部　研究の概観

### 序章

#### 1　研究目的

日本語の指示詞が「コ・ソ・ア」三系列であるのに対して、中国語の指示詞は近称の“这”と遠称の“那”の二系列からなる。今までの指示詞に関する日中対照研究では、“这・那”の二系列と「コ・ソ・ア」の三系列の使い分けがずれていると指摘されてきた。

表(1)　日中指示詞形態対照図

| 日本語指示詞 | 中国語指示詞 |
|---|---|
| コ | 这 |
| ソ | 这・那 |
| ア | 那 |

指示詞は日本語でも中国語でもかなり難しい分野である。日本国内では指示詞「コ・ソ・ア」の研究が盛んである。中国国内でも指示詞“这”と“那”に関する研究が注目されている。しかし日本語のみでの「コ・ソ・ア」に対する研究と中国語のみでの“这”“那”に対する研究にはそれぞれ限界があり見えないところがある。そこで両者を対照し、お互いを鏡にすることでそれぞれの持つ特徴や機能を探る。つまり対照研究の手法を用いて日中指示詞のそれぞれの特徴を分析することが有益であると考えられる。

## 2　研究対象

この論文では日本語と中国語指示詞の使い分けではなく、非対応部分を視点において両者を比較対照する。それから日中指示詞の各自の言語での位置づけ及びその独自の機能を探る。

- 対応―日/中ともに指示詞を使用
- 非対応
  - 日本語では使用するが、中国語では使用しない
  - 中国語では使用するが、日本語では使用しない

指示詞は物の遠近場所を指す機能を持つ一方で、現場指示においても文脈指示においても様々な働きをしている。しかし、それ以外にも「そもそも指示詞を使うか使わないか」という観点も重要であると思われるので、この論文では従来とは異なる視点から日本語と中国語の指示詞の比較対照を行う。日中指示詞対応のズレは、すでに梁(1986)で指摘されているように日中指示詞で対応しないのは「現場指示」における「コ」と“那”だけであり、後はすべて対応している[1]。

表(2)　現場指示・文脈指示における日中指示詞の対応関係(梁)

| | 現場指示 | | 文脈指示 | |
|---|---|---|---|---|
| | 这 | 那 | 这 | 那 |
| コ | ○ | × | ○ | ○ |
| ソ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ア | ○ | ○ | ○ | ○ |

この論文で意味している対応というのは、表(2)のような日中指示詞のズレと関係なく、両言語は指示詞が使われれば対応になるが、一方だけで指示詞が使われる場合

[1] 「中国語の“这”の指示範囲は日本語の「コ」より一層広い。言い換えれば、日本語の「コ」の指示範囲は極めて狭いのである。従って、“那”と「コ」の対応はない。」(梁 1986)
また、梁(1986)では「コ」と“那”の対応で非文となる具体例を挙げていない。データの中に「コ」と“那”対応している例がないのみと述べている。

は非対応と見て、分析対象として考察する。また、この論文の議論範囲では中国語指示詞“这”と“那”の違いで空間的・心理的な遠近による相違と日本語指示詞「コ」「ソ」「ア」の違いによる空間的・心理的な遠近による相違は問題にならない。

## 3　研究方法

以上の観点に基づいて、例文を下記のように収集し、分類作業を行った上、各分類に関して日中指示詞の機能を分析し、具体的に検討する。

① データ収集[2]

a. 中日・日中対訳小説(付録：資料データ)から“这”“那”形式と日本語では「コソア」表現の例文を集める。

b. 中日・日中対訳小説(付録：資料データ)から日本語で「コソア」表現と中国語では“这”“那”形式の例文を収集する。

c. 日中・中日対訳小説以外に日本語と中国語の言語資料を収集する。

② 分類：二段階の作業を実施

a. 収集したデータを現場指示と文脈指示に分類する。

b. 現場指示と文脈指示において中国語では指示詞“这”“那”形式が用いられるが日本語では指示詞「コソア」形式が用いられない構造と日本語では指示詞「コソア」形式が用いられるが中国語では指示詞“这”“那”が用いられない構造に分類する。

③ 分析：各グループを具体的に分析[3]

a. 各グループの日中指示詞の用法を検討する。

b. 例文を用い、具体的に説明し結論をまとめる[4]。

---

[2] 日中対訳小説(21 篇)と中日対訳小説(18 篇)における日本語と中国語指示詞表現を収集した。

[3] この論文の内容(第 4 章―第 7 章)は収集したデータでまとめた日中指示詞の機能差の一部分が反映されている。日中指示詞のすべての機能差が含まれていることが言えない。

[4] 各章で使用される例文は日中対訳小説から取った例文と筆者による作例の二種類がある。その中、日中小説からの例文はその後ろに出典が明記されている。一方、出典が記されていない例文は筆者による作例である。

## 4　理論上の枠組み

本研究では先行研究などの既存の理論を基づいてそれらの理論を発展的に応用する。また本研究の分析対象の言語は日本語と中国語という二つの言語であることから、これらの言語における指示詞機能の相違点を明確にし、その原因を各自言語の構成まで探究する対照言語学的方法を採る。これについて詳しく第 3 章で述べる。

## 5　論文の構成

この論文の構成は以下の通りである。

第 1 部　研究の概観

　序章　研究目的及び研究対象

　第 1 章　先行研究

　第 2 章　日中指示詞の用法

　第 3 章　日中指示詞の諸問題

第 2 部　日中指示詞の具体的な対照

　第 4 章　「N+指示詞+N」構造におけるに日中指示詞の対照

　第 5 章　「指示詞+QN」構造における日中指示詞の対照

　第 6 章　複数の修飾要素を含む名詞句における日中指示詞の対照

　第 7 章　照応関係における日中指示詞の対照

　終章　まとめと今後の展望

この論文は、大きく二部に分けられる。第一部は研究の概観、第二部では日中指示詞の具体的な対照である。

まず、第一部は序章、第 1 章、第 2 章、第 3 章からなる。序章では研究目的と研究対象、資料、この論文の構成などについて説明する。

第 1 章では日本語指示詞、中国語指示詞、日中指示詞対照など理論的な枠組みに関する先行研究を整理する。第 2 章では日中指示詞の構造上、機能上及び形態上の分類を論ずる。第 3 章は本文で関わる概念と扱う問題点について述べる。

次に、第二部は第 4 章、第 5 章、第 6 章、第 7 章及び終章から構成され、第 4 章から第 7 章までは章毎に一つの問題点を取り上げ、その問題点を考察する。この部分では日本語指示詞と中国語指示詞の対照において、今まで扱われてこなかった非対応部

分を問題点にし、具体的に分析し、その由来を探求する。その中、第 4 章から第 6 章までは現場指示に関する三つの側面を取り上げ、第 7 章では、文脈指示における非対応の問題点を提起、分析したものをまとめたものである。

第 4 章では、二つの修飾要素と指示詞を含む名詞句は、修飾要素と指示詞の位置により、[指示詞先頭型] [指示詞末尾型] [指示詞中間型] の三種類があることについて考察する。各種類において日本語と中国語指示詞の機能について分析、考察する。

第 5 章では、中国語「N1+指示詞+N2」構造は「同格構造」と「所属構造」に分けられる。日本語は「N1+という+N2」「N1+の+N2」形式と対応している。いずれも指示詞が現れていないことから日中指示詞の相違を考察する。

第 6 章では、中国語の“这么 QN”と“那么 QN”構造において指示詞を「強調の指示詞」と「概数の指示詞」に分かれている。両方にも日本語では指示詞で対応していないことからその原因を探り、議論する。

第7章では、日本語では「その」は照応の仕方に基づき、「持ち込みの『その』」と「言い換えの『その』」に分かれる。この分類をふまえて、中国語指示詞照応用法との相違を分析し、日本語の「その」に対して、中国語では量詞の種類及び量詞の有無の角度から指示詞が「内包レベルでの照応」の用法を持たない結論が得られる。

最後の終章は、この論文で提示した諸問題について結論をまとめる。また、この論文の持つ意義と今後の展望を提示する。

# 第１章　先行研究とその問題点

本章では、日本語指示詞、中国語指示詞、日中指示詞対照に関する先行研究の諸理論を整理する。なお、第 4 章―第 7 章の詳細な内容と直接関係するその他の先行研究は、各章で必要に応じて適宜言及する。

## 1.1　日本語指示詞の先行研究

日本語指示詞は三項対立とされ、使い分けは複雑である。日本語の指示詞に関する近代的な研究は、佐久間(1936)の研究から始まったといわれている。佐久間(1936)の研究の近代性としては二つの点が挙げられる。それは、代名詞を巡っての従来の品詞分類を見直し、物事や状態を指し示す単語の一群として「コソアド」という名称でまとめた点と、話し手を中心とした従来の近・中・遠の距離概念に加え、話し手と聞き手の人称概念を中心とする「なわばり」概念を導入した点である。「なわばり」概念、つまり勢力圏を中心とする分類では、「コ」を話し手の縄張り、「ソ」を話し相手の縄張り、「ア」をそれ以外の縄張りと説明した。

また、佐久間(1951)は代名詞が「名詞の代わりになる語」である考えを否定し、「直接に対象を指示する」のが、代名詞の機能であるとし、対象としての「コソアド」を取り出すためには、代名詞の名詞性から自由になる必要があると説いた。また、従来の品詞論から言えば、代名詞(これ、それ、あれ、どれなど)、連体詞(この、その、あの、どの)、副詞(こう、そう、ああ、どう)などに分けられるこれらの語を、「指す語」「指示語」とし、体系化して、「コソアド」と称したのである。指示詞＝人称区分説は、その後の研究の方向性を決定づけた。簡単に説明すると以下のようになる。

話し手と相手が対立する話の現場では、「コソアド」は眼前の指示の場に他ならない。ここで指示する、ゆび指すという動作をし、ことばによってそれを表現するものは話し手自身である。指示されるものやゆび指されるものには、人をはじめ物や事物、場所などがあるが、その場合、人と事物などの間に対応の関係があるわけである。

表(1)　人称における指示詞・代名詞の区分(佐久間)

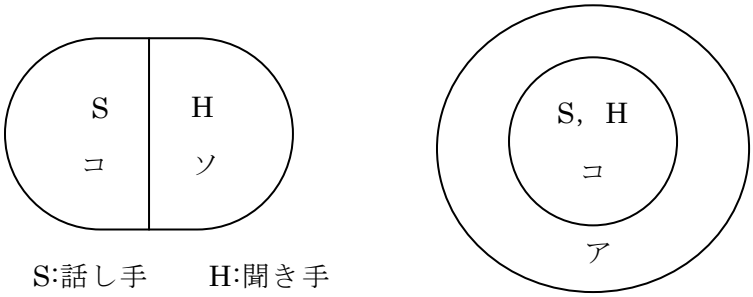
| | | 話し手 | 相手 | はたの物・人 | 不定 |
|---|---|---|---|---|---|
| 指示されるもの | 対話し手の層 | (話し手自身)<br>ワタシ<br>ワタクシ | (話しかけの目標)<br>アナタ<br>オマエ | (第三者)<br>(アノヒト) | ダレ<br>ドナタ |
| | 所属事物の層 | (話し手所属のもの)<br>コ系 | (相手所属のもの)<br>ソ系 | (はたのもの)<br>ア系 | ド系 |

表(1)のように、対人関係の「対話し手の層」と対事物関係の「所属事物の層」とは、それぞれ別個体の体系を形成しているが、それらの間に対応が認められるということである。

佐久間以降、以上のような対立関係から指示詞の使い分けを論じた研究には、三上(1955)、阪田(1971)、堀口(1978a，1978b)、正保(1981)などがある。

佐久間の二分説に対しては、三上(1955)、阪田(1971)、堀口(1978a，1978b)や正保(1981)がソの用法の反例を指摘した。三上(1955)はコ・ソ・アの三項対立の指示関係に反論を唱え、「コレ対ソレ」「コレ（ソレを吸収）対アレ」の二種二項対立であると主張している。このことの傍証として三上は、指示詞を含む慣用表現には「アチラコチラ」「アレコレ」「ソコココ」「ソレとコレとは話が違う」などにア・コとソ・コの組み合わせがあるが、ソ・アの組み合わせがないことを挙げている。この二種二項対立の指示関係を図で示すと、図(1)のようになる。

図(1)　コ・ソ・アの指示関係(三上)




また、阪田(1971)は三項対立の立場を取っているが、佐久間(1951)の説を批判して、相手の所有物であっても、コで指示し得る場合があり、逆に自分の体の一部であっても、ソで指示し得る場合があるという例を出し、「コ・ソ」が常に対立するわけではないと述べている。

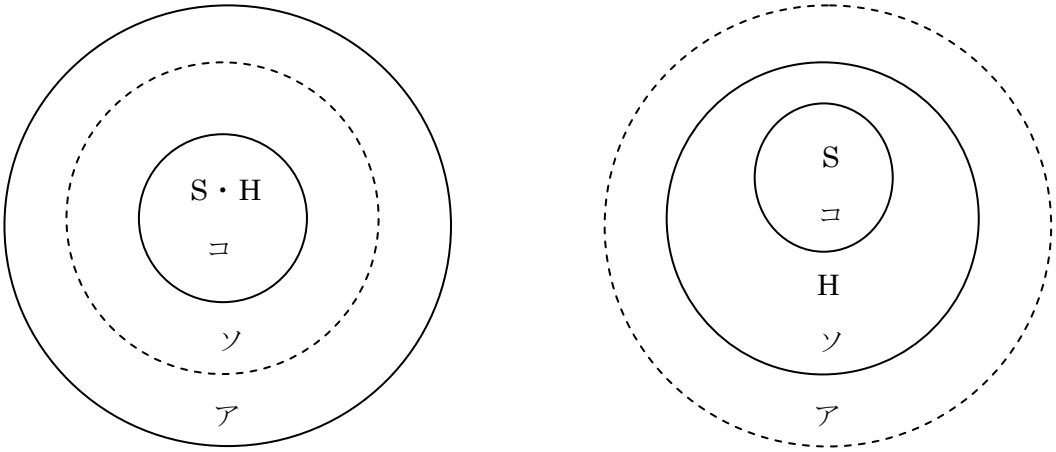
堀口(1978a，1978b)の「観念(対照)指示」とは話し手・聞き手が持つ情報という観点から異論を唱え、表(2)ののように五つの分類を挙げた。

表(2)　話し手・聞き手が持つ情報による五つの分類(堀口)

| | |
|---|---|
| 現場指示 | 話し手と聞き手が同一の空間を共有する場面において、多くの場合身ぶり・手ぶり・表情などの表現行為を伴いつつ、話し手が知覚していて聞き手にも知覚されるはずだとする物事を対象として、「コソア」系を用いて指示する用法 |
| 知覚指示 | 聞き手の存在のないような内言･独白表現において自分の知覚しているものを指す用法 |
| 観念指示 | 聞き手の存在のないような内言･独白表現において自分の観念に浮かべているものを指す用法 |
| 文脈指示 | この用法には対話において相手の表現した内容を指示対象にするものと対話にも文章にもすべてに広く用いるもので、自分の表現した内容を指示対象にするものがある。 |
| 絶対指示 | 指示対象が常に定まっていて絶対的にそれを指す用法である。 |

また、正保(1981)は、「コソア」の体系を対立型の「コソ」と融合型の「コ・ア」の double binary(二重の二項対立)として認識した。指示対象が話し手と聞き手の視野の中に存在していない場合、「弛緩したソ」が使われ、コでもアでも指しにくい、と指摘している。

図(2)　コ・ソ・アの指示関係(正保)




また、相手のなわばりの中に属すると認める場合に「緊張したソ」が使用されるとした上で、コ・ソ・アの相互関係について、次のような構造図を提示している。指示詞コ・ソ・アは対立型と融合型による三者共存の三項対立であると考えられている。

表(3)　対立型と融合型によるコ・ソ・ア三者共存の三項対立(正保)

| | 融合型 | 対立型 |
|---|---|---|
| コ | それに対する「われわれ」の関心が強いもので、近くにある人/物 | 話し手が、自分のなわばりにあると認定した人/物 |
| ソ | 「ア」で指すには近過ぎるもの、若しくは、話し手と聞き手のいずれか一方或は両者の視野にないもの | 話し手が聞き手のなわばりに属するものとして認定した人/物 |
| ア | それに対する「われわれ」の関心が強いもので、遠くにあるもの | 話し手が、「自分」の領域にも「相手」の領域にも属さないと考えたもの |

以上は対立関係(二分か三分)から指示詞の使い分けを論ずる研究であったが、次は話し手と聞き手が持つ情報という観点から指示詞の使い分けを論じる研究を見てみる。「コソア」の使い分けを話し手・聞き手が持っている情報という観点から研究した久野(1973)、黒田(1979)、神尾(1990)について述べる。

久野(1973)は話し手と聞き手が指示対象を知っているかどうかによってア系とソ系の使い分けは単に聞き手の領域であるかどうかから判断するだけでなく、話し手と聞き手が談話の指示対象に対してどう位置づけるかで決定されるとしている。

表(4)　ア系とソ系の使い分け(久野)

| ア系列 | ソ系列 |
|---|---|
| その代名詞の実世界における指示対象を話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。 | 話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。 |

また、黒田(1979)は久野の話し手・聞き手が指示対象を知っているかいないかでコ・ソ・アが使い分けられるという点に疑問を持ち、聞き手が消失した独り言の場合を取り上げて、ソとアの使い分けを指摘している。

(1)　先週神田川で火事があったが、あの火事で学生が二人死んだのか。
(2)　話し手「先週神田川で火事がありました。その火事で学生が 2 人死にました。」
　　聞き手「その火事のことは新聞で読みました。」

(黒田 1979)

黒田は、(1)と(2)から独り言ではア系が使用されること、また話し手対象を直接的知識内で捉えられても、聞き手がそうでなければ話し手は聞き手と同じ立場の概念的知識でソ系指示詞を使うということに着目している。黒田は、

「指示詞ソ・アの選択に真に本質的な要因は、話し手及び聞き手が対象を「よく知

っているか」ということではなく、話し手が、指示詞使用の場面において、対象を概念的知識の対象として指向するか直接的知識の対象として指向するか、ということにあるのである。」

に示すように独り言ではア系が使用されても、聞き手に対してソ系が使用されるのは、聞き手の領域だからソ系が選択されるのではなく、話し手が聞き手への配慮として対象を概念的知識の対象としてとらえようとするからであると述べている。

その後、神尾(1990)は情報のなわ張り理論から指示詞コ・ソ・アの領域を規定している。話し手のなわ張りに属するか、聞き手のなわ張りに属するかは与えられた情報が話し手及び聞き手にとって遠か近かによるものである。

**表(5)　コ・ソ・アと情報のなわ張り(神尾)**

| | | 話し手の縄張り | |
|---|---|---|---|
| | | 内 | 外 |
| 聞き手の縄張り | 外 | コ | ア |
| | 内 | ソ | |

また、情報の遠近を規定する条件は規定される。

話し手にとって近の情報の場合：

① 話し手自身が直接体験によって得た情報

② 話し手自身の過去の生活史や所有物についての個人的事実を表す情報

③ 話し手自身の確定している行動予定および計画などについての情報

④ 話し手自身の近親者又はごく親近な人物についての重要な個人的事実を表す情報

⑤ 話し手自身の近親者またはごく親近な人物の確定している重要な行動予定、計画などについての情報

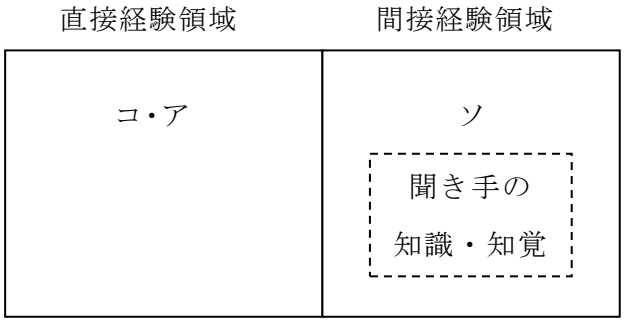
⑥ 話し手自身の職業的あるいは専門領域における基本的情報

⑦ 話し手自身が深い地理的関係を持つ場所についての情報

⑧ その他、話し手自身に何等かの深い関わりを持つ情報

これらの研究を受け、指示詞の研究を大きく展開したのは、金水・田窪(1990)の「談話管理」に基づく研究であった。これは、文脈指示における「談話管理理論」という新たな観点から、日本語の指示詞の全用法を統一的に説明している。金水・田窪は話し手の知識と聞き手の知識によって「直接経験領域」と「間接経験領域」に分類している。話し手の過去の経験や現場の事物は「直接経験領域」になり、言語的情報によって構築される要素と聞き手の知識などは「間接経験領域」になる。ここで「聞き手」の知識･知覚などは、「間接経験領域」に埋め込まれる二次的領域として規定されるにとどまる。これは「他者の知識・知覚を直接知ることは出来ない」という常識的知識から自然に帰結される事柄である。心的領域の分類は図(3)のようになる。

**図(3)　日本語指示詞と心的領域の関係(金水・窪田)**




つまり、現場指示と文脈指示を一体的に扱って、指示詞と心的領域との関係は、次のように規定される。

「コ」及び「ア」は直接経験領域にあるものを指すものである。
「ソ」は間接経験領域にあるものを指すものである。

「直接経験」「間接経験」という分け方は、ある意味で話し手からの心的「遠近」距離という視点で捉えているとも言える。

また、「ア」系は直接経験領域であり、距離的に「近」となるが、(３)では「ア」系が用いられない。

（３） 昨日、山田さんという人に会いました。{その/*あの} 人道に迷っていたので助けてあげました。 （金水・田窪 1992）

これに対して、金水・田窪(1992)では(３)でソ系が使われるのは、「山田さん」のことを知らないと想定される聞き手に対して、「山田さん」に対する話し手の思いを内包するア系を用いて「山田さん」を指示するということが配慮に欠けた行為になるという運用論的な要因によるものであると述べている。

近年、日本語指示詞の文脈指示用法において、テキストにおける結束性[1]について多くの示唆に富んだ研究をしたものとして庵(2007)がある。庵(2007)ではこれまでの指示詞の研究では明らかにされていなかった「この」「その」の選択原理を明らかにした。

「この」は話し手/書き手が先行詞を「テキストのトピックとの関連性」という観点から捉えていることを示すマーカーである。

「その」は話し手/書き手が先行詞を定情報名詞句への「テキスト的意味の付与という観点から捉えていることを示すマーカーである。

「この」「その」「ゼロ」[2]の分布の可能性は論理的に 7 通りある。

**表(6) 「この」「その」「ゼロ」の分布**

| パターン | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| この | ○ | ○ | ○ | × | ○ | × | × |
| その | ○ | ○ | × | ○ | × | ○ | × |
| ゼロ | ○ | × | ○ | ○ | × | × | ○ |
| 可否 | OK | OK | OK | × | OK | OK | OK |

○=結束的
×=非結束的

上の 6 つのパターンは次のように分類される。

[1] 結束性：「ある文がその文だけでは解釈が完結しない要素を内包している時、その文は先行/後続する文（連続）に解釈を依存しており、そのことによってその文連続性は全体でテキストを構成するこの場合、その文連鎖は「結束的」であり、そのテキストには「結束性」が存在する。」（庵 2007）
[2] 「ゼロ」：指示詞を伴わない場合である。

先行詞が顕著(salient)　　→パターン 7

↓YES　　NO

先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えることが義務的　　→パターン 6

↓NO　　YES

言い換えがない　　→パターン 5

↓YES　　NO

先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えることが可能　　→パターン 3

↓YES　　NO

名詞の定可能性が高い　　→パターン 2

↓YES　　NO

パターン 1

庵の研究によってこれまで体系性があまり認められてこなかった「テキスト」の中から結束性を取り上げられ、それが「文法」として研究できることになった。

### 1.2　中国語指示詞の先行研究

中国語指示詞“这”、“那”に関する研究は大まかに三つの段階に分けられる。第一段階は梅祖麟の研究及び吕叔湘の研究を代表とするもので、彼らは歴史的比較の観点から“这”“那”の出所や機能の変遷について研究した。“这”については、吕(1964)は“这”のもととなる字は“者”であると主張し、陈(1964)は“适”の草書を楷体したものだと主張し、梅(1985)は“只没”から変化したものだと主張し、叶(1988)は新しく生まれたものだと主張し、王(1990)は“之”から進化してきたものだと主張した。“那”の起源については、吕(1964)は音声に対する考察を通じて、“那”は“若”から変化してきたものだと主張した。

第二段階は吕の《现代汉语八百詞》(1980)を代表として、構造主義言語学(“结构主义语言学”)の影響を受けながら、指示詞“这”“那”の形式及び使い方を以下のよ

うに詳細に描写した。この本は前人の業績を受け継ぎ、新しい研究の道を開いた著作と言える。

**表(7)　“这”“那”の使い方**

| “这” | “那” |
|---|---|
| 【指示詞】近くの人，あるいは事物を指す。“这+一動/形”:“这”は意味を強める。“这么・这样”に同じ。《口》動詞・形容詞の前に用いる。誇張を表す。<br>【代詞】近くの人・事物に代えて用いる。“那”に対して用いる。多数の事物を表し、特定の人や事物を指さない。“这些”に同じ。《口》現在を指す。意味を強める。ふつう後ろには“就・才・都”などを用いる。 | 【指示詞】比較的遠くにいる人や事物を指す。“那+一動/形”:必ず後ろに節が続く。“那”は意味を強める。“那么”“那样”に同じ。《口》動詞・形容詞のまえに用いて誇張を表す。“那个”に同じ。<br>【代詞】比較的遠い所にいる(ある)人と事物の代わりに用いる。“这”に対して用いる。事物が多いことを表す特定の人や事物を指さない。“那些”に同じ。結果を表す節を導く。接続の機能を果たす。 |

『中国語文法用例辞典』[3]呂叔湘主編；菱沼透［ほか］訳(2003)

《现代汉语八百词》では、“这”“那”以外に“这点儿・这个・这会儿・这里・这么・这么点儿・这么些・这么样・这么着・这儿・这些・这些个・这样・这阵儿”“那点儿・那个・那会儿・那里・那么・那么点儿・那么些・那么样・那么着・那些・那些个・那样・那阵儿”の使い方も具体的に例で説明している。

また、吕(1985)《现代汉语指代词》では、“这”“那”の文法的な機能を「指示」「代行」「承接」の三つに分けている。同時に、文章の中における語用的機能[4]と非対称現象[5]にも触れ、後進の研究を啓発した。

---

[3] 別書名：『現代漢語八百詞(増訂本)』

[4] 「語用的機能」: ここでは中国語の指示詞“这”“那”の虚化用法を指している。”指示詞“这”“那”は本来の指示詞としての機能が弱まり、別の機能語として働いている場合を虚化用法と言う。具体的にどのような機能語になっているのか第4章、第5章と第6章で論じる。

[5] 「非対称現象」: 指示詞含む構造によって、“这”と“那”の使用比率に明らかに差がある現象が見られること。つまり、ある構造において“这”が圧倒的に多い、“那”が少ない場合と逆に“那”が圧倒的に多い、“这”が使えるが少ない場合も存在する。

さらに、吕(1990)「指示詞的二分法和三分法」では、指示詞の構成体系問題(二分か三分か)について論じ、“这”“那”の構成と機能研究の基本的枠組みを定めた。

① “这”“那”は以下の三つの形式がある。

a. “这(个)、那(个)”

b. “这/那+数量詞+名詞”

c. “这/那+些+名詞”

② “这”“那”の文法的な機能は「指示」「代行」「承接」である。

③ “这”“那”の指示は指さしあるいは他の条件と伴って初めて“这”“那”の指示が成立する場合もある。

第三段階は张・方(2001)、曹(2000)、沈(1999)等の研究を代表として、機能的視点を中心に“这”“那”の虚化した文法的な意義や文章における役割と非対称現象を考察したとともに、認知的視点から比較的合理的な解釈と説明を行った。

近年、多くの研究者は言語事実の認知的解釈に注目している。これは欧米の研究成果に鑑みた面もあるが、機能研究の必然的趨勢でもある。多くの言語的事実は機能を用いて解釈するだけでは充分とは言えず、人間の認知能力の中より深いところに根ざす解釈を見出す必要がある。その中で、张・方(2001)は現場から実録した北京口語を研究素材としているため、理論に適合するよう強引に例文を作る弊害を免れることができたと同時に、多くのリアルな言語現象を発見した。標準語の将来にわたる発展の方向性を効果的に予測し、“这”“那”に関する具体的な研究が大きな進展を遂げた。提起された指示詞の文法化問題は「文法化」[6]の概念を発展させ、虚詞意義の「虚化」[7]の研究に新たな理論依拠を提供した。また、“这”“那”に関する研究の中、崔(1997)曹(2000)は大量の言語資料に対する統計的な分析をベースにし、沈(1999)は「標記論」

---

[6] 「文法化」: 指示詞“这”“那”の本来の指示意味が弱まり、新たな文法範疇と文法成分として働くことを「文法化」とも言う。

(1)(2)の指示詞“这”“那”は特に具体的な指示対象を何も指していない。

(1) 我这舞跳得也够灰心的。(张・方 2001)
(私の気持ちがこのダンスをする事に挫けた。)

(2) 你那孙子装的也够可怜的。(张・方 2001)
(お前は十分に哀れそうにとぼけているね。)

このような本来のダイクシス性を失ってしまった指示詞は「文法化」の一種である。

[7] 「虚化」: 虚詞は具体的な意味を持たない文法成分である。指示詞は本来の指示意味が弱まり、具体的な意味を持たなくなる「虚詞」のような機能語になる現象は「虚化」と言う。

[8]を用いて“这”“那”の非対称現象に対する解釈を行っている。

第三段階での研究を従来のものと比較してみると、分析の幅と理論の深みはともに進展した。静的な文法表現に限った記述に留まらず、実際の文章、談話における動的な言語の使用を考察した。この論文も中国語指示詞の文法化問題を中心として論じる。

中国語指示詞の研究は機能と構造を中心として研究されていると見られる。一方、同時期の日本語指示詞研究方向に影響されているかもしれないが、日本人中国語学者は中国語指示詞への研究が主に“这”“那”の使い分けを中心に研究していると見られる。

讃井(1988)では、下記のようにまとめている。

① 現場指示において、指示対象が話し手の個人領域の中にある場合には“这”を、個人領域の外にある場合には“那”を用いる。共通談話領域を形成する場合、指示対象がその中にあれば“这”を、外にあれば“那”を用いる。

② 文脈指示においては、先行詞のあらわれる位置が話し手の視点から近いか遠いか、指示対象の存在位置が話し手の視点から近いか遠いかという「遠近」の区別によって下記のような原則がある。

a. 話し手の視点が伝達の重要なポイントではないという前提のもとで、指示代名詞の先行詞が話し手によって提示されたばかりであるときには“这”を使い、比較的以前にすでに聞き手に紹介されている場合には“那”を使わなければならない。

b. 先行詞が提示されたばかりであっても、Topic としての主語が誰かに代わる場合には“这”ではなく“那”を使わなければならない。

c. 話し手の視点が伝達の重要なポイントであるという前提のもとでは、先行詞が提示された場からであってもその先行詞を示す指示対象の存在位置が話し手の時間的、空間的視点と一致しない場合は“这”ではなく“那”を使わなければならない。

[8] 「標記論」: 言語においていろいろ不対称の現象が存在している。一つの理論でその現象を統一する。その理論は標記論である。沈(1999)では中国語指示詞“这”“那”の不対称現象について標記論を基づいて解釈を行っている。

この原則の中で②b だけ遠近の概念とは直接には無関係である。他は“这”は「近指」[9]、“那”は「遠指」[10]であると説明できる。

### 1.3　日中指示詞対照の先行研究

日本語と中国語指示詞の対照分野においては梁(1986)、木村(1992)、秦(1995)、李(2005)、尹(2007)、加藤(2008)などの研究がある。

梁(1986)は、主に中国語の“这”“那”は遠近、既知・未知で捉えられるとし、三つの原則と現場指示・文脈指示における日中指示詞の対応関係をまとめている。

① “这”は、空間的・時間的に話し手に近いもの、または空間的・時間的に話し手から一定の距離にあるものであっても、聞き手にもよく知られ、精神的に近いと感じられるものを指示する場合に用いる。

② “那”は、空間的・時間的に話し手から離れたもの、しかも聞き手がまだ知らないことを指示する場合に用いる。

③ ただし、空間的・時間的に話し手から離れたものを指す場合、その指示対象の存在を知っているものであっても“这”で指すことはできない。

これをまとめると、表(8)のようになる。

表(8)　現場指示・文脈指示における日中指示詞の対応関係(梁)

| | 現場指示 | | 文脈指示 | |
|---|---|---|---|---|
| | 这 | 那 | 这 | 那 |
| コ | ○ | × | ○ | ○ |
| ソ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ア | ○ | ○ | ○ | ○ |

この表に見られるように、日中指示詞で対応しないのは「現場指示」における「コ」

[9] 近指：近称、近くにあるものを指す。
[10] 遠指：遠称、遠くにあるものを指す。

と“那”だけであり、後は現場指示において“这”と「コ」「ソ」「ア」、“那”と「ソ」「ア」、文脈指示において“这”と「コ」「ソ」「ア」、“那”と「ソ」「ソ」「ア」に対応できる。

木村(1992)は、日中現場指示における用法の相違点について、詳細に論じている。現場指示において、同じく「遠近」の認識から中国語指示詞の「ワレの領域」か、「外側の領域」か、または両者を含めている「われわれの領域」の視点によって使い分けることを論じた。ここではさらに「近距離であっても、モーダルな要因によって「遠く」感じられる場合には“那”によって指されることになる。(4)は至近距離にある相手側の対象が対立的視点から“那”で指し示される典型的例の一つである。“你那边用劲往里拉！”は、とてつもなく巨体の老人を小さいな乗用車の座席に無理やり押し込めようと悪戦苦闘する娘が、反対側の入り口から身を乗り切れてこの老人を引っ張っている相手に向かって発したものである。

（4） 慢点！慌什么！好，用劲！怕什么？甭怕他叫唤，
用劲儿往里推！你那边用劲往里拉！
(ゆっくり!何を慌てているの?さあ、しっかり!大丈夫よ。呼んでも気にしないで、思いっきりおして！あんたそっちから思いっきり引っ張って！)

(木村 1992)

巨体を間にして、押し込む自分と引き入れる相手という対称的な立場であり方が、「こちら」対「向こう」という対立的な視座を生み、その結果“那”が選ばれているものと述べている。いずれにしても指示詞の選択を決定するのは自分と対象との間に感じられる物理的・心理的な遠近感であって、相手の存在はこの遠近の認識に影響を与える一要因であるに過ぎない。「中国語の指示詞の運用はあくまでも自己中心的である。」と、新たに中国語指示詞の運用は話し手の「自己中心」であることを指摘している。

また、秦(1995)では、主に文法と翻訳の角度から日中指示詞を比較して分析を行った。結論は以下のようになっている。

① 日中指示詞の文法における大きな差異として、日本語の指示詞体系には中称指示詞[11]があるが、中国語の中にはない。

② 文法上の特徴としては中国語指示代名詞[12]が動詞目的語として用いられる事が少なく、日本語は多い。

（5） これを象形文字といいます。

（6） わたくしはこれを買います。

（7） それをみせてください。

（8） 您把这都交给我吧。（これを私に下さい。）

（9） 小王对那不感兴趣。（王さんはそれに興味ない。）

（秦　1995）

李(2005)では、主に日本語指示詞の使用法から両者の区分基準について考察した。日本語指示詞の現場指示用法と文脈指示用法に対する研究と中国指示詞との比較を通して、日本語指示詞の区分は話し手と聞き手の二重標準が存在し、両者とも基準の区分に関与すると主張した。しかし、中国語指示詞の区分は完全に話し手の判断に頼っている。日中指示詞の共通点としては、両者が指示対象の遠近の認定に関与する絶対的な遠近距離概念を持たないことが挙げられる。

尹(2007)では、指示詞を選ぶ際の空間的な要因、心理的な要因及び文章における指示詞の三つの角度から日中指示詞を対比した。その中で、心理的な要因が指示詞の選択に及ぼす影響を強調し、日本社会が人間関係を重視しており、指示詞の選択も「内」、「外」意識に制約を受けているが、中国人ははっきりと示す行動様式や思考スタイルのため、“这”“那”は日本語のような「内」、「外」意識制約を受けないと指摘した。

加藤(2008)では、日本語「コソア」に中国語の“这”“那”が対応しない場合、逆に“这“那”に日本語の「コソア」が対応しない場合、両者の対応関係を考察した。『日中対訳コーパス』[13]に収録された対訳小説 5 篇を取り上げて、分析した。日本語

11 日本語指示詞「ソ」に相当するものである。
12 中国語では指示詞は代名詞の一種と分類される。「指示代名詞」とも言う。
13 『日中対訳コーパス』: (2003)北京日本学研究センター(中国語原文のものが 23 篇、日本語原文のものが 22 篇)

の「コソア」と中国語の“这”“那”は相互に対応しない場合が全用例の半分の例もあった。特に突出しているのは、原文日本語に「コ」も「ソ」も「ア」もないところに訳文中国語で“这”が当てられている例が、原文中国語に“这”があるのに訳文日本語「コ」も「ソ」も「ア」もない例の倍になっているところであるという分析結果であった。原因として、以下の三点をまとめている。

① 指示対象自体を省略、または、補充しているために対応しない。
② 日本語の「コソア」と中国語の人称代詞、または具体的な名詞句が対応する。逆に中国語の“这”“那”と日本語の人称代名詞、または、具体的な名詞句が対応する。
③ 導入済みの、既知の人・物を指すのに、日本語では「コソア」で指し、中国語では名詞だけで指すため対応しない。逆に中国語では“这”“那”で指し、日本語では名詞だけで指すため対応しない。
④ 日本語の名詞の前の長い修飾句を中国語では別にして指し直すために“这”が加えられる。

### 1.4 先行研究から見られた問題点

以上の先行研究から見れば、日本語指示詞の研究は対立関係からの研究であれ、話し手と聞き手が持つ情報という観点からの研究であれ、「談話管理」観点であれ、研究の中心は指示詞「コ・ソ・ア」三者の使い分けにある。また、中国語指示詞の研究は主にその機能と構造を中心として研究していると見られる。先行研究から見ると、日本語指示詞の研究と中国語指示詞の研究はそれぞれの分野でずっと同じ方向に進んでいるのである。これは、日本語のみでの「コ・ソ・ア」に対する研究と中国語のみでの“这”“那”に対する研究の限界があるということである。

更に、今までの日中指示詞の対照研究で指摘されている一番の点は、距離的・物理的の「遠近」から心理的・空間的などにおいて話し手が「近い」と認識し、あるいは「遠い」と認識するという「遠近」認識であり、着目点はやはり日中指示詞のズレとその使い分けにあった。

この論文では、先学の研究に導かれつつ、本来の日中指示詞の使い分けより対応非対応の観点から出発し、日中指示詞の一方しか持っていない機能及びなぜ相手はもっ

ていないのかと両言語の根本的な仕組みや構成の相違を見つけることを目標とし、研究することとする。

# 第 2 章　日中指示詞の用法

日本語にも中国語にも物事を指示する指示詞というものがある。この論文は日本語と中国語の指示詞の対照を考察する前に、指示とは何か、日中指示詞についてをはっきりさせる必要がある。

## 2.1　日中指示詞

指示詞とは意味的には談話が行われている現場に存在したり談話の中で登場する指示対象を指し示したりするために使用する言葉である。

指示詞の権威的な定義は次のような二種類である。

- Fillmore(1968)は指示語が言語行為の参加者と行為が発生している空間、時間、すなわち文脈と連結されてこそ理解できるような語彙と文法単位であると指示詞を定義した。
- John Lyons(1972)は「指示語で表した話題で触れた人、物、事件、過程、行為は言語行為とその参加者(話し手、聞き手)が構成した時空的な言語環境によって明確」と述べた。要するに、指示詞の指示内容は言語行為の参加者、言語行為が発生する空間及びその時間と連結されなければ、理解できない。

日本語では「指示詞」という概念が使われるようになったのは佐久間(1936)からであり、その中で「コソアド」系列を合わせて指示詞と定義された。それから、日本語は系統的な指示詞があり、それは「コソア系列」と呼ばれている。

中国語指示詞は「指示代詞」とも呼ばれている。「代詞」[1]の一種と分類されている。中国語の代詞は普通、「人称代詞」「指示代詞」「疑問代詞」三つの部分で構成されている。この論文の研究対象は「指示代詞」に限る。

[1] 中国語の「代詞」には「代称」と「限定」の二つの作用がある。何を限定しているか、何の代称であるかは、一定の話の場面がなければはっきりしない。

中国語代詞
- 人称代詞：我(私)、你(あなた)、他(彼)、我们(私たち)、你们(あなたたち)、他们(彼たち)…
- 指示代詞：这(これ)、那(それ)、这些(これら)、那些(それら)、这样(こんなに)、那样(そんなに)…
- 疑問代詞：谁(だれ)、什么(何)、哪(どこ)、怎么(どう/どのように)、多少(いくら/どれほど/どれだけ)

指示代詞の中で最も基本的なものは、近称指示の“这”と遠称指示の“那”である[2]。そのほかの指示代詞はすべてこの二つから派生してできたものである。

この論文で対照の対象となっているのは日本語指示詞「コ・ソ・ア」と中国語“这”“那”である。

## 2.2　日中指示詞の構成体系

日本語指示詞と中国語指示詞の根本的な違いは日本語指示詞近称の「コ」、中称の「ソ」、遠称の「ア」三系列に対して、中国語の指示詞は近称の“这”と遠称の“那”の二系列がある。

日本語指示詞の基本的な三分が以下のようになっている。最初に[近称]「中称」「遠称」と規定したのは佐久間(1951)であった。

表(1)　日本語指示語がもたらす距離の分類

| | 日本語指示詞 | |
|---|---|---|
| 近称 | コ | 話し手自身の勢力範囲に属す。 |
| 中称 | ソ | 相手の勢力範囲に属す。 |
| 遠称 | ア | 話し手と相手以外の範囲のすべてに属す。 |

[2] 『現代中国語文法総覧』(1997)(刘月华「ほか」著　相原茂監訳)

佐久間(1951)では、伝統的な遠中近関係で区別する考え方と同時に、人称代名詞を加えて考えるべきだと指摘した。話し手と聞き手の人称概念を中心とする「なわばり」概念を導入した点である。つまり勢力圏を中心とする分類では、「コ」を話し手の縄張り、「ソ」を話し相手の縄張り、「ア」をそれ以外の縄張りと説明した。こして、三項対立の関係を挙げた。

表(2)　人称における指示詞・代名詞の区分(佐久間)

| | | 話し手 | 相手 | はたの物・人 |
|---|---|---|---|---|
| 指示対象 | 対話し手の層 | (話し手自身)<br>ワタシ<br>ワタクシ | (話しかけの目標)<br>アナタ<br>オマエ | (第三者)<br>(アノヒト) |
| | 所属事物の層 | (話し手所属のもの) | (相手所属のもの) | (はたのもの) |
| | | コ系 | ソ系 | ア系 |

【コ系】

(1)　人、事物を指示、代称する。

こいつはいい人だ。

(2)　場所・方位を指示、代称する。

ここは病院です。

(3)　時間を指示、代称する。

この頃調子はどうですか。

（4） 数量を指示、代称する[3]。

これらは李さんのリンゴです。

（5） 性質、方式、程度を指示、代称する。

こんなにきれいな場所は珍しい。

**【ソ系】**

（1） 人、事物を指示、代称する。

それはリンゴです。

（2） 場所・方位を指示、代称する。

リンゴはそこにある。

（3） 時間を指示、代称する。

その時はその時です。

（4） 数量を指示、代称する[4]。

それらは私のものです。

（5） 性質、方式、程度を指示、代称する。

そんなに多くは食べきれない。

**【ア系】**

（1） 人、事物を指示、代称する。

あいつはだれ?

あれはいくらですか。

---

[3] 「これら」の指示対象は複数である。指示対象「人、事物」である「コ系」(1)と区別する。
[4] 「それら」の指示対象は複数である。指示対象「人、事物」である「コ系」(1)と区別する。

（２） 場所・方位を指示、代称する。

あそこにだれか立っている?

（３） 時間を指示、代称する。

あの日は李さんが来たと記憶している。

（４） 数量を指示、代称する[5]。

あれらは全部学校の本です。

（５） 性質、方式、程度を指示、代称する。

よくまあ、あんなに図々しく言えたものだ。

これに対して、《现代汉语八百词》[6]では、“这”は「話し手にとって近いものを指示する」「話し手にとって近いものを代行する」場合に用い、“那”は「話し手にとって遠いものを指示する」「話し手にとって遠いものを代行する」場合に用いると指摘している。この考え方は中国語教育でも広く用いられている。

**表(3) 日本語指示詞がもたらす距離の分類**

| | 中国語指示詞 | |
|---|---|---|
| 近称 | 这 | 話し手にとって近い範囲 |
| 遠称 | 那 | 話し手にとって遠い範囲 |

[5] 「あれら」の指示対象は複数である。指示対象「人、事物」である「ア系」(1)と区別する。

[6] 吕叔湘(1980)《现代汉语八百词》商务印书馆

【近指】

（1） 人、事物を指示、代称する。

这就是我们的英雄，一个很普通的工人。

（このごく普通の労働者こそ我々の英雄だ。）

这个苹果真好吃。

（このりんごはとてもおいしかった。）

（2） 場所・方位を指示、代称する。

你来这里多久了？

（ここにきてどれくらい経った?）

赶快离开这儿。

（急いでここを離れなさい。）

（3） 時間を指示、代称する。

这会儿生病真是耽误事。

（この時病気になるのは本当に仕事の支障になる。）

（4） 数量を指示、代称する。

这些老掉牙的节目都看腻了。

（これらの時代遅れの番組にもう飽きた。）

（5） 性質、方式、程度を指示、代称する。

上海没有那么繁华。

（上海はそんなに賑やかではない。）

这么简单的道理都不明白？

（こんな道簡単な道理もわからないのか? ）

【遠指】

（1） 人、事物を指示、代称する。

那个戴帽子的小姐真漂亮。

（あの帽子をかぶっているお嬢様はとてもきれいだ。）

那东西谁的?

（あれは誰のものですか?）

（2） 場所・方位を指示、代称する。

他去上海了，在那里可以有些安宁。

（彼は上海に行った。あそこだったら少しは落ち着ける。）

（3） 時間を指示、代称する。

那会儿茶馆里没有太多人喝茶。

（あの時、喫茶店にいる人はそれほど多くない。）

（4） 数量を指示、代称する。

那些人都怎么了，疯了似的购买矿泉水。

（あの人たちはどうしたんだ?気が狂ったみたいにミネラルウォーターを買っている。）

（5） 性質、方式、程度を指示、代称する。

文化交流不需要那么多的政治色彩。

（文化交流にはあんなに多くの政治的な要素がいらないのだ。）

Anderson and Keenan(1985)は言語の指示系統を distance-oriented system[7]と person-oriented system[8]の二種類に分けている。person-oriented system は中国語

[7] distance-oriented system：(距離指向型)指示対象が話し手と聞き手までの距離で定位される場合である。

[8] person-oriented system：(人称指向型)指示対象が話し手を基準にして定位される場合である。

のような二分類で用いられるもので、話し手が唯一の指示参照物となる指示系統で、一般的である。distance-oriented system は日本語のような三分類で用いられるもので、通常聞き手の要素と関わっている指示系統である[9]。

### 2.3　日中指示詞の形態

指示詞は形態的に限られた数の語根から派生され、文の中でいくつかの品詞として使われる言葉であるという特徴を持つ。指示詞は指示領域の違いによって、場所、時間、方式、性状、方法、程度などに分かれている。

日中指示詞は形態的に以下のように分類できる。

**表(4)　日本語と中国語の指示詞の形態の分類**

| 指示領域 | 日本語(近・中・遠称) | 中国語(近・遠称) |
|---|---|---|
| もの/場所/方角 | これ・それ・あれ<br>ここ・そこ・あそこ<br>こちら・そちら・あちら | 这那<br>这里・那里<br>这儿・那儿 |
| 指定/性状/属性 | この・その・あの<br>こんな・そんな・あんな | 这个・那个<br>这么・那么 |
| 様態/程度 | こんなだ・そんなだ・あんなだ<br>こんなに・そんなに・あんなに | 这样・那样 |
| 人 | こいつ・そいつ・あいつ | 这家伙・那家伙 |
| 方法 | こう・そう・ああ | 这样・那样 |

表(4)が示しているように、日本語指示詞の「場所」「性状」「様態」「方法」などを指すすべての指示形態に対して、中国語指示詞も同じ対応が見られる。日本語の「コ・ソ・ア」は系列ごとに、話し手と素材との関係概念とともに、その素材の範疇概念も合わせて表現するものと言われている。同様に、中国語指示詞は“这儿・那儿・这样・那样・这么・那么”は各々関係概念とともに「場所」「性状」「容子」「程度」などの範

[9] 中国語指示詞“这”：話し手より近いものを指す。“那”：話し手より遠いものを指す。
日本語指示詞「コ」：話し手より近いものを指す。「ソ」：聞き手より近いものを指す。
「ア」：話し手と聞き手より遠いものを指す。

疇概念を表す。

## 2.4　日中指示詞の文法的機能

日本語指示詞は名詞、副詞、連体詞及び形容詞に跨っている。杨(2007)では日本語指示詞を名詞類指示詞、連体詞類指示詞、ナ形容詞類指示詞及び副詞類指示詞に分類している。(例は杨(2007)による)

（1）　名詞類指示詞

こいつが賢い。

これを田中さんに渡してください。

トイレはそっちにあったのです。

（2）　連体詞類指示詞

この服にしよう。

そのリンゴを食べたいな。

あの山の向こう。

（3）　ナ形容詞類指示詞

このような事態は避けたかった。

そういうわけで欠席します。

あのような過去は忘れられます?

（4）　副詞類指示詞

こうしよう。

そうする。

ああは言ったが。

これに対して、吕(1980)(1985)ではすでに系統的に中国語指示詞“这”“那”の文法位置を研究している。

（1） 主語

a. “这/那”+名詞

这个人是个笨蛋，什么都不行。

（この人はバカだ、何もできない。）

b. “这/那”(+数詞)+量詞+名詞

这个人就是小王。

（この人は王さんだ。）

c. “这/那”(+数詞)+量詞

这一包有巧克力，饼干，花生等等，慢慢吃吧。

（この一袋にはチョコレート、ビスケット、ピーナツが入っている。ゆっくり食べなさい。）

d. “这/那”

这是根据小说编辑的电影。

（この映画は小説を原作としたものだ。）

（2） 修飾語

a. “这/那”(+“一”)+動詞/形容詞

干不干？这一转眼就发达了，成为亿万富豪了。

（やるか、やらないか。瞬く間に成り上がって、億万長者になるよ。）

（3） 目的語

a. “这/那”+名詞

我刚准备过去，就有人抢先一步抱起了这孩子。

（ちょうど行こうとしたところ、真っ先に別の人にこの子供を抱かれた。）

b. “这/那”(+数詞)+量詞+名詞

短短时间，就翻译出这四部作品。

（短時間にこの 4 冊の作品を翻訳した。）

c. “这/那”（+数詞）+量詞

你试试这个。

（あなた、これを試してみてね。）

複数の場合、日中指示詞の相違が見られる。中国語指示代名詞（例えば、“这些（これら）”“那些（それら）” “这么些（こんなに+複数）”“那么些（そんなに+複数）”など)は日本語では表せない場合もある。例えば、

（１） 读那么些书，到底有没有用呢。

（それほど本を読んで、一体どれぐらい役にたつのか?）

（２） 他的力量能照顾这么些人。

（彼の力ならこのぐらいの人をお世話できる。）

（３） 你的那些师兄师姐呢？

（あなたの先輩たちは?）

これは、日本語では現場に物があれば、複数（これら、それら、あれら）を明示しなくても複数の指示ができるのである。例えば、（４）のように「これ」で複数のものが指示できる。一方、中国語では複数を指示する場合、必ず複数の指示詞が必要となる。

（４） これは本です。

## 2.5 日中指示詞の語用的機能

### 2.5.1 “这”“那”の機能

“这”“那”の機能については、呂は《中国文法要略》（1982）で“这”“那”が必ず修飾語を伴い、指示する機能を「助指」[10]と定義した。また、《近代汉语指代词》（1985）では指示詞“这”“那”が「代用機能」と「指示機能」の二重性を持つと論じ、“这”

[10] 原文：“助指是说指称词伴同加语才能产生指定的作用。”（吕 1982）

“那”の機能には「指示」、「代用」、「文脈承前」という三つの機能があると述べた。さらに指示詞が指示する先行表現はすでに定であり、指示する必要のないとき、指示詞“这”“那”の持つ意味合いも次第に虚化することを指摘している[11]。その後、《指示代名詞的二分法和三分法》(1990)で、改めてその役割を「指示」、「区別」と「代用」の三類に分けた。指示詞の虚化に関して张・方(2001)では一種の「文法化」の概念を発展させた。

まとめると、この論文では「指示機能」、「代用機能」、「承前機能」、「区別機能」、「話題標識」「助指」という六つの機能を提出する。

（1） 「指示機能」は現場にある人、物、物事や文脈や会話での先行詞あるいは後ろに出てくる人、物、物事を指し示す機能である。

这两本书是谁的？
（この 2 冊の本は誰のものですか。）

（2） 「代用機能」は文を簡潔するために、前文の成分(指示される名詞)を省略されたのである。

宝钗笑道：“史大妹妹有一个，但比这个小些。”
贾母到：“原来是云儿有这个。”
(宝釵が「湘雲さんがお持ちでいらっしゃいます。これより幾分小さめでございますけど…」)
(「そう、そう湘雲が持っていましたっけ」と、後室が言いました。)
(李 2009)

（3） 「文脈承前」は代行機能から派生された機能である。前文の名詞(句)は省略され、前後文脈を繋がる機能である。主語と目的語になる場合もあるが、重要で

[11] 原文：“名词本身已经有定，无需指别的场合，例如这个名词是泛指同类事物的，或是那个事物本质上只有一个或是此时此地只有一个的，在这种场合，别种语言往往有加用‘有定冠词’的，……近代也常常加用“这”或“那”，我们不妨称这个是冠词性的。”(吕 1985)

はない成分の場合もある。

我今天就是为了这个来的！看！他马上又高兴起来。　　（《人啊人》）
（今日、私はこのためにきた。見てごらん、彼は直ちにまた嬉しそうになった。）

（４）　「区別機能」は同類別の二つの物事、あるいは他と区別する場合、片方を強調する。

这个红的是我的。
（この赤い色のは私のです。）

（５）　「話題標識」は実体性に乏しい事柄の内容を指す“这”“那”はもう指示性を失い、単なる接続機能になる。

什么东西！哪有点机器人的样子，快赶上我们胡同里那些脏妞儿了。
看来这机器人要学坏，比人速度不慢。　　（方・张 1996）
（「なにそれ！ロボットになってないわよ。うちの近くの横丁にうろうろしている汚い連中みたい。」
「まあ、ロボットというものが悪いことを覚えるのも人並みのようだね」）

（６）　「助指」は吕(1982)が「“这”“那”が必ず他の修飾語を伴い、指示する機能」と定義したものである[12]。主に所属性の修飾語、同格性の修飾語、描写性の修飾語、動詞述語文と組み合わせて、後ろの名詞を修飾する。

张华这个人非常小气。
（張華という人はとてもケチだ。）

この論文では「話題標識」「助詞」が指示詞の虚化用法と見做す。なお、「話題標識」

[12] 原文：“助指是说指称词伴同加语才能产生的指定作用。”（吕 1982）

の指示性が失われたことに対して、「助指」の指示の力が弱くなったが、全部失われたわけではない。日中指示詞の語用的な機能を比較し、最も目立つのは中国語指示詞の「虚化用法」は日本語指示詞が持っていないことである。この論文では、第 3 章から第 6 章まで議論される中国語指示詞の部分は「虚化」用法である。

### 2.5.2　日本語指示詞の機能

日本語指示詞は、大きく「現場指示」と「文脈指示」に分けられている。

- 「現場指示」とは基本的には対話・講演など話し手と聞き手が同一の空間を共有する場面において多くの場合、身振り・手振り・表情などを伴う指示である。
- 「文脈指示」とは現場ではなく、会話や文中に先出した人・物・事物などに言及する際に用いられる指示である。

中国語指示詞の機能は、「指示機能」、「代用機能」、「承前機能」、「区別機能」、「話題標識」、「助指」の六種類に分類できる。このような分類に当てはめると、日本語指示詞の機能は「指示機能」、「限定機能」、「代用機能」、「文脈承前」の四つに大きく分けられる[13]。

（1）　「指示機能」は場にある人、物、物事や文脈や会話での先行詞あるいは後ろに出てくる人、物、物事を指し示す機能である。

　　このリンゴは父が買ってくれた。

（2）　「限定機能」は名詞を名示す意味の範囲に限定する。そのままの形で受けづくものの他に、先行文脈の語句と関連がある語や先行文脈の語句を変えて受け継ぐ場合もある。

　　それを教えるのは、アメリカから帰国した先生です。この先生はとても有名

[13] 日本語ではこのような分類に対して議論する必要がある。この論文では議論しないことにする。

な哲学学者です。

左の手はしっかりテーブルにおいている。その指の間から血が流れてきた。

（3） 「代用機能」は先行するテキストの表現の特定部分をうけるという形で既出の情報を他の言語表現で引き継ぐ機能である。

仲間が記念品代として集めた 500 万円を基金にし、その利子を賞金にする計画だ。

『セルフ・マスターシリーズ 4』

（4） 「文脈承前」は第 2 文で省略された前文の名詞(句)の成分になり、前後文脈を繋げる場合である。

人生ではお金より大切なものたくさんある。これは誰でも知っている話ですが、その通りに生きている人が少ない。

### 2.6 本章のまとめ

本章では日本語と中国語の指示詞を形態上、体系上及び文法的用法、語用的用法をまとめた。

① 日中指示詞は同じく各自の言語の中で指示詞と呼ばれているものは二分類と三分類という指示系統の違いによって「体系」、「指示範囲」が異なる。

② 両言語の間で指示詞の文法的な機能に差が見られる。中国語の複数を表す指示詞“这么些”“那么些”の文法構造に日本語では対応できない部分もある。

③ 語用的機能も完全には一致しない。中国語指示詞の「虚化用法(助指)(話題標識)」は日本語指示詞が持っていないものである。

以上のように、日中の指示詞には用法の共通性もあるが、その相違点もある。この論文では、それぞれの用法は共通性も認めた上で、相違点を分析、考察し、日中指示詞が各自言語の中で持つ役割とそのレベルを探求する。

# 第 3 章　日中指示詞に関する諸問題

## 3.1　概念

指示詞の最も本来的な意味はと言えば、聞き手が指示対象を見つけ出せるような「場」の中の特定な場所に注意を向けるべく導くという指示機能である。日中指示詞とも現場指示においても文脈指示においても指示機能以外に様々な機能が働いている。

この論文で扱う際にそれらの定義は以下の通りとする。

- 現場指示とは基本的には対話・講演など話し手と聞き手が同一の空間を共有する場面において多くの場合、身振り・手振り・表情などを伴う指示である。
- 文脈指示とは現場ではなく、会話や文中に人・物・事物などに言及する際に用いられる指示である。

この論文では以上の概念を基づいて、第 4 章から第 6 章までは現場指示、第 7 章では文脈指示に関して論じる。

## 3.2　日中指示詞の対応形式

中国語指示詞を議論するには「量詞」に関する説明が必要である。日本語では指示詞が名詞を修飾する場合、その名詞の前につけるのに対して、中国語では量詞を添える必要がある。例えば、(１)(２)(３)では名詞“书包(「鞄」)”“桌子(「テーブル」)”と数詞の間に量詞“个(「個」)”“张(「枚」)”が必ず必要である。数詞と量詞を合わせて「数量詞」と言う。

（１）　这三个[1]书包(直訳：この三つの鞄)

（２）　那一张[2]桌子(直訳：その一つのテーブル)

---

[1] “个”:〈量〉広く個や伊のものを数える場合に用いる。“一个苹果(1 つのリンゴ)”“一个奇迹(1 つの奇跡)”“两个人(2 人)”“三个选择(3 つの選択)”

[2] “张”:〈量〉平面の目立つもの（紙片から板状のものまで）を数える場合に用いる。“一张纸(1 枚の紙)”“两张钞票(2 枚のお札)”“三张照片(3 枚の写真)”

ということは、日本語「指示詞+名詞」に対して、中国語では「指示詞+数量詞+名詞」の形で対応していることになる。

ただし、数詞が“一”の場合、数量詞は省略可能である。この場合、「指示詞+量詞+名詞」あるいは「指示詞+名詞」形式になる。

（３） 那一座[3]山 —— 那座山 ——那山（あの山）

（４） 这一个孩子 —— 这个孩子 ——这孩子（この子供）

また、中国語では量詞に違いによって意味が変わる場合がある。

（５）a. 御苑里桃花盛开，皇帝亲自摘了一枝，插在妃子的头上，说“这个花可以增你的美。”

b. 御苑里桃花盛开，皇帝亲自摘了一枝，插在妃子的头上，说“这枝[4]花可以增你的美。”

(御苑の中では桃の花が綺麗に咲いている。皇帝は花を一枝折って、妃殿下の髪に挿して、この花はあなたの美しさを増すと言った。)

例(５a)の“这个花”は他の花と区別する「桃の花」である。もし、花を数える量詞“个(ものを数える量詞)”を“枝(枝：本数を数える量詞)”に替えて、(５b)“这枝花”にすると、意味が変わり、「皇帝が持っている一枝の花」のことになる。“这枝”はある特定の事物の個体を指しており、単数であるが、“个”は物の全体を指しているので、“这个”はある特定の事物の類型を指す。

金水(1991)では(６)は眼前の車と同一の個体を見たという解釈と、眼前の車と同一の車種の(別の個体の)車を見たという解釈を許すと述べている。

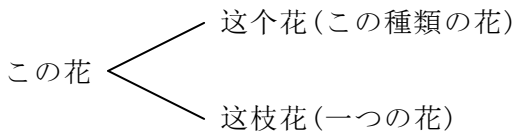
（６） 昨日渋谷でこの車を見た。 (金水 1991)

---

[3] “座”:〈量〉大きくどっしりと固定して動かないものを数える場合に用いる。“一座山(1つの山)”“两座城市(2都市)”

[4] “枝”:〈量〉長細いものを数える場合に用いる。“一枝花(1本の花)”“两枝钢笔(2本のペン)”

日本語の「指示詞+名詞」は中国語の二つの意味に対応することになる。




従って、日本語では指示詞が名詞を修飾する「この/その/あの+N」の場合、中国語では「指示詞+(数量詞)+名詞」で対応する。

### 3.3　中国語指示詞の「虚化」

この論文の第 7 章で「ひ弱な指示詞“这”“那”」は中国語指示詞“这”“那”の「虚化」用法と指している。吕(1985)ではすでに指示詞の「虚化」用法が言及されている。実際の文において“这”“那”“这个”“那个”“这么”“那么”などの指示詞は指示の力が弱まり、指示詞としての機能が失っている現象と指摘している。例えば、吕(1985)によれば、(7)(8)のような指示詞は“冗余的”であり、このような指示詞はただ文章を生き生きとさせるだけで、あってもなくても文の意味に影響がないと述べている。(これについて具体的には第 5 章で議論する。)

(7)　略微的有<u>那么</u>一点意思，还不敢说十分对。　(吕 1985)
　　(少しぐらいは意味があるが、十分に正しいと言えない。)
(8)　一块儿又混了<u>这么</u>几个月。　(吕 1985)
　　(二ヶ月ぐらい無為に過ごした。)

近年、张・方(2001)、曹(2000)、沈(1999)等の研究を代表として、機能的視点を中心に“这”“那”の虚化した文法的な意義や文章における役割を考察している。それらの指示詞の文法化の問題を扱った研究は「文法化」の概念を発展させた。

・　語彙意味の弱まりはわれわれ本来言っている「虚化(弱まり)」、同時にその語彙に新たな文法範疇と文法成分が生じる。これを「文法化」とも言う。指示詞“这/那”から「ひ弱な指示詞“这/那”」にはこのような「文法化」がある。
(张・方 2001)

例えば、指示詞は本来ダイクシス性を持つが、(９)(10)の指示詞“这”“那”は特に具体的な指示対象を何も指していない。

(９)　我这舞跳得也够灰心的。　(张・方 2001)
(私の気持ちがこのダンスをする事に挫けた。)
(10)　你那孙子装的也够可怜的。　(张・方 2001)
(お前は十分哀れそうにとぼけているね。)

また、第 4 章と第 6 章で取り上げた中国語「N1+指示詞+N2」構造における指示詞の用法「助指」であり、このような指示詞は指示の力が弱くなり、「虚化」用法の一種と見られる。

・　「助指」は「“这”“那”が必ず他の修飾語を伴い、指示する機能」と定義する。主に所属性の修飾語、同格性の修飾語、描写性の修飾語、動詞述語文と組み合わせて、後ろの名詞を修飾する。

(11)　冯少怀这个人，只能跟他一块儿受罪，不能跟他一块儿享福。　(《金光大道》)
(馮少懐って奴は、いっしょにいる人間をこき使うだけで、いい思いをさせることなんざ、これっぽちも考えてねえ。)
(12)　你这个爸爸真是一块活宝。　(《金光大道》)
(あんたのお父さんて、ほんとにめずらしいくらいのお馬鹿さんね。)

中国語指示詞の「虚化現象」について後程第 4 章、第 5 章と第 6 章で詳しく論じる。

### 3.4　この論文で扱う日中指示詞の問題点

日中指示詞は両言語の中で果たしている機能はそれぞれ違うと考えられる。この論文では日本語と中国語の一方は指示詞を使用し、もう一方は指示詞を使用しない例を取り上げて、日中指示詞は各自の言語の中での働きを明らかにする。

これについては、木村(1983b)に日本語「コソア」にはない「トコロ化」の機能を

中国語“这”“那”は持っているという指摘がある。

(13) a. 沙发那里[5]光线不好，你到桌子这儿[6]来看书吧。

b. ソファーのところは光線の具合がよくないからテーブルのほうへ来て本を読んで。

(木村 1983b)

中国語指示詞には、方位詞（“前”“后（後ろ)”“上”“下”“内（中)”など）と同様に、名詞について空間的意味を表す。例えば指示詞“这・那”も方位詞“前(前)”“上(上)”も名詞“桌子(テーブル)”の後ろについて(13a)“沙发那里(ソファーのところ)”(14a)“沙发上(ソファーの上)”(15a)“沙发那儿(ソファーのところ)”という“沙发(ソファー)”と関係する場所を表すことができる。

(14) a. 沙发上有一本书。

b. ソファーの上に一冊の本がある。

(15) a. 沙发那儿有一本书。

b. ソファーのところに一冊の本がある。

(木村 1983b)

中国語指示詞は名詞の後ろについてひとつの方位詞相当句を構成するという「トコロ性」を持つのに対して、日本語指示詞はこの機能を持っていない。「テーブルの前」「ソファーのところ」は空間的意味が現れるが、「*テーブルのあそこ」「*ソファーのここ」という「名詞+指示詞」のような構造は成立しない。

この論文ではこのような機能の違いから日本語と中国語の指示詞の使われ方が何に由来するのか、それぞれの両言語の中ではどのような役割を持つのかについて考察したい。例えば、中国語「N1+指示詞+N2」の両構造に対して日本語は「N1+という+N2」「N1+の+N2」形式と対応している。いずれも指示詞が現れていない。

---

5 “里”：名詞の後ろについて、場所を表す。“这里”：比較的近くの場所を指す。“那里”：比較的遠くの場所を指す。

6 “儿”：発音現象で「巻舌音化、r 化」である。名詞の接尾語である。“这儿”：比較的近くの場所を指す。“那儿”：比較的遠くの場所を指す。

(16) a. 冯少怀这个人，只能跟他一块儿受罪，不能跟他一块儿享福。(《金光大道》)

b. 馮少懐って奴は、いっしょにいる人間をこき使うだけで、いい思いをさせることなんざ、これっぽちも考えてねえ。 (『輝ける道』)

(17) a. 你这个爸爸真是一块活宝。 (《金光大道》)

b. あんたのお父さんて、ほんとにめずらしいくらいのお馬鹿さんね。

(『輝ける道』)

中国語文(16a)(17a)とも話し手は「ある事物」の具体的な出来事(具体像)を指しながら、それに強い感情を表す構造である。その中で、指示詞は同じく「文脈に現れていないが、話し手の頭の中(記憶)に存在している具体像を指す」役割を果たしている。これに対して、日本語指示詞は同じ機能を持っていないため、指示詞での対応ができない。また、(16b)(17b)日本語「N1+という+N2」「N1+の+N2」構造の意味、ニュアンスと機能語「という」「の」の用法も、中国語「N1+指示詞+N2」構造及びその指示詞と異なっており、根本的に違うものである。

この論文の第 4 章から第 6 章まで現場指示において、このような中国語は指示詞が使われて日本語では指示詞が使われない例を三つの側面から取り上げて両言語指示詞の機能差を分析する。第 7 章では(18)のように逆に文脈指示になると日本語では指示詞が必須であるが、中国語では指示詞の使用が不自然な例を中心に取り上げて議論する。

(18) a. 人間は、昔から犬を友としていた。その犬はいろいろな病気の伝染者でもある。 (田中 1981)

b. *人类很久以前就把狗当成朋友。这只狗也是很多疾病的传播者。

例(18)において、日本語文 a の指示詞「その」を中国語指示詞“这只”に訳すと、b のように不自然になる。これは日本語文 a の第 2 文の「その犬」は第 1 文の「犬」と同じく「犬という動物」すなわち「犬一般」を指すのに対し、中国語文 b の“这只狗”は「特定の一匹の犬」を指しており、第 1 文の“狗(犬)”と同じ範疇を指していないからである。つまり日本語文 a は「犬」という名詞だけでも「人間は昔から犬という

動物を友としていた。その犬という動物はいろいろな病気の伝染者でもある」ということを述べる文になるので意味が通じるが、中国語文 b は「人間は昔から犬という動物を友としていた。その一匹の犬はいろいろな病気の伝染者でもある」ということを述べる文になるので意味が通じないわけである。

(18)の「その」は「持ち込み」[7]用法である。これについて中国語では指示詞だけでは対応できない。代わりに、類型を表す指示詞を使用するか、先行文脈から持ちこまれた内容を指示詞を含む文脈で明示するかになる。

### 3.5　先行研究との結びつき

この論文では先行研究などの既存の理論を基づいてそれらの理論を発展的に応用する。先行研究から見れば、日本語指示詞の研究は対立関係からの研究であれ、話し手と聞き手が持つ情報という観点からの研究であれ、「談話管理」観点であれ、研究の中心は指示詞「コ・ソ・ア」三者の使い分けに重点が置かれている。また、中国語指示詞の研究は主にその機能と構造を中心として研究している。日本語と異なる方向に進んでいることが見受けられる。日本語指示詞の先行研究と中国語指示詞の先行研究の重心が異なるが、この論文では、両者の成果を有効に活用し、新たな結論に結び付けられる。

① 現場指示において、先行研究で中国語指示詞は指示の力が弱まっている「虚化」用法があると指摘されている。それを踏まえて、弱まった指示用法以外にも別の役割を果たしていると明らかにし日本語指示詞と対照する。

② 文脈指示において、先行研究で日本語指示詞「その」の「持ち込み」機能が明らかにされている。それを踏まえて、さらに詳しく分類し、中国語指示詞と対照する。

③ 現場指示と文脈指示における日中指示詞の働きを考察し、各自の言語における日中指示詞の作用及び位置を統括する。

---

[7] この語については第 7 章で詳しく定義する。

### 3.6　本章のまとめ

本章ではこの論文の中で現れる概念を定義し、これ以降の議論の前提とする。

① 数量詞は中国語指示詞を使用する際、不可欠の部分である。量詞の種類及び量詞の有無による影響を説明したうえ、日本語と比較しやすいように、第4章から第7章の議論の中では、「指示詞+数量詞」を合わせて、指示詞と言う。

② この論文の中国語指示詞が関わる「虚化現象」について説明した。「虚化現象」は現段階では、中国語指示詞研究における重要な着目点である。これらの研究成果はこの論文での理論的な基盤となる。

③ この論文で扱う日中指示詞の対照を具体的に説明した。この基準によって具体に述べる。

日中指示詞の対照
- 現場指示　中国語指示詞の使用⇔日本語の指示詞不使用
- 文脈指示　日本語指示詞の使用⇔中国語の指示詞不使用

この二つの現象は現有の先行研究に基づいてそれらの理論を発展させていく。

# 第 2 部　日中指示詞の具体的な対照

## 第 4 章　「N1+指示詞+N2」構造における日中指示詞の対照

本章では、中国語「N1+指示詞+N2」の二つの構造に対して日本語では指示詞で対応しない現象を取りあげ、議論する。

### 4.1　問題提起

中国語「N1+指示詞+N2」構造は、「前方名詞+指示詞+後方名詞」という形である。「N1+指示詞+N2」構造は二つのタイプに分けられる。両者の違いは指示詞に先行する名詞表現と、それに後続する名詞表現の指している事物が同一事物か否かという点にある。

Ⅰ　N1 と「指示詞+N2」が共に同一事物を指しているもの

（1）　[张华][这个人](直訳：張華この人)
（2）　[北京][那个地方](直訳：北京そのところ)

Ⅱ　N1 と「指示詞+N2」が各々別の事物を指しているもの

（3）　[妈妈][这件[1]毛衣]（直訳：母のこのセーター)
（4）　[他][那本[2]书]（直訳：彼のあの本)

（1）“张华+这个+人”、（2）“北京+那个+地方”、（3）“妈妈+这件+毛衣”、（4）“他+那本+书”は同じ「N1+指示詞+N2」構造となっている。（1）（2）N1“张华”“北京”

[1] “件”:〈量〉事がら・衣服(上衣)・書類などを数える場合に用いる。“一件事(1 つの要件)”“两件毛衣(2 着のセーター)”
[2] “本”:〈量〉冊子、書籍を数える場合に用いる。“一本笔记本(1 冊のノート)”“两本课本(2 冊の教科書)”

と「指示詞+N2」“这个人”“那个地方”は同一事物を指している。つまり、(１)N1“张华”とN2“这个人”とも「張華」、(２)N1“北京”とN2“那个地方”ともに「北京」を指している。これに対して、(３)(４)N1“他”と「指示詞+N2」は同一事物を指していない。(３)(４)N1“妈妈”“他”とN2“这件毛衣”“那本书”は各々別の事物を指している。

(３)(４)に関して、木村(1983)では「指示」と「方位」という二つの文法範疇の文法的及び意味的近似に関する主張からその性格と意味を議論しているが、(１)(２)と(３)(４)はいずれも見かけ上は二つの名詞表現が指示詞を介してつながり、一つの構造を構成しているわけであり、いったいそれらがいかなる意味＝文法関係のもとにつながっているのか。そして、指示詞はいかなる役割を持ってこの繋がりに関与しているのか、といった点はこれまで深く論じられていない。本章では、同じ「N1+指示詞+N2」構造である(１)(２)と(３)(４)の指示詞の役割に焦点を絞って、N1の働きを中心とし、具体的な機能を明らかにする。

議論しやすくするため、以下では(１)(２)のような構造を「同格構造」といい、(３)(４)のような構造を「所属構造」ということにする。

### 4.2　同格構造

(１)“张华这个人”(２)“北京那个地方”のような「N1+指示詞+N2」では指示詞を冠する名詞表現N2とその直前の名詞表現N1は同格関係を持つ構造である。朱(2009)では同格(Appositionｎ)について 「外在する形式が違う二つの言語単位が同等の言語構造にあって、同等の効果を持つ文法機能のことである」[3]と定義している。

二つの語句が同格関係にあるとは、文中において主語ならば両方とも主語、目的語ならば両方とも目的語になっているということを意味する。(５)“张华这个人”、(６)“张华那个人”はN1と「指示詞+N2」の文法位置が同じ同位構造である。つまり、(５)“张华这个人”において“张华”と“这个人”はともに主語に相当し、(６)“张华那个人”において“张华”と“那个人”はともに目的語に相当する。

[3] 原文:“指外在形式不同的两个语言单位处在地位同等的语言结构中具有作用同等的语法功能。”(朱英贵　2009)

（5） ［张华］［这个人］非常小气。

（張華という人はとてもケチだ。）

（6） 我恨死［张华］［那个人］了。

（私は張華をとても恨んでいる。）

また、同語構造においては、仮に二つのうちどちらか一方の語句を除いても、文の構造は影響を受けず、そのまま文として成立し、文の意味も基本的には変わらない。（7）（7'）（8）（8'）の“这个人”“那个人”の指示対象が話し手と聞き手と共有知識の場合、N1 と「指示詞+N2」のいずれかが抜けても文が成り立つ。

（7） ［张华］非常小气。

（張華はとてもケチだ。）

（7'） ［这个人］非常小气。

（この人はとてもケチだ。）

（8） 我恨死［张华］了。

（私は張華をとても恨んでいる。）

（8'） 我恨死［那个人］了。

（私はあの人をとても恨んでいる。）

文の意味を表すには本来（9）“张华”、(10)“钱”、(11)“北京”、(12)“9 月 3 日”だけでは十分であるが、なぜ更なる「指示詞+N2」を付け加える同位構造が必要なのか。「指示詞+N2」が加えられることによって、どのようなニュアンスが生じているのか。

（9） ［张华］~~［这人］~~非常小气。

（張華はとてもケチだ。）

(10) ［钱］~~［这东西］~~让人又爱有恨。

（お金は人に愛しさと同時に憎しみを感じさせてしまう。）

(11) ［北京］~~［那地方］~~人很多。

（北京は人がとても多い。）

(12) ［9 月 3 日］~~［这天］~~让人毕生难忘。

(9 月 3 日を私は一生忘れられない。)

(9)－(12)「指示詞+N2」の有無に関わらず、いずれも“张华(張華)”という人物の“小气(ケチ)”、“钱(お金)”というものの“又爱又恨(愛しさと同時に憎しみを感じさせてしまう)”、“北京”という場所は“人很多(人がとても多い)”、“9 月 3 日”という日の“毕生难忘(一生忘れられない)”の属性が表れる。両者を比較し、「N1+指示詞+N2」構造の場合は明らかに話し手によって N1 への主観的評価のニュアンスが感じられるのに対して、「指示詞+N2」が付かないほうは客観的な N1(9)“张华”、(10)“钱”、(11)“北京”、(12)“9 月 3 日”の属性を述べている。

従って、述語部分は客観的な内容“在北京出生(北京で生まれた)”“要靠自己的努力赚(自分の努力で稼ぐ)”の場合、(13)(15)は自然な文になるが、「N1+指示詞+N2」同格構造(14)(16)は不自然さが感じられる。

(13) 张华在北京出生。
(張華は北京で生まれた。)

(14) ?张华这人在北京出生。
(張華という人は北京で生まれた。)

(15) 钱要靠自己的努力赚。
(お金は自分の努力で稼ぐ。)

(16) ?钱这东西要靠自己的努力赚。
(お金というものは自分の努力で稼ぐ。)

このことから、「N1+指示詞+N2」構造は主観的な評価を表す構造であると推測される。このような主観的なニュアンスが生じるのは N1 と「指示詞+N2」が同じ文法位置にあるためである。また、このような文法構造が成り立つのは二つの名詞表現をつなぐ指示詞にあると考えられる。指示詞の N2 への働きは明らかに限定用法なので、どのように N1 の属性の叙述と繋がるのかを具体的に見ていきたい。

(17) [张华][这人]非常小气。
(張華という人はとてもケチだ。)

(17)は直観的に話し手が何らかのもの、つまり具体的な情報を指しながら、張華の「ケチ」という評価に結びついている。例えば、

話し手の“张华”への印象

A 每天走 1 个小时的路回家。(毎日一時間歩いて帰宅している)

B 从不请客。(人におごったりしない)

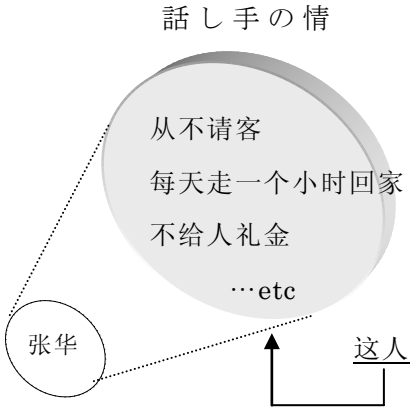
C 从不给人彩礼。(誰にも礼金をあげない)

…

つまり、話し手は「張華」に関して、「毎日一時間を歩いて帰宅している」「人におごったりしない」「誰にも礼金をあげない」…の出来事(情報)を知りながら、それらを根拠として「張華」という人に対してケチと評価を下している。ただし、その何らかのもの(情報)は文脈に出ておらず、話し手の頭にしか存在しないものである。

この場合、指示詞は話し手の頭にある「張華」に関する出来事を指すことによって、述語部分の属性と結び付けていると考えられる。つまり、図(1)のように、指示詞は指しているのは「張華」という人物の全般ではなく、話し手が「張華」に関して知っている出来事を指しているのである。その上で、それらの情報の属性を一つの評価に繋げたのである。

図(1)




従って、(17)で表れている「張華」の属性は「張華一般」ではなく、話し手は「張

華」に対する認識を表す表現である。これは同格構造ではない“张华非常小气(張華はとてもケチだ)”に表れている「張華一般」の属性との大きな相違点である。これによって、必然的に“张华这个人非常小气”と“张华非常小气”両文の主観的と客観的なニュアンスの違いも生じている。

また、(18)も話し手は“钱(お金)”に対して、“没有不行，太多也不行(なくてはならないが、多すぎでもよくない)”“为了它很多人去犯罪(たくさんの人に罪を犯させている)”“有了很多问题都不再是问题(たくさんの問題が解決できる)”などの認識を持った上で、自分なりに“让人又爱有恨(愛しさと同時に憎しみを感じさせてしまう)”という感情を持っている。(19)“9 月 3 日”に“第一次看到爸爸(初めて父と会った)”“是给我太多感动的(感動が与えられた)”“一家团圆(家族が一家団楽となった)”の出来事より“让我毕生难忘(一生忘れられない)”という評価をしている。(20)“北京”に“冬天去过北京(冬北京に行ったことがある)”“有零下 10 度(零下 10 度)”“要穿棉袄(冬は綿いれの上着を着なければならない)”の情報から“太冷了(とても寒い)”という評価をしている。これはあくまでも話し手の主観的な評価であり、世の中の一般的な評価ではない。

(18) [钱] [这东西]让人又爱有恨。

(お金は人に愛しさと同時に憎しみを感じさせてしまう。)

話し手の“钱”への認識：

A 呀，没有不行，太多也不行。(なくてはならないが、多すぎてもよくない)

B 为了它很多人去犯罪。(たくさんの人に罪を犯させている)

C 有了很多问题都不再是问题。(たくさんの問題が解決できる)

…

(19) [9 月 3 日][这个日子]让我毕生难忘。

(9 月 3 日という日を私は一生忘れられない。)

話し手の“9 月 3 日”への思い：

A 我第一次看到爸爸(初めて父と会った)

B 是给我太多感动的(たくさんの感動が与えられた)

C 一家团圆(一家団楽になった)

…

(20)　[北京][那个地方]太冷了。

(北京というところはとても寒い。)

話し手の“北京”への認識：

A　冬天去过北京(冬北京に行ったことがある)

B 有零下 10 度(零下 10 度ある)

C 要穿棉袄(綿いれの上着を着なければならない)

…

この場合の指示詞“这东西”“这个日子”“这地方”は単なる N1「“钱”一般」、「“9 月 3 日”一般」「“北京”一般」を指しているわけではなく、話し手が頭の中に思っている“钱”、“9 月 3 日”、“北京”に関する出来事の属性を指している。そして、それらの出来事は文には現れていないが話し手の頭に浮かんでおり、見えているようなニュアンスが感じられ、そして、述語部分の話し手の主観評価と結びついている。

以上から「N1+指示詞+N2」同格構造は話し手の N1 に対する主観的な評価を与え、話し手の感情移入などの語調を伴う構造であることがわかる。これは指示詞の働きによるものである。指示詞は話し手の N1 に対する認識(出来事)を指示し、それによって話し手による評価と結びつけている。

### 4.3　所属構造

（3）“妈妈这件毛衣”、（4）“他那书”のような「N1+指示詞+N2」は、指示詞を冠する名詞表現 N2 とその直前の名詞表現 N1 は異なる指示対象を指している。同格構造「N1+指示詞+N2」と区別するため、このような「N1+指示詞+N2」を所属構造と呼ぶ。

一見して(21)“他那书”の“他”は“书”の所属先、(22)“北大那食堂”の“北大”は“食堂”の所属先、(23)“前天那警察”では“前天”は“警察”の所属先と見なせる。

(21)　[他][那书]很一般。

(彼のあの本は普通だ。)

(22)　[北大][那个食堂]太便宜了。

（北京大学のあの食堂はとても安い。）

(23)　[前天][那位警察]挺英俊的。

（一昨日のあの警察官はハンサムだ。）

(21)－(23)のように中国語では名詞と名詞の所属関係を結び付けるには、連体構造助詞“的”が必要である。「N1+指示詞+N2」所属構造における N1 と N2 はただの所属関係、指示詞は両者をつなげるだけのものであれば、(21)－(23)は(24)－(26)と同じ意味になるはずである。

(24)　他<u>的</u>书很一般。

（彼の本は普通だ。）

(25)　北大<u>的</u>食堂太便宜了。

（北京大学の食堂はとても安い。）

(26)　前天<u>的</u>警察挺英俊的。

（一昨日の警察官はハンサムだ。）

両者を比べて見れば、(24)“他的书”は“他”と“书”、(25)“北大的食堂”は“北大”と“食堂”、(26)“前天的警察”は“前天”と“警察”の所属関係を意味しているが、N1 は完全に修飾成分、N2 は中心成分となっている。しかし一方、(24)－(26)と比べ (21)－(23)「N1+指示詞+N2」所属構造の“他”と“书”、“北大”と“食堂”、“前天”と“警察”の間の親密感が強い。“他的书”“北大的食堂”“前天的警察”のような明らかな修飾と被修飾の意味はなく、N1“他”“北大”“前天”は N2“书”、“食堂”、“警察”の修飾成分とは言えない。さらに、N2 に対して話し手の視点から deictic に捉え、文に主観的な位置づけを加えたニュアンスが読み取れる。つまり、N2 の何らかの具体像が話し手の頭の中に浮かんでいて、あたかも指で指しているかのようである。たとえば“书”の内容、“食堂”の値段、“警察”の顔など。

また、同じ述語部分であるが、連体構造助詞を用いる(27)(29)は正文、「N1+指示詞+N2」所属構造の(28)(30)は非文となる場合もある。

(27)　我的爸爸上个周去日本出差了。

(28)　*我那爸爸上个周去日本出差了。

（私の父は先週日本に出張した。）

(29)　我的脚长了一个大大的瘤子。

(30)　*我那[4]脚长了一个大大的瘤子。

（私の脚には大きい瘤がある。）

(28)は「何人か“爸爸”の中の一人は先週日本に出張に行った。」という非文になり、(30)は完全に指示詞がどの脚を指しているのかわからなく、非文となる。これは述語部分が属性を表す文脈ではなく、“上个周去日本出差了(先週日本に出張に行った)”“长了一个大大的瘤子(大きい瘤がある)”という客観的すぎる事実を述べるために，話し手はN2“爸爸”“脚”に対して評価ができなくなるからである。ここから、「N1+指示詞+N2」所属構造はN2に対して話し手の主観的な評価を下す構造であると言える。指示詞には“的”と異なる作用が内在すると考えられる。

続いて、指示詞はどうやってN1とN2を結びつけるのか、その中で具体的にどのような役割を果たしているのかを見てみたい。

(31)　[他][那书]很一般。

（彼の本は普通だ。）

話し手はある“书”に対して“他”との関連情報を持っている

A 去年写的(去年書いた)

B 改编成电影的(映画化にされた)

C 写婚外情的(不倫の内容の)

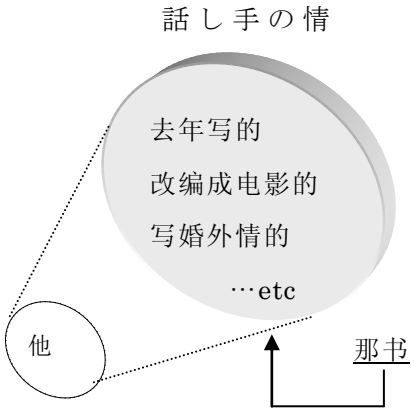
…

(31)は話し手が「彼」と何からの関係を持つある本に対して“很一般(普通)”という評価を下している意味である。その何からの具体的関係は話し手が知っている。例えば、図(2)で示されているように“去年写的(去年書いた)”“改编成电影的(映画化に

[4] “这”の場合は正文である。これは、目の前に指で指しているからのである。(30)は指で指していない場合であり、非文になる。

された)”“写婚外情的(不倫の内容の)”の具体的内容を指しながら、それによって特定された「本」への評価を下している。文に現れていないが話し手の頭に浮かんでおり、話し手はそれを見えているかのように発話しているのである。この場合、指示詞は文脈に現れていない「何からの具体的な関係」を指して、述語部分が表す評価と結び付けている。

図(2)




話し手が述語部分で表している評価は「“他的书”一般」への評価ではなく、話し手は思っている「“他”と何らかの関わりのある“书”」に対して下した評価である。これによって、客観的な視点から見た“他的书很一般”と話し手の視点から見た“他那书很一般”の根本的な違いである。

また、同じように(32)“北大那食堂”は話し手の頭の中に「“北大”という場所と何らかの関わりのある“食堂”」を意味している。その関わりは、たとえば“得到教育部补助金建的(教育部からの補助金で作られた)”“北校区的(北キャンパスにある)”“最新开的(新しく開いた)”のような話し手が具体的に知っているものである。(33)“前天那警察”も話し手が知っている“前天”という時間と“打 110 叫来的(110 で呼んできた)”“问了很多问题的(たくさん質問された)”“没什么表情的(あまり表情のない)”のような関係のある“警察”を意味している。話し手は“北大”“前天”は“食堂”“警察”と関わる情報が頭にあり、それを見えながら発話しているようである。この場合、指示詞が指しているのはそれらの情報である。それらの情報のもとで、“食堂”“警察”に対する述語部分で“太便宜了(とても安い)”“挺英俊的(ハンサム)”のような主観的な評価をする。

(32)　[北大] [那个食堂]太便宜了。

(北京大学の食堂はとても安い。)

話し手はある“食堂”に対して“北大”との関連情報を持っている

A 得到教育部补助金建的(教育部からもらった補助金で作られた)

B 北校区的(北キャンパスにある)

C 最新开的(新しく開いた)

…

(33)　[前天][那警察]挺英俊的。

(一昨日の警察官はハンサムだ。)

話し手はある“警察”に対して“他”との関連情報を持っている

A 出事故时打 110 叫来的(110 で呼んできた)

B 问了很多问题的(たくさん質問された)

C 没什么表情的(あまり表情のない)

…

この場合の指示詞は「北京大学の食堂」、「一昨日の警察官」を指しているわけではなく、話し手が頭の中に思っている“北大”と“食堂”、“前天”と“警察”の間の具体的な関わり、つまり“食堂”“警察”の具体像を指している。また、それを指すことによって、話し手の主観的評価が表れる。文全体は話し手が具体像を見ながら話しているニュアンスが取れる。

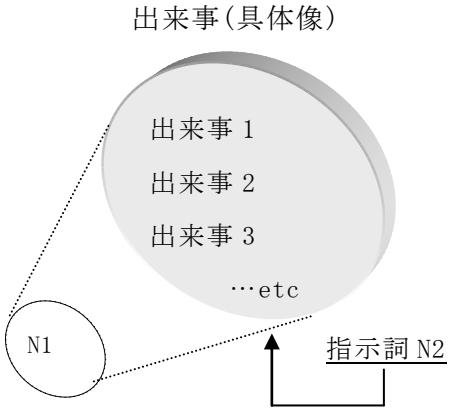
以上のように、所属構造の「N1+指示詞+N2」において N2 に対する主観的な感情、評価を表す構造である。指示詞は話し手の頭の中に存在している「N1 と関わる N2 に関する具体的な情報(出来事)」を指している。その役割によって、話し手の主観的な感情を表している。

### 4.4　両構造の類似性

以上のように、本章では「N1+指示詞+N2」構造において指示詞に先行する名詞表現 N1 と、それに後続する名詞表現 N2 の指している事物が同一事物か否かによって分けられた「同格構造」と「所属構造」の意味(文法関係)から指示詞の役割を具体的に分析した。

収集した「N1+指示詞+N2」構造の例文において、同格関係と所属関係とも話し手の強い感情が含まれている場合が多い。また、両構造とも話し手は「ある事物」の具体的な出来事(具体像)を指しながら発話しているニュアンスが取れる。述語部分で反映される評価を表す意味はその「具体像」によるものである。それらの「出来事」は文脈に現れていないが、話し手の頭の中(記憶)に存在している。要するに、図(3)で表示されているように、指示詞が指示しているのは文に出ている事物ではなく、それと関連のある話し手の頭の中に存在している具体像である。それを評価と結び付けている。両構造は一見異なるものであるが、両者には実際は非常に類似的な指示詞の働きが見られる。

図(3)




また、もう一つ共通性と言えば、話し手の頭の中に存在する「出来事 1、出来事 2、出来事 3」のイメージは聞き手に伝わらないものである。それらのことは、聞き手が知っているかどうか関係なく、話し手は「N2」に対して頭の中で独自的にイメージしているのである。

二つの構造が一つの言語形式に存在するのはそれなりの理由がある。指示詞が同じく話し手の頭の中の出来事を指すことは両構造が一つの言語形式である「N1+指示詞+N2」に存在する根本的な理由であるのではないかと考えられる。

### 4.5　日本語との対照

以上で中国語同種類の言語形式「N1+指示詞+N2」が持っている二つの言語形式の構

造関係から指示詞の用法を分析した。その結論を踏まえて、日本語ではどのような対応しているのかを見てみたい。

「N1+指示詞+N2」構造の同格関係と所属関係はいずれも日本語の指示詞に対応しない。それぞれが多く対応しているのは日本語の(34b)(35b)「N1+という+N2」、(36b)(37b)「N1+の+N2」構造である。

「N1+指示詞+N2」同格構造

(34) a. 詹麗穎という人は、その動き一つでみんなから好かれることもあるが、逆にそのひと言でみんなから嫌われ、疎んじられることもある。 (《钟鼓楼》)

b. 詹丽颖这人[5]既能在一个举动里让人对她敬爱有加，也能在一句话上使人对她生烦生厌。 (『鐘鼓楼』)

(35) a. 冯少怀这个人，只能跟他一块儿受罪，不能跟他一块儿享福。(《金光大道》)

b. 馮少懐って奴は、いっしょにいる人間をこき使うだけで、いい思いをさせることなんざ、これっぽちも考えてねえ。 (『輝ける道』)

「N1+指示詞+N2」所属構造

(36) a. 你这个爸爸真是一块活宝。 (《金光大道》)

b. あんたのお父さんて、ほんとにめずらしいくらいのお馬鹿さんね。 (『輝ける道』)

(37) a. 你那脑瓜子本来就是软的，偏偏要往硬的上碰，这怨谁呢？”(《金光大道》)

b. あんたの頭はもとからやわらかいのに、自分から固いものにぶつけようとしてんでしょ。なんで人のせいにすんのよ。 (『輝ける道』)

日本語の指示詞は中国語「N1+指示詞+N2」構造における指示詞の「話し手の頭の中の出来事(具体像)を指す」機能を持っていないと言えよう。しかし、なぜ中国語では同一の構造が「N1+という+N2」構造と「N1+の+N2」構造と対応しているのか。日本語

[5] “这人”は“这(一个) 人”の数量詞が省略された場合である。

の機能語「という」「の」は中国語の指示詞と類似している機能を果たしているのか。「N1+という+N2」構造と「N1+の+N2」構造の意味とそれにおける「という」「の」の用法から見てみよう。

まず、「N1+という+N2」構造の属性から見てみる。丹羽(2006)では「N1+という+N2」について「N1 のことを改めてとらえ直す(改めて問題にする)」という説明をしている。

(38)　山田さんという人は面白い人だねえ。

(39)　人間って本当に高等動物なのかな?

(38)「山田さん」、(39)「人間」のことを知っているにせよ、「山田さん」「人間」がいかなる人/ものか改めて問い直している。この場合、問題になる意味は、既知の意味そのままではなく、それに関して新たな観点から捉え直した意味ということになる。N1 のことを改めて捉え直す(改めて問題にする)ということを表すのは「N1+という+N2」が本来引用形式であることによるものである。つまり、名前 N1「山田さん」「人間」を引用するという形をとることで、その名前に伴うべき意味を付与し、N１に関わる既存の意味を改定したり、それに付け加えたり、確認したりするのである。

丹羽(2006)の分析によれば、「N1+という+N2」構造は「N1 を新たな観点から捉え直す」意味する構造である。「という」はそもそもの引用機能で N1 を引用することによってそれを目立たせる機能を果たしているのである。構造上は中国語「N1+指示詞+N2」構造が持っている話し手が N1 に対する主観的な評価を与える構造と全く異なるものである。そして、中国語「N1+指示詞+N2」同格構造の指示詞が果たしている話し手の記憶の中の出来事を指す機能とも明らかに違っている。

また、日本語で「N1+の+N2」構造は N1 と N2 を「の」で繋げ、所属関係を表す構造である。中国語の連体構造助詞“的”で繋がる「N1+的+N2」構造と同じものである。前文では(21)―(23)と(24)－(26)の違いですでに説明しているように、「N1+指示詞+N2」は単なる所属関係を表す構造ではなく、その指示詞も連体構助詞“的”と異なり、「つなぎ」の機能のみの働きではない。従って、「N1+指示詞+N2」所属構造の意味と指示詞の役割とも日本語「N1+の+N2」と異なるものである。

中国語「N1+指示詞+N2」構造は、日本語「N1+という+N2」「N1+の+N2」構造で訳されるが、いずれも、具体像が話し手の目の前に浮かんでいて、あたかも指で指してい

るようなニュアンス、あるいは具体像によって述語部分の評価と繋がるというニュアンスを持たない。そのニュアンスを生じた機能語指示詞の働きも「という」「の」が持っていない機能である。

### 4.6　指示詞の虚化現象

吕(1982)では「“这”“那”が他の修飾語を伴い、指示する機能」を「助指」と定義した。また、李(2009)では「助指」は主に所属性の修飾語、同格性の修飾語、描写性の修飾語、動詞述語文と組み合わせて、後ろの名詞を修飾するものであり、「N1+指示詞+N2」の「同格構造」と「所属構造」における指示詞とも「助指」である。

李(2009)では(40)(41)のような指示詞(助指)の力が弱くなっていると指摘している。

(40)　画面孔这事很有趣，每位先生的面孔都有好多事情。画了这位的一二三四，再凭想象去添五六七八。不到几天，每位先生都画遍了。
(人の顔を描くのはとても面白いことだ。すべての先生の顔にはたくさんの物語が隠れている。一二三四を描いたら、また想像に任して五六七八を描き添える。何日もかからないうちに、すべての先生の花王を一通り描き終えた。)

(41)　他那高高大大的身子，堵在门框，痴痴呆呆地，像一段木头。
(彼はその高く大きなからだで入口をふさぎ、気抜けしたように立っている。)

(李 2009)

第3章ではすでに中国語指示詞の「虚化」用法が言及されている。実際の文において“这”“那”“这个”“那个”“这么”“那么”などの指示詞は指示の力が弱まり、指示詞としての機能が失っている現象と指摘している。张・方(2001)《汉语功能语法研究》では、「語彙意味の弱まりはわれわれ本来言っている「虚化(弱まり)」、同時にその語彙に新たな文法範疇と文法成分が生じると指摘している。

この論文では「助指」は「虚化現象」の一種と見られる。ただし、「助指」の指示詞の指示の力が弱くなったが、なくなったわけではない。指示機能はまだ残っている。本文の結論によれば、両構造の指示詞は「文脈に現れていないが、話し手の頭の中(記憶)に存在している具体像を指す」役割を果たしている。つまり、「助指」の指示詞は

指示の力が弱くなっており、「指示詞の虚化」現象と言われているが、文脈に現れていない指示対象を指しているわけである。

### 4.7　本章のまとめ

本章では「N1+指示詞+N2」構造において指示詞に先行する名詞表現 N1 と、それに後続する名詞表現 N2 の指している事物が同一事物か否かによって分けられた「同格構造」と「所属構造」の意味と指示詞の役割を具体的に分析した。

結果は以下のようになる。

① 両構造は一見異なるものであるが、実際は意味上も指示詞の用法も類似したものである。両構造とも話し手は「ある事物」の具体的な出来事(具体像)を指しながら、それに強い感情を表す構造である。その中で、指示詞は同じく「文脈に現れていないが、話し手の頭の中(記憶)に存在している具体像を指す」役割を果たしている。

② 中国語「N1+指示詞+N2」の両構造に対して日本語は「N1+という+N2」「N1+の+N2」形式と対応している。いずれも指示詞が現れていないことから、日本語の指示詞は中国語「N1+指示詞+N2」構造における指示詞の用法を持っていないと推測される。日本語「N1+という+N2」「N1+の+N2」構造の意味、ニュアンス及び機能語「という」「の」の用法も、中国語「N1+指示詞+N2」構造及びその指示詞と異なっており、根本的に違うものである。

③ 文脈的に両構造の指示詞は指示の力が弱くなっており、「指示詞の虚化(助指)」現象の一種となるが、「文脈に現れていない話し手の頭の中(記憶)に存在している具体像」を指している。

# 第 5 章　「指示詞+QN」構造における日中指示詞の対照

本章では中国語の“这么QN(Q:数量詞)”と“那么QN(Q：数量詞)”構造において指示詞“这么”“那么”の機能を明らかにし、日本語指示詞との非対応問題について考察する。

## 5.1　問題提起

中国語の“这么QN”と“那么QN”構造は、“这么 / 那么”+「数量詞+名詞」という形である。“这么”“那么”は指示詞であり、日本語の「このように/そのように/あのように」に相当するものである。Qは数量詞で、中国語では数詞が名詞を限定修飾する場合は数詞と名詞の間に量詞を添える。例えば、“三个书包(三つの鞄)”“一张桌子(一つのテーブル)”のように量詞“个”“张”が必要である。本章では、Q は数詞と量詞を合わせて「数量詞」とし、N(名詞)を修飾すると見る。吕(1985)は、“这么QN”と“那么QN”構造には以下の(１)(２)、(３)(４)の二種類あると指摘している。

(１) a. 爱等不等，这么两个月都等不了了？
　　b. 待つことを好む好まざるにかかわらず、（待つか待たないかは勝手だけど）〈わずか〉二ケ月も待てないの？

(２) a. 有那么八个小伙子一会就干完了。
　　b. 男が八人もいるのですぐに終わるよ。

(３) a. 由于没有工作，就打算和小王一块儿混这么两三个月。
　　b. 仕事がないため、とりあえず王さんと二三ヶ月ぐらい無為に過ごそうかと考えている。

(４) a. 奶奶，我正忙着呢。您再给爷爷满满的斟上那么一杯[1]酒啊？
　　b. おばあさん、今忙しいの。おじいさんにお酒をもう一杯ぐらい注いだら？

(１a)“这么+两个+月”と(３a)“这么+两三个+月”、(２a)“那么+八个+小伙子”と

[1] “杯”:〈量〉コップについだものを数える場合に用いる。“一杯开水(1 杯の湯冷まし）”“两杯咖啡(2 杯のコーヒー)

（４a）“那么+一杯+酒”は同じ“这么QN”と“那么QN”構造となっている。（１a)の指示詞“这么”は「二ヶ月」の時間の短さ、（２a)の指示詞“那么”は「八人」と人数の多さを強調している。（１a)の「二ヶ月」、（２a)の「八人」という数字は、指示詞“这么”“那么”に修飾され、それらの数字が物事の実現に至るまでの最小限あるいは最大限の数量であることを意味している。

これに対して、（３a)（４a)の“这么”“那么”は（１a)（２a)のように時間や人数などの長さや多さを強調する機能はない。（３a)の「二三ヶ月」（４a)の「一杯」という数字は指示詞“这么”“那么”に修飾されているが、物事の実現に至るまでの限度を表すわけではない。吕(1985)によれば、（３a)（４a)のような指示詞は“冗余的”であり、このような指示詞はただ文章を生き生きとさせるだけで、あってもなくても文の意味に影響はないと述べている。（１a)は「待つことを好む好まざるにかかわらず（待つか待たないかは勝手だけど）、二ケ月ぐらいも待てないの?」、（２a)は「男が八人ぐらいもいるのですぐに終わるよ。」の意味にはならない。

吕が（１a)（２a)のような指示詞が強調の機能を果しているとすることに異論はないが、（３a)（４a)のような指示詞を“冗余的(余剰的)”とするだけでは漠然としていて不十分であり、指示詞が果している機能についてより具体的に論じる必要がある。

また、（１）－（４）の日本語文では指示詞が現れていない。中国語“这么QN”と“那么QN”構造に対して日本語では指示詞で対応ができないことが分かった。本章では、同じ構造である（１a)（２a)の指示詞と比較し、（３a)（４a)のような指示詞の役割に焦点を絞って具体的な機能を明らかにしたうえで、日本語指示詞の非対応の原因を考察する。

その上で議論しやすくするため、“这么QN”と“那么QN”構造について、以下では（１a)（２a)のような指示詞を「強調の指示詞」といい、（３a)（４a)のような指示詞を「概数の指示詞」ということにする。

### 5.2　両指示詞の比較

「強調の指示詞」と「概数の指示詞」は「音調面」「共起要素」の二方面で違いがあるので、この二方面から考察したい。

### 5.2.1　音調面

次の(５)(６)と(７)(８)の二組の“这么”“那么”の音調は異なっている。

【強調の指示詞】

（５）　爱等不等，这么’两个月都等不了了？

(待つことを好む好まざるにかかわらず(待つか待たないかは勝手だけど)、〈わずか〉二三ケ月も待てないの?)

（６）　罚一杯?谁喝不了那么’一杯酒，满上！

(罰に一杯?たった一杯ぐらい飲めないとでも思っているの?注いで！)

【概数の指示詞】

（７）　由于没有工作，就打算和小王一块儿混这么两个月。两个月后的五月份好找工作。

(仕事がないため、とりあえず王さんと二ヶ月ぐらい無為に過ごそうかと考えている。･･･)

（８）　奶奶，我正忙着呢。您再给爷爷满满的斟上那么一杯酒啊？

(おばあさん、今忙しいの。おじいさんにお酒をもう一杯ぐらい注いだら?)

（５)「二ヶ月」、（６)「一杯」という数量は指示詞“这么”“那么”に修飾され、話し手は(５)の「二ヶ月」の時間が「待てる」最低限の時間、(６)の「一杯」の酒の量が「飲める」最小限の量であることを予測、想定している。両者とも少なさを強調する「強調の指示詞」である。この場合、“这么”“那么”は文の中で特に強く発音される。

これに対し、(７)は(５)と同じく“这么两个月”、(８)は(６)と同じく“那么一杯”となっているが、数量を強調する意味がなく、「概数の指示詞」となる。この場合、“这么”“那么”は特に強く発音されない。

### 5.2.2　共起要素

「強調の指示詞」と「概数の指示詞」は共起要素の面でも違いがある。「強調の指

示詞」は程度を表す副詞などと共起する。例えば、少なさや短さを強調する（９）の“就”、(10)の“仅”、多さと長さを強調する(11)(12)の“都”である。

少なさや短さを強調する「強調の指示詞」

（９） 爱等不等就，这么两个月都等不了了？
（待つことを好む好まざるにかかわらず（待つか待たないかは勝手だけど）、〈わずか〉二三ケ月も待てないの?） (=（５）)

(10) 仅那么一块[2]钱能卖什么？
（一円だけで買えるものがある）

多さや長さを強調する「強調の指示詞」

(11) 我们都认识这么十年了，还不相信我？
（私達は知り合ってから十年も経った。まだ信じてくれないのか。）

(12) 他都生了那么四个孩子了，还说生？
（彼はもう四人の子供もいるのに、まだほしいって?）

（９）(10)の“这么”“那么”は「二ヶ月」の時間の短さと「一円」の金額の少なさを強調し、(11)(12)の“这么”“那么”は「十年」の年数の長さや「四人」の数の多さを強調している。強調の“这么”“那么”は多くの場合、少なさや短さを表わす“就・仅(ただ)”、多さや長さを表わす“都(もう)”などの副詞と共起している。日本語に訳すと、多くの場合は副詞「わずか」「もう」などで対応している。

一方、「概数の指示詞」の例文を見てみよう。

(13) 由于没有工作，就打算和小王一块儿混这么两个月。两个月后的五月份好找工作。
（仕事がないため、とりあえず王さんとこの二ケ月ぐらいを無為に過ごそうかと考えている。…） (=（７）)

[2] “块”：〈量〉貨幣を数える場合に用いる。“一块钱(1 元)”“两块钱(2 元)”

(14)　如果有和唐老师交谈的那么一次[3]机会应该学到很多东西吧。

（もし唐先生と一度ぐらい話し合う機会があれば､たくさん勉強できるはずだ。）

まず、(13)(14)とも“这么”“那么”は「概数の指示詞」であり、多さや少なさを表わすという「強調の指示詞」の解釈はできない。(13)の「二ヶ月」は特定の二ヶ月、(14)の「機会」はまだ実現していない機会の意味となり、話し手は「二ヶ月」「一回」を物事の実現に至るまでの最小限や最大限の数量として述べているわけではない。実際、「強調の指示詞」と共起して少なさや短さを表わす“才・仅仅(ただ)”、多さや長さを表わす“都(もう)”などを加えると非文となる。

(15)　*由于没有工作，就打算和小王一块儿混仅(都)这么两个月。两个月后的五月份好找工作。

(16)　*如果有和唐老师都(仅)交谈的那么一次机会应该学到很多东西吧。

### 5.3　指示詞の機能に関する考察

#### 5.3.1　「強調の指示詞」の機能

吕(1985)は、“这么QN”と“那么QN”の指示詞“这么”“那么”は数量詞の程度を強調する役割を果たしていると指摘している。程度を強調するというのは、副詞と似ている役割を果たしているということである。

(17)　我们只有三个孩子。

（私たちはたった三人の子供がいる。）

(18)　我们都三个孩子了，不再生了。

（私たちはもう三人の子供がいるから、もう産まない。）

(17)の副詞“只有(たった)”は子供の人数が「三人」という少なさ、(18)の副詞“都(もう)”は子供の人数が「三人」という多さを強調している。確かに、数字の程度を強調する指示詞とかなり似ている。

---

[3] “次”:〈量〉回数を数える場合に用いる。“一次经验(1回の経験)”“两次事故(2回の事故)”

しかし、指示詞“这么”“那么”は副詞より使用上の制約がある。同じ構造においても、程度を強調する副詞がなければ指示詞が使えないこともある。

(19)　*我们有这么三个孩子[4]。

（私たちはたった三人の子供がいる。）

(20)　*我们有这么三个孩子了，不再生了[5]。

（私たちはもう三人の子供がいるから、もう産まない。）

また、指示詞と副詞の両方が文に現れる場合、果している機能の重点も異なる。

(21)　我们只有这么三个孩子。

（私たちはたった三人の子供がしかいない。）

(22)　我们都那么三个孩子了，不再生了。

（私たちはもう三人の子供がいるから、もう産まない。）

(21)(22)のように指示詞と副詞の両方がある場合、文の中で特に強調されるのは副詞になる。数量の程度を強調する機能は副詞“只有(たった)”“都(もう)”に奪われ、指示詞は副詞の強調の意味を強める脇役になっているに過ぎない。

またこの場合、指示詞“这么”“那么”は本来の指示機能が多少残っていることも考えられる。例えば、(21)では、目の前に現れている「現在」の意味に、(22)では「すでに子どもを三人産んだ」という「過去」の意味に取れる。それは、指示詞が本来の「近指」「遠指」の機能を発揮しているからだと考えられる。従って、上述した(19)(20)の指示詞は程度を強調する意味はないため、程度を強調する意味としては非文となるが、現場指示としては成立する。

以上から、“这么QN”と“那么QN”構造では指示詞“这么”“那么”は副詞と似ている程度強調の機能を果しているが、副詞より制約が厳しく、また、指示詞は程度強調機能以外に指示機能も同時に持っていることがわかる。

---

[4] 三人の子供が目の前にいる、指で三人の子供を指しながら話している現場指示の場合、正文となる。この場合、指示詞“这么”は現場にいる三人の子供の様子を指している。本章で議論している「強調の指示詞」として用いている場合、非文となる。

[5] 同上

### 5.3.2 「概数の指示詞」の機能

この節では、「概数の指示詞」[6]の名前の由来と機能について議論する。

(23) 店员： 请问您点菜吗？

（ご注文はお決まりでしょうか。）

客人A： 还有几个朋友没来呢。先不点菜。

（まだ何人か来てないので、後でいいですか。）

客人B： 先来喝的吧。

（とりあえず、飲み物を注文しましょうか。）

客人A： 那，先来它五瓶[7]啤酒？怎样？

（じゃ、ビールを五本?どう?）

客人B: 行。边喝边等。

（よし、飲みながら待とう。）

(24) 店员： 请问您点菜吗？

（すみませんが、ご注文はいかがでしょうか。）

客人A： 还有几个朋友没来呢。先不点菜。

（や、まだ何人か来てない。）

客人B： 先来喝的吧。

（とりあえず、飲もうか。）

客人A： 那，先来它那么五瓶啤酒吧。怎样？

（じゃ、ビールを五本ほど、どう?）

客人B： 行。边喝边等。

（よし、飲みながら待とう。）

---

6 中国語の「左右(ほど/ぐらい)」は概数表現として一般的に知られている。「数量を程度化する」機能も果たしていると考えられる。

如果可以能不能先给我个三瓶左右呢？

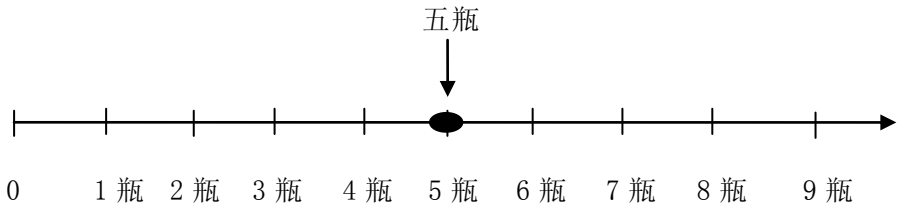
（もしできれば、三本ぐらいいただけませんか。）

本章では主に「概数の指示詞」は概数表現「ほど」「ぐらい」に類似する機能を持つことを中心に議論し、「左右」との違いについては言及しない。

7 “瓶”:〈量〉瓶に詰めたものを数える場合に用いる。“一瓶啤酒(1 本のビール）”“两瓶汽水(2 本の炭酸飲料)”

指示詞のない(23)は「ビールを五本」という意味となる。図(1)のように「五本」という具体的な数字であり、四本でもなく六本でもなく、そして四本とも六本とも関係のない「五本」という「個体」を意味している。

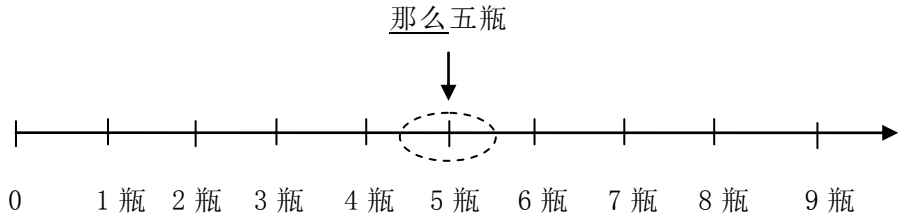
図(1)




これに対して、(24)は“五瓶”という具体的な数量を表わしているわけではなく、「五本」という数量を含む、飲めるビールの数の大体の範囲を表わしている。そのビールの数量とは、話し手が頭中で考える、他の友達が来るまでに二人で飲めると想定している大体の本数である。「四本より多く、六本までなら飲める」ということを頭の中で計算し、最終的に「五瓶」が一番適切な数字、つまり「最適値」であると判断したわけである。また、話し手は具体的な数値「五本」を「最適値」として選び、「四本より多く、六本まで」という「集合」の意味を表している。「四本」「六本」などの数字と関係のない(23)の単なる「五本」に比べると、(24)は単なる「五本」という具体的な数ではなく、「四本」「六本」と関係のある「五本」の意味となる。この場合、指示詞が使われる。つまり、最適値「五本」の前に指示詞をつけて、「五本」を含めている「四本から六本まで」という大体の範囲を表している。

このとき、図(2)のように、指示詞は数量詞“五瓶”という数字としての具体的意味ではなく、「“五瓶(数量詞)”を基準とする一定の範囲」という概数の意味になる。

図(2)



指示詞を“五瓶”の前につけることで、具体的な数量「五本」それ自体が含まれる概数「五本ほど」という「程度」に変換されている。指示詞が程度を肩代わりするという役割を果たしているのである。

また、もう一つの例を見てみよう。

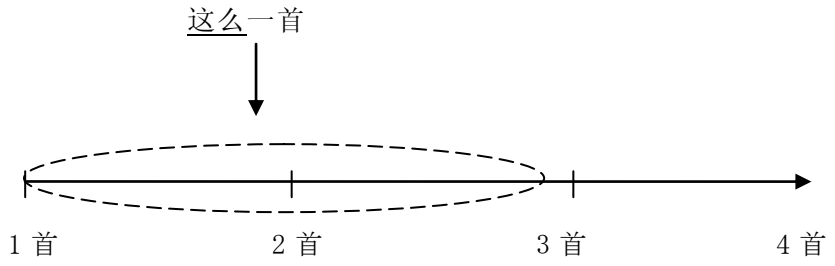
(25)　曹操の長男曹丕は次男曹植の才能を嫉妬して殺したいと思っている。そこで突然ある時、七歩以内で詩を作れ、作れなかったら殺すと命じた。

“你不是很有才能吗？你要是能在七歩内作出这么一首[8]诗，就不杀你。”

(「才能があるんでしょ?もし七歩以内で(少なくとも)詩を一つぐらい作れ！」)

(25)では、「一つの詩を作ってくれ」という命令ではなく、「才能があることを証明するために、(少なくとも)七歩以内で詩を一つぐらい作れ」と命じている。この場合、話し手は曹植に才能があるなら、七歩以内で少なくとも一つの詩が作れると想定している。文に現れた“一首”は最適値として例示され、「“一首”を最低限度とする一定の範囲」の意味となる。このようなニュアンスは具体的な数字の意味を表す数量詞だけでは表すことができず、その前に指示詞が加えられて“这么一首”となる。図(4)のように、指示詞“这么”を数量詞“一首”の前に加えることで具体的な数量“一首”の具体的な意味を無くし、それを含む大体の範囲の意味を付与し、「“一首”ほど」のように程度化している。

図(3)




8　“首”:〈量〉詩や歌などを数える場合に用いられる。“一首诗(1 つの詩)”“两首歌(2 つの歌)”

このように、吕(1985)が“冗余的”とする指示詞は、具体的な数値をぼかして「話し手が想定している最適値を基準とする一定の範囲」に程度化するという機能を持っている。

日本語においても似ている現象が見られる。井上(1999)は日本語の概数表現としての「Xほど/ぐらい」について、単なる概数表現というよりは、「一定の度合を満たす、Xを基準とした一定の範囲」を表すと述べている。

(26)　(アジを)三枚ほどおろしてもらおうかしら。

「三枚」だけだと「三枚」という〈個体〉としての数値に「おろしてもらう」という事柄を関連づけているだけであるが、「三枚ほど」とすると「おろしてもらう」という事柄に関連付けられるのは「買い求めるのに的確であると発話時点において考えられる」という〈属性〉を持つ数の集合であり、「三枚」はその中の「最適値」として提示される。このような「ほど/ぐらい」は中国語の「概数の指示詞」の役割に当てはまり、同じく程度化する役割を果たしていると見られる。

### 5.4　使用条件の再考察

以上、“这么QN”と“那么QN”の二種類の指示詞はともに「程度」に関わる意味を表すことを述べた。一つは数量の程度を強調する役割で、もう一つは、数量を程度化する役割である。以下では、「強調の指示詞」と「概数の指示詞」が用いられる条件について具体的に見てみたい。

結論を先に言うと、「強調の指示詞」と「概数の指示詞」のいずれを使用するのかは、根本的には修飾されている数量詞が具体的な「個体」を意味するか、それとも、「集合の最適値」を意味するかによって決定される。

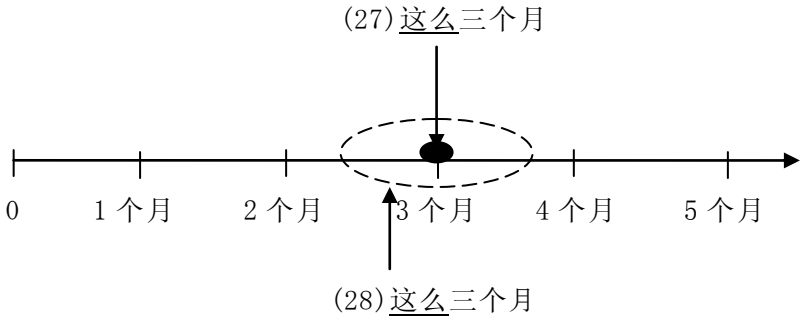
(27)　到今天才三个月。这么三个月你都坚持不了？爷爷都坚持了一辈子。
(今日までまだ三ヶ月だよ。たったの三ヶ月も我慢できないの?お爺さんは一生我慢してきたよ。)

(28)　由于没有工作，就打算和小王一块儿混这么三个月。

(仕事がないため、とりあえず王さんと三ヶ月ぐらい無為に過ごそうかと考えている。)　(=(７)(13))

図(4)で示すように、(27)では、「お爺さんは一生我慢してきた」という事柄に対して「三ヶ月」は短いということを述べている。指示詞はその短さを強調している。文の意味としては、この「三ヶ月」は過ぎた時間(「個体」)を意味しており、「二ヶ月」「四ヶ月」とは全く関連づけられない。一方、(28)「概数の指示詞」が修飾している「三ヶ月」は、「二ヶ月」「四ヶ月」と関連づけがある。「二ヶ月から四ヶ月まで」という集合(範囲)を表すために、「三ヶ月」が最適値として例示されている。つまり、(27)の「三ヶ月」は具体的な数字で、(28)の「三ヶ月」はある集合の中の最適値としてあげられた数字である。

図(4)




「概数の指示詞」は、数量詞を修飾して大まかな範囲(集合)を指すため、具体的な時間を入れると非文となる。

(29)　这么十天你都坚持不了？

(たった10日でも我慢できないの?)

(30)　*反正还有积蓄，先凑副这么十天。

(どうせまだ貯金があるから、とりあえず十日ぐらい我慢しよう。)

(29)の「十日」は具体的な個体としての時間なので、正文となる。一方、(30)では具体的過ぎる(確かな)日数「十日」を入れると、ある範囲(集合)の意味がなくなり、指示詞の存在のために非文となる。ただし、指示詞が無ければ、正文となる。

(31)　反正还有积蓄，先凑副十天。
　　(どうせまだ貯金があるから、とりあえず十日我慢しよう。)

一方で、ある範囲を表す数値を入れると、とても自然な文となる。

(32)　反正还有积蓄，先凑副这么十几二十天。看看情况再说。
　　(どうせまだ貯金があるから、とりあえず十日二十日ぐらい我慢しよう。様子を見てから考えよう。)

以上のように、指示詞に修飾されている数量詞が意味する範囲は、「強調の指示詞」と「概数の指示詞」を区別する手掛かりとなる。言い換えれば、数量詞が具体的な数字を意味する場合は「強調の指示詞」が使用され、ある「集合」を意味する場合、「概数の指示詞」が使用されるということである。

### 5.5　指示詞の機能

以上のように中国語の“这么 QN”と“那么 QN”構造は以下の(33)(34)、(35)(36)の二種類がある。(33)(34)の指示詞はQ(数量詞)を強調する「強調の指示詞」であり、(35)(36)はQ(数量詞)をぼかす「概数の指示詞」であることが明らかになった。

(33) a.　爱等不等，这么两个月都等不了了？
　　b.　待つことを好む好まざるにかかわらず、(待つか待たないかは勝手だけど)〈わずか〉二ケ月も待てないの?

(=(１))

(34) a.　有那么八个小伙子一会就干完了。
　　b.　男が八人もいるのですぐに終わるよ。

(=(２))

(35) a. 由于没有工作，就打算和小王一块儿混这么两三个月。

b. 仕事がないため、とりあえず王さんと二三ヶ月ぐらい無為に過ごそうかと考えている。

(=(３))

(36) a. 奶奶，我正忙着呢。您再给爷爷满满的斟上那么一杯酒啊？

b. おばあさん、今忙しいの。おじいさんにお酒をもう一杯ぐらい注いだら？

(=(４))

しかし、二種類の指示詞の用法は一つの言語形式“这么QN”と“那么QN”構造に存在するのはそれなりの理由がある。この論文では“这么QN”と“那么QN”構造による「概数の指示詞」の用法は本来の「強調の指示詞」の用法から派生された用法であると考えられる。つまり、“这么QN”と“那么QN”構造において指示詞“这么”“那么”の本来の機能はQ(数量詞)を強調する機能であるが、その機能が虚化され、指示詞の機能が失い、概数の用法が派生された。ということは、“这么QN”と“那么QN”構造において「概数の指示詞」用法は「強調の指示詞」用法より派生された用法である。「概数の指示詞」は虚化された指示詞であり、一種の虚化現象と見られる。

日本語の指示詞は「こんなに/そんなに/あんなに」は数量詞を強調する機能を持っていない。

(37) a. 爱等不等，这么两个月都等不了了？

b. *待つことを好む好まざるにかかわらず、こんなに二ケ月も待てないの？

(=(１)(33))

(38) a. 有那么八个小伙子一会就干完了。

b. *男があんなに八人もいるのですぐに終わるよ。

(=(２)(34))

また、日本語指示詞は中国語のように虚化された指示詞の機能も持っていない。

(39) a. 由于没有工作，就打算和小王一块儿混这么两三个月。

b. *仕事がないため、とりあえず王さんとこんなに二三ヶ月無為に過ごそうかと考えている。

(=(３)(35))

(40) a. 奶奶，我正忙着呢。您再给爷爷满满的斟上那么一杯酒啊？

b. *おばあさん、今忙しいから。おじいさんにお酒をさらにこんなに一杯注いだら?

(=(４)(34))

日本語において、中国語のような強調機能の指示詞は副詞で対応し、概数機能の指示詞は概数表現が働いていることになっている。

## 5.6 本章のまとめ

本章では中国語の“这么QN”と“那么QN”構造において指示詞“这么”“那么”の機能を明らかにし、日本語指示詞との非対応問題について考察した。

結論は以下のようになっている。

① 中国語では、同じ「指示詞+数量詞+名詞」構造においても指示詞は二種類の異なる用法を持っている。一つは数量の程度を強調する「強調の指示詞」であり、もう一つは「数量を程度化する」機能を果たす「概数の指示詞」である。

② “这么QN”と“那么QN”構造による「概数の指示詞」の用法は本来の「強調の指示詞」の用法から派生された用法であると考えられる。“这么QN”と“那么QN”構造において「概数の指示詞」“这么”“那么”は「強調の指示詞」の機能が虚化され、指示詞の機能が失われ、派生されたものである。

③ 日本語においては「強調の指示詞」と「概数の指示詞」に対して、いずれも指示詞での対応ができない。「強調の指示詞」の機能については副詞などで対応し、「概数の指示詞」の機能については、概数表現「ぐらい」「ほど」が担っている

[9]。中国語指示詞は日本語指示詞と比べ、指示詞が指示機能以外の役割も果たしており、当言語の中では重要な位置にあると言える。

[9] 「ほど」は概数表現であるが、「ぐらい」は本章で議論した中国語指示詞“这么”“那么”と同じく「強調機能」と「概数機能」の両方を持っている。
(1)　3 時間ぐらい待った。(概数)
(2)　3 時間ぐらいまで待った。(強調)

# 第 6 章　複数の修飾要素を含む名詞句における日中指示詞の対照

（1）のように日本語と中国語とも二つの修飾要素（「家伝の」「連城の壁に値する」）を主名詞（「絵」）の前に置く言語類型である。

（1）a. ［家伝の］［連城の壁に値する］絵
　　b. ［祖上传的］［价值连城的］画。

しかし、収集したデータ（付録：データ資料）によれば、日本語と中国語は非対応の例がほぼ 29%を占めている[1]。本章では日中複数の修飾要素における指示詞の位置と機能の非対応問題を現象とする。

## 6.1　問題提起

二つの修飾要素と指示詞を含む名詞句は、修飾要素と指示詞の位置により、「指示詞先頭型」「指示詞末尾型」「指示詞の中間型」の三種類の構造がありうる。以下、指示詞は「D」、修飾要素は「M」、名詞は「N」と表記する。

A　「指示詞+修飾要素+修飾要素+名詞」（D+M+M+N）［指示詞先頭型］
B　「修飾要素+修飾要素+指示詞+名詞」（M+M+D+N）［指示詞末尾型］
C　「修飾要素+指示詞+修飾要素+名詞」（M+D+M+N）［指示詞中間型］

（2）（3）のように日本語と中国語のいずれも指示詞先頭型、指示詞末尾型、指示詞中間型のいずれも成立する。

（2）a. 私はその［家伝の］［連城の壁に値する］絵を売った。
　　b. 私は［家伝の］［連城の壁に値する］その絵を売った。
　　c. 私は［家伝の］その［連城の壁に値する］絵を売った。

[1] 日本語と中国語は双方に指示詞が用いられているが、異なる機能を果たしている場合も含まれている。

（3） a. 我卖了那幅[2][祖上传的][价值连城的]画。

b. 我卖了[祖上传的][价值连城的]那幅画。

c. 我卖了[祖上传的]那幅[价值连城的]画。

しかし、日本語文（3）では指示詞先頭型、指示詞末尾型、指示詞中間型における指示詞はともに主名詞“画(絵)”を強調する役割で、指示詞の位置によって異なるニュアンスが見られない。つまり、指示詞が特定のニュアンスを表すために、特定の位置での使われることが必須であるわけではないと言える。これに対して、中国語（3a)「指示詞先頭型」の指示詞には特定化の機能、（3b)「指示詞末尾型」の指示詞には状態・様子を指示する機能、（3c)「指示詞中間型」の指示詞には他と区別する機能が働いている。中国語では指示詞の場所によって文のニュアンスが極めて違うため、異なるニュアンスを表すには指示詞のその位置での使用が必須となると見られる。

また、（4)（5)のように日本語では指示詞先頭型、指示詞末尾型、指示詞中間型のいずれも成立するが、中国語では指示詞中間型は成立するが、指示詞先頭型、指示詞末尾型は成立する場合としない場合というケースもある。

（4） a. 家では、その[私の]［頑固な]父にはとても困っている。

b. 家では、[私の]［頑固な]その父にはとても困っている。

c. 家では、[私の]その［頑固な]父にはとても困っている。

（5） a. *在家里，那个[我]［倔强的]爸爸最让人头疼。

b. *在家里，[我][倔强的]那个爸爸最让人头疼。

c. 在家里，[我]那个[倔强的]爸爸最让人头疼。

以上のように、中国語には複数の修飾要素における指示詞の働きの重要度と制約があると見られる。本文ではこの観点を説明するために、指示詞先頭型、指示詞末尾型、指示詞中間型におけるそれぞれ日本語と中国語指示詞の機能について考察、分析する。

[2] “幅”:〈量〉布で作られたものや絵などを数える場合に用いられる。“一幅画(1つの絵)”“两幅窗帘(2つのカーテン)”

## 6.2　先行研究

中国語の指示詞と修飾要素との位置関係に関して、吕(1985)は「指示詞が修飾要素の後にある場合、その修飾要素は決定的な役割を果たしているが、逆に修飾要素の前にある場合、その修飾要素はただの描写の役割でしかない。」[3]と述べている。つまり、指示詞の位置には修飾要素の重要度が現れている。

（６）a. 那本［很厚的］书。　　←你要这两本中的哪本？
　　（あの［とても厚い］本だ。）　　(2冊の中のどちらが欲しい。)
　　b. ［很厚的］那本书。　　←你今天买的是哪本书？
　　（［とても厚い］あの本だ。）　　(今日買ったのはどの本?)

（６a)と（６b)の根本的な区別はその修飾要素が文全体の意味に果している重要度である。(6a)は本を指している状況での発話である。この場合、焦点は指示詞の部分にあり、修飾要素“很厚的”(厚い)は指差した“本”の形態を述べているにすぎない。（６a)を答えとする疑問文を作ると“你要这两本中的哪本？(2冊の中のどれが欲しい。)”となる。一方、（６b)における焦点は「厚い」という特徴にある。この場合、指示詞は聞き手も知っている本を指しているだけで、その場で指しているわけではない[4]。（６b)を答えとする疑問文を作ると“你今天买的是哪本书？(今日買ったのはどの本?)”となる。

盛(2010)の調査によると中国語では指示詞と修飾要素が共同で主名詞を修飾する場合に、「指示詞+修飾要素+主名詞(D>R>N)」という構造を採用する例文の割合は 75%であり、「修飾要素+指示詞+主名詞(R>D>N)」という構造の例文の３倍である。即ち、「指示詞+修飾要素+主名詞(D>R>N)」構造は相対的に優位にあると述べている[5]。

---

[3] 原文：“一般说，‘这·那’在定语之后，那个定语就显得有决定作用；‘这·那’在前，那个定语就显得只有描写的作用。”(吕 1985)

[4] 現場にある本を指す場合、（４b)“很厚的那本书”の言い方は言えないわけではないが、不自然さが感じられる。目の前にある二つのもののどちらを選ばせる場合、指で指していても指示詞を先に出すのが自然的である。そうしなければ、指で指しているため、修飾節“很厚的”は余計になっている。

[5] 盛(2010)では R は修飾要素(この論文の M)、D は指示詞、N は主名詞のことを指している。

表(1)　中国語における指示詞と修飾要素が主名詞を修飾する例文の比例(盛)

| | D>R>N | R>D>N | 合計 |
|---|---|---|---|
| 这 | 45(83.3%) | 9(16.7%) | 54(100%) |
| 那 | 58(72.5%) | 22(27.5%) | 80(100%) |
| 合計 | 103(76.3%) | 31(23.1%) | 134(100%) |

また、盛(2010)では日本語は後置詞型言語であり、前置詞がないため、SOV 構造の日本語は一般的に「修飾要素＞指示詞＞主名詞(R>D>N)」を使っている。もし、「指示詞＞修飾要素＞主名詞」を使うとしたら、指示詞が主名詞以外の格成分を修飾するようにも見えてしまうため、日本語では通常「指示詞＞修飾要素＞主名詞(D>R>N)」構造が使われない」と指摘されている。

（７）　??その夢寐にも忘れなかった人の前に、丑松は今偶然にも腰かけたのである。

（盛 2010）

しかし、（８）のように日本語では「指示詞＞修飾要素＞主名詞」構造の例が少なくない。また、（８）の「その」が主名詞「顔」以外の格成分を修飾するように見えない。

（８）　黙っていると、その律儀で素朴な感じの顔はひどく老けてみえる。

（『あした来る人』）

本研究の重心は複数の修飾要素を含む名詞句における各構造の割合にではなく、その中の指示詞の機能に置いている。中国語において複数の修飾要素を含む名詞句に関して吕(1985)は、「複数の修飾要素がある場合、指示詞はよく修飾要素の後に置くが、中間に置く場合もある。」[6]と述べているが、その場合の指示詞の機能については言及していない。

[6] 原文：“连用两个或多个不同种类的定语时，“这”“那”常常放在所有定语之后，有时候也放在一部分定语之前而在一部分定语之后。”（吕 1985）

（9） 这就是[你昨天说的][我们的]那个亲戚。 （吕 1985）

（こちらはあなたが昨日言った私たちのその親戚です。）

(10) 钱赚多了千万不要赌，将来留着给[你]那个[死了母亲的]儿子用。 （吕 1985）

（お金が儲かったらばくちをしないで。将来あなたのその母親を失った息子に残しておこう。）

また、複数の修飾要素がある場合、(11)のような指示詞先頭型もありうる。

(11) 真想回去看看那个[你说的][咱]亲戚

（私のそのあなたが言った私たちの親戚に会いに帰りたい。）

つまり、二つの修飾要素と指示詞を含む名詞句は、修飾要素と指示詞の位置により、「指示詞先頭型(D+M+M+N)」、「指示詞末尾型(M+M+D+N)」、「指示詞中間型(M+D+M+N)」の三種類の構造になる。

### 6.3 分類

指示詞先頭型、指示詞末尾型、指示詞中間型の三種類の構造は、修飾要素が人称代名詞か修飾節か、主名詞が特定の事物を指すか(特定名詞)指さないか(不特定名詞)で次のようにA～Cの三つに分類できる。

Ⅰ 「指示詞+修飾要素+修飾要素+名詞」(D+M+M+N)［指示詞先頭型］

A 「指示詞+人称代名詞+修飾節+特定名詞/不特定名詞」

B 「指示詞+修飾節+人称代名詞+特定名詞/不特定名詞」

C 「指示詞+修飾節+修飾節+特定名詞/不特定名詞」

Ⅱ 「修飾要素+修飾要素+指示詞+名詞」(M+M+D+N)［指示詞末尾型］

A 「人称代名詞+修飾節+指示詞+特定名詞/不特定名詞」

B 「修飾節+人称代名詞+指示詞+特定名詞/不特定名詞」

C 「修飾節+修飾節+指示詞+特定名詞/不特定名詞」

Ⅲ　「修飾要素+指示詞+修飾要素+名詞」(M+D+M+N)［指示詞中間型］

A　「人称代名詞+指示詞+修飾節+特定名詞/不特定名詞」

B　「修飾節+指示詞+人称代名詞+特定名詞/不特定名詞」

C　「修飾節+指示詞+修飾節+特定名詞/不特定名詞」

収集したデータによれば、「指示詞先頭型」「指示詞末尾型」「指示詞中間型」のいずれも日本語と中国語指示詞の対応していない例文が見られる。

## 6.4　中国語指示詞の考察

### 6.4.1　指示詞先頭型(D+M+M+N)

指示詞先頭型(D+M+M+N)の場合、主名詞は特定の事物を指さず、先頭の指示詞は名詞句全体を特定化する役割を果たしている。

(12)　你读过那部[7][何荆夫的][在美国出版的]书稿，有没有发现什么问题？
(おまえ、あの何荊夫のアメリカで出版された原稿を読んでいたが、なにか問題を見つけなかったかね?)

(13)　真想回去看看那个[你说的][咱]亲戚。
(あの[あなたが言った][私たちの]親戚に会いに帰りたい。)　(=(11))

(14)　我卖了那幅[祖上传的][价值连城的]画。
(私はその家伝の連城の璧に値する絵を売った。)　(=(３a))

これらの例において指示詞が特定化の役割を果たしていることは、指示詞を用いない例と対比するとわかる。

(15)　你读过那部[何荆夫的][在美国出版的]书稿，有没有发现什么问题？
(おまえ、その何荊夫のアメリカで出版された原稿を読んでいたが、なにか問題を見つけなかったかね?)　(=(10))

7　“部”:〈量〉長編小説やドラマ、映画を数える場合に用いる。“一部电视剧(一つのドラマ)”“两部电影(二つの映画)”“三部小说(三つの小説)”

(16)　你读过[何荆夫的][在美国出版的]书稿，有没有发现什么问题？
（おまえ、何荊夫のアメリカで出版された原稿を読んでいたが、なにか問題を見つけなかったかね?」）

(15)の“那部[何荆夫的][在美国出版的]书稿(あの何荊夫のアメリカで出版された原稿)”は、“何荊夫”の特定の“书稿(原稿)”を指している。(16)のように指示詞を用いない場合は特定の“书稿”を指すことにならず、“何荆夫的”のアメリカで出版されたの“书稿”を意味することになる。二つの修飾要素の前の位置にある指示詞“那部”は指示対象を特定化する役割を果たしている。

指示詞先頭型の場合、主名詞が特定名詞の場合は非文となる。もともと特定の事物を指すのにさらに特定化の意味を加えることになるからである。

(17)　*你读过那部[何荆夫的][在美国出版的]《沉沦》，有没有发现什么问题？
（「おまえ、その何荊夫のアメリカで出版された『沉沦』を読んでいたが、なにか問題を見つけなかったかね?」）

修飾要素が主名詞の特定化に結びつく場合も指示詞の使用は不自然になる。たとえば、(15)の“在美国出版的(アメリカで出版された)”を具体的な書名を含む“名叫《沉沦》的(『沉沦』という)”と入れ替えた(18)を見てみよう。

(18)　*你读过那部[何荆夫的][名叫《沉沦》的]书稿，有没有发现什么问题？
（「おまえ、その何荊夫の「沉沦」という原稿を読んでいたが、なにか問題を見つけなかったかね?」）

(18)では、修飾要素“名叫《沉沦》的(『沉沦』という)”が加わった段階で名詞句が特定の事物を指すようになり、特定化の機能を果たしている指示詞との併用は不自然になる。

先行研究で論じられた修飾節が一つの場合と同様、[指示詞先頭型]の焦点も指示詞にあり、修飾要素は主名詞が表す事物の特徴や形態などを述べているにすぎない。修飾要素が事物の特定化に結びつくことは、指示詞と修飾要素の機能の逆転につながり、

そのため不自然になると考えられる。

次の(19)では a→c の順に容認度が下がる。指示詞“那个”の後の修飾要素も名詞も具体的な事物を指さない a は非常に自然な文である。一方、b では“你说的摔断腿的(あなたが言った足が折れた)”が主名詞“亲戚”をかなり特定化しており、指示詞の使用は不自然さが感じられる。c は主名詞“爸爸(父)”が特定の人を指すため、指示詞で特定化することはさらに不自然である。

(19) a. 真想回去看看那个[你说的][咱]亲戚。
(その[あなたが言った][私たちの]親戚に会いに帰りたい。) (=(11)(13))
b. ?真想回去看看那个[你说的][摔断腿的]亲戚。
(あの[あなたが言った][足が折れた]親戚に会いに帰りたい。)
c. *真想回去看看那个[你说的][咱]爸爸。
(あの[あなたが言った][私たちの]父に会いに帰りたい。)

ただし、特殊な文脈においては、主名詞が特定の事物を指してもよい。たとえば、次の(20)は、二つの修飾要素“[我][从没见过面的](私の会ったこともない)”が「父」の属性に関してよく分からないという意味を付与するために自然になる。

(20) 那个[我][从没见过面的]爸爸到底是死是活呀。
(その私の会ったこともない父は一体生きているかどうか。)

以上のように、[指示詞先頭型] における指示詞は具体的な物事を指示せず、名詞を特定化する機能を果たしている。この場合、指示詞以外の修飾要素ならびに主名詞が特定の事物の指示にならないことが必要である。

### 6.4.2 指示詞末尾型(M+M+D+N)

指示詞末尾型(M+M+D+N)においては、指示詞が修飾要素を指し、修飾要素の内容を強調しながら、直接言及されていない他の事物との区別を示す機能を果たしている。この場合、修飾要素は意味上重要である。

(21)　你读过［何荆夫][名叫《沉沦》的]那部书稿，有没有发现什么问题？

(「おまえ、何荊夫の「沉沦」というその原稿を読んでいたが、なにか問題を見つけなかったかね?」)

(22)　这就是[你昨天说的][我们的]那个亲戚。

(こちらはあなたが昨日言った私たちのその親戚です。)　(=(９))

(23)　[你说的][还有个伙伴在后面的]那句[8]话是实话。

(あなたが言った「まだ一人が後ろにいる」その話は本当の話です。)

(21)(22)(23)の場合、話し手は主名詞が表す事物についてよく分かっており、他の事物と区別するため、修飾節の内容を特に取り立てている。先に述べたように、“[很厚的]那本书(とても厚いあの本)”のように指示詞が修飾節の後にある場合は修飾節に焦点が置かれるが、これは修飾節が二つ以上の場合でも同じだということである。

指示詞末尾型の場合、主名詞が特定の事物を指す場合はこの構造は不自然になる。修飾要素による他との区別が特に必要ないからである。たとえば、(24)(25)では名詞「父」「一人っ子」という言葉は、対象が1人しかいないことを意味しており、すでに他と区別する必要がない。

(24)　*在家里，[我][倔强的]那个爸爸最让人头疼。

(家では，私の頑固なその父にはとても困っている。)　(=(５b))

(25)　*[他][娇生惯养的]那个独生子又被抓进警察局了。

(彼の甘やかされて育ったその一人っ子はまた警察に捕まったよ。)

ただし、修飾要素が特定の事物を指すような意味を表す場合は、名詞を他に区別するより具体的な特徴として扱われ、正文となる。(26)では、特定の意味の修飾要素“[何荆夫]［名叫《沉沦的》]（何荊夫の「沉沦」という)”の後に指示詞“那部”が用いられているが、この場合、「何荊夫の「沉沦」という」は「原稿」に一つの特定の意味を付与した修飾要素である。

[8] “句”:〈量〉センテンスや言葉を数える場合に用いる。“一句话(ひと言)”“一句对白(一つのセリフ)”

(26)　你读过［何荆夫][名叫沉沦的]那部书稿，有没有发现什么问题？

(「おまえ、何荊夫の「沉沦」というその原稿を読んでいたが、なにか問題を見つけなかったかね?」)　(＝(21))

以上から、指示詞末尾型(M+M+D+N)における指示詞は、話題の中の名詞(区別する必要のあるもの)を他のものと区別するため、言及されているものの特徴に焦点を置くために用いられていると言えるであろう。

### 6.4.3　指示詞中間型(M+D+M+N)

指示詞中間型(M+D+M+N)において、二つの修飾節はほとんどの全部「同格関係」「所属関係」[9]である。

(27)　你读过[何荆夫]那部[名叫沉沦的]书稿，有没有发现什么问题？」

(「おまえ、何荊夫のそのアメリカで出版された『沉沦』を読んでいたが、なにか問題を見つけなかったかね?」)

(28)　在家里，[我]那个[倔强的]爸爸最让人头疼。

(家では、私の頑固なその父にはとても困っている。)　(=(５c))

指示詞中間型においては、事物が具体的な状態や様子をともなってイメージされているというニュアンスがある。この場合、指示詞は事物を指示しているというよりは、その事物が持つ特定の状態や様子を指示していると考えられる。

(29)　钱赚多了千万不要赌，将来留着给[你]那个[死了母亲的]儿子用。

(お金が儲かったらばくちをしないで。将来あなたのその母親を失った息子に残しておこう。)　(=(10))

(30)　这就是[你昨天说的]那个[摔断腿的]亲戚。

(こちらはあなたが昨日言ったあの足が折れた親戚です。)

[9] 所属先は所有主、時間、場所の場合を含めている。

(29)(30)は、“儿子(息子)”“亲戚(親戚)”が現場にいない場面での文である。この時、“儿子(息子)”“亲戚(親戚)”の具体像が話し手の目の前に浮かんでいるようなニュアンスがある。文全体の意味から見れば、(29)の修飾要素“死了母亲的(母親を失った)”、(30)“摔断腿的(足が折れた)”は「かわいそう」という気持ちが込められており、話し手は「息子」や「親戚」のかわいそうな様子を見ているように話している。指示詞はその様子を指している。

(31)　我这不是变方法儿把[你们]这几件[囫囫囵囵的]兵器给你们弄碎了吗?你们就只想方法儿把[我]这一地[破破烂烂的]瓦给我弄整了。　(吕 1985)
(私はあなた達のこの何丁かの丸のままの武器を砕いてやったじゃないか。あなた達は私のこのぼろぼろの瓦をきちんと整えてくれれば良い。)

(31)の前半の文の“兵器”は現場にあるが、もうすでに“囫囫囵囵的(丸のままの)”の状態ではない。話し手は兵器の割れる前の“囫囫囵囵的”を想像しながら指示詞を用いている。また、後半の文の“瓦”は現場に存在しているものであるが、指示詞“这一地”は目の前の瓦の“破破烂烂的(ぼろぼろの)”という状態を指し強調している。

次のように「修飾節+指示詞+人称代名詞+主名詞」の順序の場合は非文となる。指示詞の後の修飾要素“我们的(私たちの)”という人称代名詞により、「親戚」の状態や様子を表すという意味にはならないからである。

(32)　*这就是[你昨天说的]那个[我们的]亲戚。
(こちらはあなたが昨日言ったその私たちの親戚です。)

李(2009)はこのような指示詞を「指示詞の虚化」と指摘した[10]。第 5 章でもすでに「N1+指示詞+N2」の「同格構造」と「所属構造」における指示詞とも「助指」である。

---

10 「助指」が主に所属性の修飾語、同格性の修飾語、描写性の修飾語、動詞述語文と組み合わせて、後ろの名詞を修飾する。
他那高高大大的身子，堵在门框，痴痴呆呆地，像一段木头。
(彼はその高く大きなからだで入口をふさぎ、気抜けしたように立っている。) (李 2009)

このような指示詞の力が弱くなっていると指摘している。指示詞は「文脈に現れていないが、話し手の頭の中(記憶)に存在している具体像を指す」役割を果たしている。

### 6.4.4 まとめ

以上で中国語の三つの構造を考察したように、指示詞は二つの修飾要素の前、後、中間の位置の違いによって異なる機能を果たしていると言えるであろう。

(33)の名詞“画(絵)”は特定名詞ではなく、修飾要素“[祖上传的][价值不菲的](家伝の連城の璧に値する)”も特定の意味を持っていないため、「二つの修飾要素の前」の指示詞の特定化の機能、「修飾要素の中間」の指示詞の状態・様子を指示する機能、「修飾要素の後」の指示詞の他と区別する機能が働き、三つの構造とも正文となる。

(33) a. 我卖了那幅[祖上传的][价值连城的]画。
(私はその家伝の連城の璧に値する絵を売った。)
b. 我卖了[祖上传的][价值连城的]那幅画。
(私は家伝の連城の璧に値するその絵を売った。)
c. 我卖了[祖上传的]那幅[价值连城的]画。
(私はあの家伝のその連城の璧に値する絵を売った。) (=(3))

(34)の名詞“话(話)”は特定の意味となっていないが、修飾要素“[你说的][还有个伙伴在后面的](あなたが言った「まだ一人が後ろにいる」)”は名詞に特定の意味を付与する。したがって、「二つの修飾要素の前」の指示詞の特定化する機能が働きかけられなくなり、非文となる。

(34) a. *那句[你说的][还有个伙伴在后面的]话是实话。
(そのあなたが言った「まだ一人が後ろにいる」という話は本当の話です。)
b. [你说的][还有个伙伴在后面的]那句话是实话。
(あなたが言った「まだ一人が後ろにいる」その話は本当の話です。)
c. [你说的]那句[还有个伙伴在后面的]话是实话。
(あなたが言ったその「まだ一人が後ろにいる」という話は本当の話です。)

例(35)は“爸爸(父)”は他と区別する必要のない特定名詞であるため、「二つの修飾要素の前」特定化の機能も「修飾要素の後」の指示詞の他と区別する機能も働かず、非文となる。

(35) a. *在家里，那个[我] [倔强的]爸爸最让人头疼。
(家では、その私の頑固な父にはとても困っている。)
b. *在家里，[我][倔强的]那个爸爸最让人头疼。
(家では、私の頑固なその父にはとても困っている。)
c. 在家里，我那个[倔强的]爸爸最让人头疼。
(家では、私のその頑固な父にはとても困っている。) (=(5))

以上述べた、指示詞先頭型、指示詞末尾型、指示詞中間型の三つの構造において中国語の指示詞が果たしている機能をまとめると次のようになる。

表(2) 日本語指示詞の機能及びその条件

| 構造 | 指示詞の機能 | 修飾要素条件 | 名詞条件 |
|---|---|---|---|
| 指示詞先頭型(D+M+M+N) | 特定化する | 不特定 | 不特定 |
| 指示詞末尾型(M+M+D+N) | 他と区別する | なし | 不特定 |
| 指示詞中間型(M+D+M+N) | 具体像を指す | 所属関係、同格関係 | なし |

### 6.5 日本語指示詞の考察

日本語でも中国語と同じように、指示詞先頭型、指示詞末尾型、指示詞中間型の三つの構造がありうる。中国語では名詞に特定の意味を付与する修飾要素あるいは名詞自身は特定名詞にすると非文になるが、日本語ではまったく影響されない。いずれも修飾要素や名詞の属性に影響されず成立している。

A　「指示詞+修飾要素+修飾要素+名詞」(D+M+M+N)　[指示詞先頭型]

(36)

a. 私の[その][私たちの][去年足が折れた]親戚に会いに帰りたい。 ⇔ 真想回去看看[那个][我们的][去年摔断]亲戚。

b. [その][あなたが言った][私たちの]父に会いに帰りたい。 ⇔ *真想回去看看[那个][你说的][咱]爸爸。

c. 私の[その][あなたが言った][足が折れた]親戚に会いに帰りたい。 ⇔ ?真想回去看看[那个][你说的][摔断腿的]亲戚。

B　「修飾要素+修飾要素+指示詞+名詞」(M+M+D+N)　[指示詞末尾型]

(37)

a. 家では、[私の][頑固な][その]父にはとても困っています。 ⇔ *在家里，[我][倔强的][那个]爸爸最让人头疼。

b. こちらは[あなたが昨日言った][私たちの][その]親戚です。 ⇔ 这就是[你昨天说的][我们的][那个]亲戚。

c. [あなたが言った][まだ一人が後ろにいる][その]話は本当の話です。 ⇔ [你说的][还有个伙伴在后面的][那句]话是实话。

C　「修飾要素+指示詞+修飾要素+名詞」(M+D+M+N)　[指示詞中間型]

(38)

a. お金を儲かって将来[あなたの][その][母親を失った]息子に残しておこう。 ⇔ 钱赚了，将来留着给[你][那个][死了母亲的]儿子用。

b. こちらは[あなたが昨日言った][その][私たちの]親戚です。 ⇔ *这就是[你昨天说的][那个][我们的]亲戚。

c. こちらは[あなたが昨日言った][その][足が折れた]親戚です。 ⇔ 这就是[你昨天说的][那个][摔断腿的]亲戚。

各文の指示詞「その」は先行文脈の語句を指示する。つまり、これらの文の「その」は照応機能を果たしていると言える。例えば、(39)のように修飾された語句は前文に登場している。

(39)　(AさんとBさんは兄弟。)

A: 小さいとき、よく泣く親戚のことを覚えている?どうしてるのでしょうね。

B: 覚えているよ。(昔の写真のある人物を指して)これ、見て！

A: だれ?その人。

B: こちらは[あなたが言った][私たちの]その親戚です。

A: え?随分大きくなったね。

「その」の照応機能は中国語指示詞の「特定化する機能」「区別する機能」「状態・様子を指す機能」と異なっているため、前の文に修飾された語句さえ出れば、具体的な修飾節も特定名詞でも正文である。さらに、この構造における照応用法の指示詞「その」は必須ではない、いずれも省略できる。

(40)　こちらは[あなたが言った][私たちの]{φ/その}親戚です。

(40)の「その」を用いなくても前後の文脈さえあれば、前の文に現れた「親戚」に関する語句との照応が完成できる。「その」が省略されても名詞部分はその前に現れた同一対象(語句)に照応しているため、文全般の意味は変わらない。

一方、日本語指示詞「あの」「この」も三つの構造に同じく用いられる。「あの」を使用する場合は観念指示であり、指し示している名詞は話し手と聞き手に共通していることが前提条件であるが、「この」を使用する場合は指し示している名詞は現場に存在していることが前提条件である。「あの」は観念の中の事物を指し示し、「この」は名詞を指し示してその名詞を強調する機能を果たしている。ただし、指示詞先頭型(D+M+M+N)の場合、指示詞は修飾されている「名詞」より遠すぎて強調の力が弱まっている。

(41)　「おまえ、{φ/あの/この}[何荊夫の][アメリカで出版された]原稿を読んでいたが、なにか問題を見つけなかったかね?」

(41)の指示詞「あの」「この」は名詞「原稿」を特定する機能をしている。指示詞は修飾されている「原稿」より遠すぎて強調の力が弱まっている。そのため、二つの修飾要素の前に指示詞を使用する(41)と指示詞を使用しない場合、文と意味がほとんど変わらない。二つの修飾要素を隔てており、名詞への強調力はないと同じくらい弱まっている。したがって、「あの」「この」は必要がないと言えよう。

以上、日本語の指示詞先頭型(D+M+M+N)、指示詞末尾型(M+M+D+N)、指示詞中間型(M+D+M+N)における指示詞の機能について考察した。指示詞「この」「その」「あの」機能はそれぞれ異なるが、三つの構造とも指示詞の使用が必須ではない点は共通している。また、日本語指示詞の使用は修飾要素や名詞の特定の属性による制限はまったくない。

表(3)　日本語指示詞の機能とその条件

<table>
<tr><th rowspan="2">構造</th><th colspan="3">指示詞の機能</th><th colspan="3">修飾要素の条件</th><th colspan="3">名詞の条件</th></tr>
<tr><th>この</th><th>その</th><th>あの</th><th>この</th><th>その</th><th>あの</th><th>この</th><th>その</th><th>あの</th></tr>
<tr><td>指示詞先頭型<br>(D+M+M+N)</td><td rowspan="3">強調機能</td><td rowspan="3">照応機能</td><td rowspan="3">強調機能</td><td colspan="3" rowspan="3">なし</td><td rowspan="3">現場に存在</td><td rowspan="3">前文に出現</td><td rowspan="3">話し手と聴者の共通するもの</td></tr>
<tr><td>指示詞末尾型<br>(M+M+D+N)</td></tr>
<tr><td>指示詞中間型<br>(M+D+M+N)</td></tr>
</table>

### 6.6　指示詞の機能

以上のように、中国語先頭型(D+M+M+N)、指示詞末尾型(M+M+D+N)、指示詞中間型(M+D+M+N)の三つの構造において、三つの構造ともそれ相応の意味とニュアンスを表したいのであれば、指示詞は必須である。その中での指示詞の機能は異なり、それぞれの機能を果たしている。「指示詞先頭型(D+M+M+N)」の指示詞は特定する機能、「指示詞

末尾型(M+M+D+N)」の指示詞は区別する機能、「指示詞中間型」の指示詞は話し手の頭の中の具体像を指しており、「指示詞の虚化」現象の一種である。

しかし、収集した例によれば複数の修飾要素において日本語が指示詞を用いない場合が中国語より 29%ほど多い。現場指示においてなぜ日本語と中国語の指示詞使用率の差が生じたのか。以上から両言語において指示詞の機能差をまとめてみよう。

A　指示詞先頭型(D+M+M+N)における中国語指示詞の特定する機能に対して日本語では指示詞の使用は必須ではない。これは中国語では具体的な所属先があっても所属物は指示詞などで特定化しない限り特定の意味にならないのに対して、日本語では具体的な所属先さえあれば所属物も特定の意味になり、特に指示詞で限定する必要がない。

B　指示詞末尾型(M+M+D+N)における区別する機能に対して、日本語では指示詞の使用は必須ではない。これは中国語では具体的な場面があっても修飾要素での限定があっても、修飾されるもの(主名詞)は指示詞で限定しない限り特定のものになれなく、他のものと区別できない。これに対して、日本語では具体的な場面に置いて修飾要素の修飾で十分に他と区別でき、さらに指示詞で区別する必要がない。

C　指示詞中間型(M+D+M+N)における具体像を指す機能は中国語指示詞の「虚化現象」の一種である。日本語には同じ機能を持っていないわけである[11]。

## 6.7　本章のまとめ

日中両言語では複数の修飾要素における指示詞の働きの重要度と制約があると見られる。本章では指示詞先頭型、指示詞末尾型、指示詞中間型におけるそれぞれ日本語と中国語指示詞の機能について考察、分析した。

考察結果は以下のようになる。

[11] 第 5 章で具体的に論じらている。

① 日本語指示詞も中国語指示詞も、指示詞先頭型(D+M+M+N)、指示詞末尾型(M+M+D+N)、指示詞中間型(M+D+M+N)の三つの構造に用いられるが、その中での指示詞の機能は異なる。

② 中国語指示詞はそれぞれの機能を果たしており、三つの構造ともそれ相応の意味とニュアンスを表したいのであれば、指示詞は必須である。しかしながら、日本語では、三つの構造とも指示詞が必須ではない。この点から見れば、二つの修飾要素の構造において中国語の指示詞はより重要な役割を果たしていると見られる。

③ 指示対象はそれぞれ異なることによって、文に果たしている機能も違う。ただ、三つの構造において指示詞は「特定化する機能」であれ、「区別する機能」であれ、「具体像を指す機能」であれ、いずれも現場指示の用法である。一方、日本語では指示詞「この」「あの」の強調機能は現場指示の用法であるが、「その」の「照応用法」[12]は文脈指示の用法となる。

[12] 「照応用法」については第 7 章では具体的に分析を行う。

# 第７章　照応用法における日中指示詞の対照

本章では照応用法における日本語指示詞「その」に関する中国語指示詞の非対応問題において議論する。

## 7.1　照応

文と文の関連性に基づく文章の連結性、首尾一貫性は結束性[1]と呼ばれる。この結束性を保証する重要な言語手段となりえるものとして照応関係があげられる。照応関係とは、ある言語表現がこれに後続する言語表現と同一の対象を指し示す関係にあることをいう(山梨 1987)。この場合、前者の言語表現は「先行詞」、これに対応する後続の言語表現は「照応詞」と呼ばれる。

（１）a. 横に照りつける日を半分背中に受けて、三四郎は左の森の中へはいった。その森も同じ夕日を半分背中に受けている。（『三四郎』）

b. 三四郎用半个身子承受着夕阳的照射、走进了左边的树林。这座树林也有一半经受着同一个太阳的光芒的考验。（《三四郎》）

（２）a. それから、こういうこともありましたなあ、子供連れの哀れな乞食が村へやってきたので、病気の父親を病院へ送り、その子供の面倒を見たり･･･（『砂の器』）

b. 另外还有这么一件事、有个可怜的乞丐，带着孩子到我们村里讨饭。他把患病的老乞丐送进了医院,还照料那个孩子･･･（《沙器》）

日本語も中国語も（１）（２）は照応関係を持つ文である。（１）「森」“树林”は先行詞、「その森」“这座树林（“这”:「こ」、“座”:「量詞(日本語の助数詞に相当)」)、“树林”:「森」)”は照応詞、（２）「子供」“小孩”は先行詞、「その子供」“那个小孩（“那”:「そ」、“个”:「量詞」、“孩子”:「子供」)”は照応詞である。

[1] 結束性:「ある文がその文だけでは解釈が完結しない要素を内包している時、その文は先行/後続する文（連続）に解釈を依存しており、そのことによってその文連続性は全体でテキストを構成するこの場合、その文連鎖は「結束的」であり、そのテキストには「結束性」が存在する。」(庵　2007)

## 7.2　問題提起

例(１)(２)のように、日本語の指示詞「その」、中国語の指示詞“这”“那”は、ともに前後の文脈に出現する言語表現と同一の対象を指し示す関係にあることを表す照応用法である。(１)の「その森」、“这座树林”はいずれも先行文脈に出てきた「三四郎が入った特定の森」を表す。(２)の「その子供」、“那个孩子”はいずれも先行文脈に出てきた「乞食が連れている特定の子供」を表す。

しかし、(１a)(２a)と異なって次の(３a)(４a)の「その」も照応用法であるが、中国語ではこの場合「指示詞+量詞」の形に訳すことができない。

（３）a. 人間は、昔から犬を友としていた。その犬はいろいろな病気の伝染者でもある。（田中 1981）

b. *人类从很久以前就把狗当成朋友。这只狗也是很多疾病的传播者。

（直訳：人間は昔から犬と友としていた。その一匹の犬はいろいろな病気の伝染者でもある。）

（４）a. よほどの用事がない限り、めったに上京しないが、今日はその年に一回か二回の上京の日に当たっていた。（『夜の声』）

b. *没有十分要紧的事、他决不轻易去东京。今天是那个一年一两度去东京的日子。

（直訳：よほどの用事がない限り、めったに上京しないが、今日はあの年に一回か二回の上京の日に当たった。）

日本語の(3a)の意味を中国語で表す場合、量詞を「犬」に対して通常用いる“只(匹)”ではなく広く事物一般を指す“个”に変え、かつ“被人类当成朋友的”（人間が昔から友としていた)ということを明示的に述べなければならない。

（５）　人类从很久以前就把狗当成朋友。这个被人类当成朋友的狗却也是很多疾病的传播者。

（人間は昔から犬を友としていた。この昔から人間の友とされた犬はいろいろな病気の伝染者でもある。）

また、(４a)を中国語に訳す場合は指示詞を用いずに訳す。

（６） 没有十分要紧的事、他决不轻易去东京。今天恰好是一年一两度去东京的日子。
（よほどの用事がない限り、めったに上京しないが、今日はちょうど年に一回か二回の上京する日に当たっていた。）

本章で言及する照応関係にある現象は文脈指示に関わる照応の一種であるとされる。以上の定義を踏まえ、照応用法に見られるこのような相違について考察する。

## 7.3 「その」の照応用法

### 7.3.1 「外延レベルの照応」と「内包レベルの照応」[2]

日本語の照応用法の「その」は、照応の仕方によって「外延レベルの照応」と「内包レベルの照応」に分類できる。

Ⅰ 外延レベルの照応(「その」による先行詞との照応が必須ではない)

Ⅱ 内包レベルの照応[3](「その」による先行詞との照応がほとんど必須)

a 持ち込み

b 言い換え[4]

---

[2] 本章では「その」が必須ではない「外延レベルでの照応」と必須である「内包レベルでの照応」のいずれの場合も「持ち込み」はあると考えている。これは長田(1974)で言う「持ち込み」の意味と同じである。ただし、本稿で使っている「持ち込み」という語は「内包レベルでの照応」の中の一つとして分類されているものである。

[3] 指示の内容は直接先行文脈で提示されているかどうかによって内包レベルの照応は「持ち込み」と「言い換え」に分かれている。直接に提示された場合は「言い換え」であり、提示されていない場合は「持ち込み」である。

[4] この論文では、「その」の指示対象は先行詞の言い換えの場合を「言い換えの『その』」と呼んでいるが、庵(2007)では「その」には「言い換え」の用法はないとしている。実際、本章で「言い換え」とされているものは庵(2007)の「言い換え」の定義とは異なる。
庵(2007)の言い換え：先行詞をその上位概念で言い換えた「上位型の言い換え」と先行詞をその属性で言い換えた「内包型の言い換え」である。
(1) エリザベス・テーラーがまた結婚した。*その女優が結婚するのはこれで七回目だそうだ。
(庵 2007)
(2) 自分が苦しい時は相手も苦しいものだ。この辺からプロでも二転三転することはよくある。が、羽 生が勝つとだれもが思っていた。時代が、*その 21 歳の天才を呼んでいるようだ。
(庵 2007)

両者の違いについて以下では具体的に説明する。

（７）　私は犬を飼っていた。しかし、{その/φ}犬は去年死んだ。
（８）　公園で男の人が倒れていた。{その/φ}男の人は頭から血を流していた。

（９）　痩せたいと思っている男が医者に相談した。その太った男は医者に痩せることを誓った。
(10)　ビタミンは体にいいものである。しかし、そのビタミンを食べ過ぎて死んでしまったケースもある。

（７）－(10)の「その」は、いずれも先行文脈を受けて用いられている照応用法の「その」である。しかし、（７）（８）と（９）(10)を比べると、前者は「その」の使用が必須ではないのに対し、後者では「その」の使用が必須である。「その」の使用が必須ではない（７）（８）の場合、「その」は「ここで言う（犬）（男の人）」は先行文脈で出てきた「（犬）（男の人）」である」ということを明示するだけである。「犬（男の人）」が先行文脈で出てきた「犬（男の人）」と同一物であることは、「その」がなくても文脈からわかるため、「その」の使用は必須ではない。このような「その」の照応用法を、ここでは「外延レベルの照応」を呼ぶ。

一方、「その」の使用が必須である（９）(10)では、「その」は先行文脈で出てきた「男」「ビタミン」を「痩せたいと思っている」「体にいい」という属性と合わせて指している。「その」の使用が必須なのも、これらの文では「痩せたいと思っている」、「体にいい」という属性が文脈上重要な意味を持つからである。このような「その」の照応用法を、（９）(10)のような「外延レベルの照応」と区別して「内包レベルの照応」と呼ぶ。

機能の面から言えば、「外延レベルでの照応」の「その」は「限定的用法」であり、名詞が表す事物の中から一つの個体を限定するのに使われる。また、「内包レベルの照応」の「その」は「非限定的用法」であり、指示対象に対して補足説明を加えるために使われる。(11)(12)のように指示対象が普通名詞の場合は、「外延レベルでの照応」「内包レベルの照応」の両方が可能だが、(13)(14)のように指示対象が固有名詞の場合は、指示対象が唯一物なので、「内包レベルの照応」しか成立しない。

(11)　去年犬を拾った。その犬はかわいい。

(12)　人間は、昔から犬を友としていた。その(＝昔から人間の友であった)犬はいろいろな病気の伝染者でもある。

(13)　*健は私の友人だ。その健は急病になった[5]。

(14)　健は病気知らずが自慢だった。その(＝病気知らずが自慢だった)健が急病であっけなく亡くなった。　　(庵　2007、括弧内は筆者追加)

**表(1)　「外延レベルでの『その』」「内包レベルでの『その』」の機能差**

| 指示詞 | 固有名詞 | 普通名詞 |
|---|---|---|
| ・外延レベル(限定) | ~~その健(13)~~ | その犬(11) |
| ・内包レベル(非限定) | その健(14) | その犬(12) |

### 7.3.2　「持ち込み」と「言い換え」

「内包レベルでの照応」の「その」は、照応の仕方に基づき、「持ち込みの『その』」と「言い換えの『その』」に分かれる。

まず、「持ち込みの『その』」について述べる。

(15)　人間は、昔から犬を友としていた。その犬はいろいろな病気の伝染者でもある。
(=(３a))

(16)　健は病気知らずが自慢だった。その健が急病であっけなく亡くなった。
(庵　2007)

(15)、(16)の「その」は先行文脈に出てくる「人間が昔から友としていた」「病気知らずが自慢だった」という内容を指している。長田(1974)は、指示詞が先行文脈の内容を指す形で名詞を限定する機能を「持ち込み」の機能と呼び、このような「その」を「持ち込み詞」と呼んでいる。長田(1974)が挙げる(17)でも、「元文元年の秋、出

[5] 先行文脈からの持ち込みが足りないから非文となる。

羽の国秋田から米を積んで出帆した」という先行文脈の内容が「その」で持ち込まれている。

(17)　元文元年の秋、新七の船は、出羽の国秋田から米を積んで出帆した。その船が不幸にも航海中に風波の難にあって、半難破船の姿になって、積荷の半分を流失した。　　森鴎外・最後の一句・新潮文庫　(長田　1974)

一方、田中(1981)は「持ち込みの『その』」による指示関係を唯一指示（内包レベルで特定的・唯一的）であるとする。(15)の「その犬」も総称指示的である場合には、「その[犬という種]」というように、内包レベルでは特定的とされる。

庵(2007)は、「持ち込みの『その』」を、定情報名詞句に先行文脈からのテキスト的意味を付与するという観点から捉えている。「その」の使用についてテキスト内で名詞句が繰り返されると定情報名詞句はその文脈内で限定される。この限定を「テキスト的意味」と呼び、限定を受けた名詞句には文脈からのテキスト的意味の付与があると述べている。(16)の「健」は特定の人であり、さらに指示詞をつけて限定する必要はないが、「その」をつけることによって、先行文脈のテキスト的意味が付与され、「病気知らずが自慢だった健」という属性を持つ健に限定される。

「持ち込みの『その』」は、例(15)(16)のように先行文脈と対比的な内容を述べるために用いられる場合もあれば、先行文脈の内容にさらに情報を追加する場合に用いられる場合（例(18)）もある。

(18)　人間は、昔から犬を友としていた。その犬は今でも人間を助けることが多い。

次に、「言い換えの『その』」について述べる。

(19)　よほどの用事がない限り、めったに上京しないが、今日はその年に一回か二回の上京の日に当たっていた。　　(=(４a))

例(19)の「その」は、「めったに上京しない」→「用事があればたまには上京する」という言い換えによって得られた内容を指している。このような指示の仕方を「言い

換え」と呼ぶ。指示内容が直接先行文脈で提示されていない点が「持ち込み」とは異なる。「その」が指す内容と後に続く内容が実質的に同じことを指している場合は、「ちょうど」という含みが生ずる。

(20)　よほどの用事がない限り、めったに上京しないが(用事があればたまには上京する)、今日は(ちょうど)その(＝用事があればたまには上京する)年に一回か二回の上京の　日に当たっていた。

この場合、「その」で示される「用事があれば、たまには上京する」とそれに続く「たまに年に一回か二回上京する」は先行文脈「よほどの用事のない限り、めったに上京しない」と「たまに年に一回か二回上京する日」は、「用事があれば、たまには上京する」という言い換えによって結び付けられている。

以上のことをふまえて、次節では第7.2節で述べた日中指示詞の照応用法に見られる相違について考察する。

## 7.4　中国語指示詞の照応用法

### 7.4.1　量詞および「持ち込み」「言い換え」の問題

まず、次の現象について考える。

(21) a.　人間は、昔から犬を友としていた。その犬はいろいろな病気の伝染者でもある。

b.　*人类从很久以前就把狗当成朋友。这只狗也是很多疾病的传播者。

(直訳：人間は、昔から犬を友としていた。その一匹の犬はいろいろな病気の伝染者でもある。)

(=(３))

(22)　人类从很久以前就把狗当成朋友。这个被人类当成朋友的狗却也是很多疾病的传播者。

(人間は、昔から犬を友としていた。この昔から人間の友とされた犬はいろいろな病気の伝染者でもある。)

第1節で述べたように、(21a)を中国語に訳す場合は、(22)のように、量詞を「犬」に対して通常用いる“只（匹)”ではなく広く事物一般を指す“个”に変え、かつ“被人类当成朋友的(人間が昔から友としていた)”のように、先行文脈の内容を明示的に述べなければならない。さらに、日本語では「その」の前後文の対比の属性によって現れる「まさか、ありえない」という「意外性」も、中国語では副詞“却・但(しかし)”、“竟然(たった)”などを使って言語化する必要がある。

まず、量詞の問題について述べる。犬に対して通常用いる量詞は“只（匹）”である。“这只狗”が表すのも「この一匹の犬」という意味である。しかし、(21a)の「その犬」は第1文の「犬」と同じく「犬という物」、すなわち「犬一般」を指しており、個体としての犬を指すわけではない。そのため、“这只狗（この一匹の犬）“を用いて訳した(21b)は不自然になり、広く事物一般を指す“个”に変えて、「犬という動物」を指すという形にする必要がある。

次に、先行文脈の内容を明示的に述べなければならないことについて述べる。これはすなわち、中国語の指示詞は「持ち込み」の機能を持たないということである。次の例においても、先行文脈と具体的な照応関係を持たせるためには、“这个曾被纳粹德意志军队进攻的(波兰)（ナチス・ドイツ軍に侵攻された(ポーランド))”ということを明示する必要がある。単に“这个波兰(このポーランド)”と述べただけの場合は、それ以外の属性（例えば、裕福であり、民主であり、…)も含めた「ポーランドという国」全般を指す。

(23) a. ことしは歴史や時代を考えさせる出来事が特に多い。日本では「昭和」が終わった。今月1日はナチス・ドイツ軍のポーランド侵攻で第2次世界大戦が始まって50周年だった。その ポーランドで、いま、民主化が進みつつある。回顧の感慨はひときわ大きい。コール西独首相の記念演説の言葉が印象的だった。 (天声人語 1989.9.3)

b. 今年有许多事件让我们对于历史和时代进行反思。在日本、“昭和时代”结束了。在欧洲、本月一日则是纳粹德意志的军队进攻波兰从而导致二战爆发的五十周年。而正是在这个 曾被纳粹德意志军队进攻的波兰、现在民主化的热潮汹涌澎湃。回顾五十年使人感叹万分。戈尔西德首相的纪念演说给我们留下极深的印象。

c. 今年有许多事件让我们对于历史和时代进行反思。在日本、昭和时代结束了。在欧洲、本月一日则是纳粹德意志的军队进攻波兰从而导致二战爆发的五十周年。而正是在这个波兰、现在民主化的热潮汹涌澎湃。回顾五十年使人感叹万分。戈尔西德首相的纪念演说给我们留下极深的印象。 (庵・張 2007)

中国語の指示詞は「持ち込み」機能だけでなく、「言い換え」機能も持たない。(24)の「その」は「言い換え」の例であるが、先に述べたように、これを中国語に訳す場合は、指示詞を用いずに副詞“恰好(ちょうど)”で前後文をつなげる必要がある。

(24) a. よほどの用事がない限り、めったに上京しないが、今日はその年に一回か二回の上京の日に当たっていた。

b. *没有十分要紧的事、他决不轻易去东京。今天是那个一年一两度去东京的日子。

(直訳：よほどの用事がない限り、めったに上京しないが、今日はあの年に一回か二回の上京の日に当たった。)

(=(4))

(25) 没有十分要紧的事、他决不轻易去东京。今天恰好是一年一两度去东京的日子。

(よほどの用事がない限り、めったに上京しないが、今日はちょうど年に一回か二回の上京する日に当たっていた。) (=(6))

### 7.4.2 量詞なしの指示詞使用

中国語の指示詞の用法の中には、一見「持ち込み」あるいは「言い換え」に近い機能を有するものがある。それは、次のように量詞なしで指示詞を使用する場合である。

(26) 没有十分要紧的事、他决不轻易去东京。今天恰好是那［一年一两度去东京的日子］。

(よほどの用事がない限り、めったに上京しないが、今日はちょうど年に一回か二回の上京する日に当たっていた。)

(27) 下雨时、我睡在树下、我身体露出的部分爬满了被水冲来的山蛭。我也吃了那［吸我的血、扁平的、草绿色的、可爱的小东西］。

（雨が降り、木の下に寝る私の体の露出した部分は、水に流されて来た山蛭によって蔽われた。その私自身の血を吸った、頭の平たい、草色の可愛い奴を、私は食べてやった。）

これらは、“那座山——那山[6]（あの山）”、“那个［阳光明媚的］日子——那［阳光明媚的］日子（あの日差し明媚な日）”のように量詞が省略されたものではない。実際、「指示詞+量詞」で形になると不自然である。

(28)　*没有十分要紧的事、他决不轻易去东京。今天恰好是那个［一年一两度去东京的日子］。

(29)　?下雨时、我睡在树下、我身体露出的部分爬满了被水冲来的山蛭。我也吃了那些[7]吸我的血、扁平的、草绿色的、可爱的小东西。

「指示詞+量詞」の形を用いるには、次のように先行文脈の語句、あるいは旧情報である部分語句が指示対象となっていなければならない。

(30)　一年一两度会去东京购物。今天恰好是那个一年一两度去东京的日子。
（年に一回か二回買い物に上京するが、今日はちょうど年に一回か二回の上京する日に当たっていた。）

(31)　下雨时、我睡在树下、我身体露出的部分爬满了被水冲来的山蛭。我也吃了那些身体露出的部分爬满的小东西。
（雨が降り、木の下に寝る私の体の露出した部分は、水に流されて来た山蛭によって蔽われた。その体の露出した部分の奴を、私は食べてやった。）

量詞を用いない(30)(31)のような指示詞の用法は、方梅(2002)の言う「話題標記」の用法に類似している。「話題標記」の指示詞は初めて文に現れた名詞あるいは短文を

[6] 中国語の指示詞は、「指示詞＋量詞＋名詞句」という形で用いられる場合と、“那山（あの山）“のように「指示詞＋名詞句」という形で用いられる場合がある。量詞があるかどうかによって文の意味が変わる場合もあるが、この論文ではその違いは問題としない。
[7] “些”：〈量〉複数を指す場合に用いる。“这些人（これらの人）”“这些动物（これらの動物）”

指す。一般に固有名詞と定性の高い名詞以外の新情報に指示詞をつけることはできないが、新情報に指示詞を付けることによって既知情報や固有名詞に近いものとして扱い、新情報を既知の情報に、また“不定”の成分を“定”に転換することができる。

(32)　康六：宫里当差的人家谁要个乡下丫头？

（行宮で勤めている方は田舎出身の女を妻にするわけないでしょう。）

刘麻子：这不你女儿命好吗？（だから、お嬢様の運がいいって！）

康六：谁呀？（相手は誰?）

刘麻子：大太监、庞总管！你也听说过庞总管吧？伺候着太后、红的不得了哇！人家家里头、打醋的瓶子都是玛瑙的！

（龐大総管太監！聞いたことがあるでしょう?皇太后様に仕えていて、えこ贔屓されているよ。家のお酢入れのビンさえでも瑪瑙素材なのだよ！）

康六：这[要孩子给太监做老婆]、我怎么对得起女儿啊？

（子供を宦官の妻にさせるなんて、申し訳が立たないだろう。）

（方　2002）

方(2002)の説明によれば、(32)の前文では、「一人の女の子を宦官の奥さんにすること」が言及されているが、“要孩子给太监做老婆(子供を宦官の妻にさせるなんて)”という短文は前文に現れていない新情報であるため、文頭に「話題標記」の“这”を付して、旧情報に転換させることによって前後文との一貫性を保っている。

(30)(31)の場合も、“一年一两度去东京的日子(年に一回か二回の上京する日)”、“吸我的血、扁平的、草绿色的、可爱的小东西(私自身の血を吸った、頭の平たい、草色の可愛い奴)”は前文では言及されていない新情報であるが、指示詞“那”をつけて旧情報であるかのように述べることにより、副詞“恰好(ちょうど)”とあわせて前後文の緊密性がより保たれると考えられる。

(33)　一年一两度会去东京购物。今天恰好是那个一年一两度去东京的日子。

（年に一回か二回買い物に上京するが、今日はちょうど年に一回か二回の上京する日に当たっていた。）　(=(30)

(34)　下雨时、我睡在树下、我身体露出的部分爬满了被水冲来的山蛭。我也吃了那些身体露出的部分爬满的小东西。

（雨が降り、木の下に寝る私の体の露出した部分は、水に流されて来た山蛭によって蔽われた。その体の露出した部分の奴を、私は食べてやった。）　　(=(31)

これは、「指示詞が本来の物指しの機能が弱まり、文章の中で新たな機能を持つ」に至った「ひ弱な指示詞」[8]の一種であり、日本語の「持ち込み」および「言い換え」の「その」が果たしている機能とは違う。

## 7.5　本章のまとめ

本稿では、日中指示詞の照応用法に見られる相違について考察した。「その」の照応用法には「外延レベルでの照応」と「内包レベルでの照応（持ち込み、言い換え）」があるが、中国語の指示詞は「内包レベルでの照応」の用法を持たない。

まとめると次のようになる。

---

[8] 张・方(2001)《汉语功能语法研究》では、「語彙意味の弱まりはわれわれ本来言っている「虚化(弱まり)」、同時にその語彙に新たな文法範疇と文法成分が生じる。これを「文法化」とも言う。指示詞“这/ 那”から「ひ弱な指示詞“这/ 那”」にはこのような「文法化」がある。そのうち、指示詞は機能語であり、文章の比較的具体的な意義を持った名詞・動詞・形容詞などと違って指示対象は文章の中でしか確認できない。また、指示詞は典型的な介詞・接続詞・語気詞などうわべだけで実のない言葉とも異なる。したがって、指示詞は比較的具体的な意義とうわべだけで実のない言葉の間に介して、最も変化しやすい」と述べている。

例えば、指示詞は本来ダイクシス性を持つが、(1)(2)の指示詞“这”“那”は特に具体的な指示対象を何も指していない。

(1)　我这舞跳得也够灰心的。(张・方 2001)
（私の気持ちがこのダンスをする事に挫けた。）
説明：この文は、長い間ダンスを練習していたが、なかなかうまくできなくて、話し手がダンスに落胆しているというニュアンスを表している。

(2)　你那孙子装的也够可怜的。(张・方 2001)
（お前は十分に哀れそうにとぼけているね。）
説明：この文は、相手のとぼけていることをわざわざと可哀そうだと言いながら、実はさげすんでいるニュアンスを表している。

このような本来のダイクシスを失ってしまった指示詞は「ひ弱な指示詞」となる。

表(2)　照応用法の「その」と中国語指示詞の機能差

<table>
<tr><th colspan="2">日本語指示詞「その」の機能</th><th colspan="2">中国語指示詞の機能</th></tr>
<tr><td colspan="2">外延レベルでの照応</td><td colspan="2">あり</td></tr>
<tr><td rowspan="2">内包レベルでの照応</td><td>持ち込み</td><td>なし</td><td>・類型を表す指示詞を使用する。<br>・持ち込まれた内容を明示する。</td></tr>
<tr><td>言い換え</td><td>なし</td><td>・指示詞不使用。<br>・話題表記の指示詞を使用する。</td></tr>
</table>

このように、同じく指示詞と呼ばれるものでも照応用法おいては日本語と中国語とでは機能差が見られる。このことは、日本語教育において日本語教師もしくは中国語母語学習者の注意すべきところである。

# 終章

## 1　この論文の視点

指示詞の最も本来的な意味を言えば、やはり deictic のそれに帰されるだろう。聞き手が指示対象を見つけ出せるよう deictic な「場」の中の特定の場所に注意を向けるべく導くあるいは誘うことと特徴づけられている。言い換えれば、客体を話し手との関係において場面の中に相対的に位置づけることである。指示詞はこのような物を指す言葉として指示機能を持つことは当然であるが、それ以外にも様々な機能を持つ。

Anderson and Keenan(1985)では言語の指示系統を distance-oriented system(距離指向型)と person-oriented system(人称指向型)の二種類に分かれている。中国語のような二分類は話し手の唯一の指示参照物としての指示系統、一般的であるが、日本語のような三分類は普通聞き手の要素と関わっている。二分類の中国語と三分類の日本語の指示詞の指示範囲、用法が異なるに間違いない。これによって指示詞がその言語の中でのレベルが違うと考えられる。異なるレベルの指示詞は各自言語の中での役割が当然に違う。

先行研究から見れば、日本語指示詞の研究は対立関係からの研究であれ、話し手と聞き手が持つ情報という観点からの研究であれ、「談話管理」観点であれ、研究の中心は指示詞「コ・ソ・ア」三者の使い分けに重点が置かれている。また、中国語指示詞の研究は主にその機能と構造を中心として研究していると日本語と異なる方向に進んでいることが見受けられる。従って、各自言語で異なる領域での研究の限界を突破し、日中対照研究によって両言語指示詞の相違点を探ることが必要とされる。しかし、今までの日中指示詞の対照研究では距離的・物理的の「遠近」から心理的・空間的などにおいて話し手が「近い」と認識し、あるいは「遠い」と認識するという「遠近」認識であり、着目点はやはり日中指示詞のズレとその使い分けに重点が置かれている。日本語指示詞と中国語指示詞の非対応現象が指摘されたが、その理由について深く探求する研究があまりない。

この論文では今まで日本語指示詞と中国語指示詞の研究成果を踏まえて、従来の指示詞に関する主に遠近の認識と使い分けとの関係などの先行研究と異なる視点――「そもそも指示詞を使うか使わないか」に焦点を当て、日中指示詞の「対応―非対応」

という視点から、文における指示詞の働きを中心に、現場指示と文脈指示における日本語と中国語指示詞を対照してお互いのそれぞれの特徴から機能を考察した。

## 2　先行研究との理論づけ

この論文は大きく現場指示詞と文脈指示に分けて議論した。収集したデータ(付録:データ資料)によって現場指示を三つの側面に、文脈指示は一つの側面からまとめている。

現場指示において、主に中国語指示詞の使用に対して、日本語指示詞の非対応問題に中心に置いて議論した。日本語と比べると、中国語指示詞は現場指示において不可欠の役割を果たしている。その理由を巡って、異なる構造における中国語指示詞の具体的な機能をそれぞれ分析した。これは、表(1)で示したように第4章、第5章、第6章での中国語指示詞に対する分析であった。結果的には三つの側面において指示詞が果たしている機能を明らかにした。

表(1)　構造及び指示詞の働き

| | 構造 | 中国語指示詞機能 |
|---|---|---|
| 第4章 | 「N1+“这”/“那”+N2」 | 話し手の頭の中の具体像を指す。 |
| 第5章 | 「“这么”/“那么”+QN」 | ①強調機能<br>②概数機能 |
| 第6章 | 「“这”/“那”+修飾要素+修飾要素+主名詞」 | 特定化する機能 |
| | 「修飾要素+“这”/“那”+修飾要素+主名詞 | 話し手の頭の中の具体像を指す。 |
| | 「修飾要素+修飾要素+“这”/“那”+主名詞」 | 区別する機能 |

日本語と中国語の指示詞の機能を比較すると、中国語指示詞の使用に対して、日本語指示詞はその機能を持っていない、またはその機能を持っているが必須ではない。

表(2)　日中指示詞機能の対応

| 中国語構造 | 中国語指示詞機能 | 日本語指示詞の機能 |
|---|---|---|
| 「N1+“这”/“那”+N2」 | 頭の中の具体像を指す。 | 持っていない。 |
| 「“这么”/“那么”+QN」 | ①強調機能<br>②概数機能 | 持っていない。 |
| 「“这”/“那”+修飾要素+修飾要素+主名詞」 | 特定化する機能 | 必須ではない。 |
| 「修飾要素+“这”/“那”+修飾要素+主名詞」 | 頭の中の具体像を指す。 | 持っていない。 |
| 「修飾要素+修飾要素+“这”/“那”+主名詞」 | 区別する機能 | 必須ではない。 |

なぜ中国語において指示詞の使用が必須となっているのか、その機能の由来はどこからなのか。この部分は近年中国語指示詞の先行研究の重点における内容と繋がる。先行研究の中では指示詞の本来の機能が失われている「指示詞の虚化現象」が指摘されている。これを踏まえて、中国語指示詞機能に対して日本語指示詞が持っていない部分は「指示詞の虚化現象」で生み出された指示詞の一種ではないかと考えた。このような「指示詞の虚化現象」は日本語では現れていないものである。

また、中国語指示詞は必須であるが、日本語指示詞は必須ではない部分について、両言語の「場面の特定」と「事物の特定」への要求の違う面を説明した。中国語では具体的な場面があってもその中の事物は指示詞などで特定化しない限り特定の意味にならないのに対して、日本語では具体的な所属先さえあれば所属物も特定の意味になり、特に指示詞で限定する必要がない。

表(3)　日中指示詞機能の対照

| 中国語構造 | 中国語指示詞 | 日本語指示詞 |
|---|---|---|
| 「N1+“这”/“那”+N2」 | 指示詞の虚化現象 | なし |
| 「“这么”/“那么”+QN」 | 指示詞の虚化現象 | なし |
| 「“这”/“那”+修飾要素+修飾要素+主名詞」 | 各事物までの限定が必要 | 具体的な場面であれば、必要ではない。 |
| 「修飾要素+“这”/“那”+修飾要素+主名詞」 | 指示詞の虚化現象 | なし |
| 「修飾要素+修飾要素+“这”/“那”+主名詞」 | 各事物までの限定が必要 | 具体的な場面であれば、必要ではない。 |

また、文脈指示において、日本語指示詞の先行研究の成果に基づいて議論したものである。日本語指示詞「その」の「持ち込み」機能について長田(1974)、庵(2007)ですでに指摘している。その上で、中国語では指示詞での非対応現象を取り上げて考察した。「その」の「持ち込み」をさらに「持ち込み」と「言い換え」に分け、中国語指示詞と比較した。日本語の指示詞「その」の「持ち込み」機能に対して中国語指示詞は持っていないという結論が得られた。

日本語指示詞の先行研究と中国語指示詞の先行研究の重心が異なるが、この論文では、両者の成果を有効に活用し、新たな結論に結び付けられた。この論文の理論的な基盤であった。

## 3　各章の内容

### 3.1　現場指示

現場指示では基本的には対話・講演など話し手と聞き手が同一の空間を共有する場面において多くの場合、身振り・手振り・表情などを伴う指示である。この論文では現場指示における中国語では指示詞の使用が必須となる三つの側面を取り上げ、日本語と対照し、その由来を考察した。表(4)で示したように、日本語では、使用しないか

必須ではないかという結論となっている。

表(4)　現場指示における指示詞がさす事柄と日中指示詞の働き

| 構造 | 中国語指示詞 | 関係 | 日本語指示詞 |
|---|---|---|---|
| 「N1+指示詞 N2」（第 4 章） | 文脈に現れていないが、話し手の頭の中(記憶)に存在している具体像を指す。（必須） | 非対応 ⇔ | 用いることが出来ない |
| 「指示詞 QP」（第 5 章） | 強調機能（必須） | 非対応 ⇔ | 用いることが出来ない |
| | 概数機能（必須） | | 用いることが出来ない |
| 複数の修飾要素を含む名詞句（第 6 章） | 位置によって強調する部分が変わってくる。（必須） | 非対応 ⇔ | 位置によって修飾する対象の違いがなし（必須ではない） |

第4章では、中国語「N1+指示詞+N2」構造において指示詞に先行する名詞表現N1と、それに後続する名詞表現N2の指している事物が同一事物か否かによって分けられた「同格構造」と「所属構造」の意味と指示詞の役割を具体的に分析した。両構造とも話し手は「ある事物」の具体的な出来事(具体像)を指しながら、それに強い感情を表す構造である。両構造の指示詞は指示の力が弱くなっており、「指示詞の虚化(助指)」現象の一種となる。また、中国語「N1+指示詞+N2」の両構造に対して日本語は「N1+という+N2」「N1+の+N2」形式と対応している。いずれも指示詞が現れていないことから、日本語の指示詞は中国語「N1+指示詞+N2」構造における指示詞の用法を持っていないわけである。

第5章では、中国語の「指示詞+QN」構造において指示詞指示詞の機能を明らかにし、日本語指示詞との非対応問題について考察する。中国語では、同じ「指示詞+数量詞+名詞」構造においても指示詞は二種類の異なる用法を持っている。一つは数量の程度

を強調する「強調の指示詞」であり、もう一つは「数量を程度化する」機能を果たす「概数の指示詞」である。「概数の指示詞」は「強調の指示詞」の機能が虚化され、指示詞の機能が失われ、派生されたものである。また、日本語においては「強調の指示詞」と「概数の指示詞」に対して、いずれも指示詞での対応ができない。「強調の指示詞」の機能に対して副詞などで対応し、「概数の指示詞」の機能に対して、概数表現「ぐらい」「ほど」が担っている。

第 6 章では、二つの修飾要素と指示詞を含む名詞句は、修飾要素と指示詞の位置により、[指示詞先頭型][指示詞末尾型][指示詞中間型]の三種類がある。日本語指示詞も中国語指示詞も、指示詞先頭型(D+M+M+N)、指示詞末尾型(M+M+D+N)、指示詞中間型(M+D+M+N)の三つの構造に用いられるが、その中での指示詞の機能は異なる。中国語では三つの構造において指示詞は「特定化する機能」であれ、「区別する機能」であれ、「具体像を指す機能」であれ、いずれも現場指示の用法である。三つの構造ともそれ相応の意味とニュアンスを表したいのであれば、指示詞は必須である。一方、日本語では指示詞の強調機能は現場指示の用法であるが、「その」の「照応用法」は文脈指示の用法となる。

以上のように、現場指示において物を指す言葉として指示機能以外に日中指示詞はさまざまな機能を持ち、この論文で挙げられているような非対応の場合もある。比較した結論から見れば、現場指示において中国語指示詞の諸機能に対して、日本語指示詞は持っていない傾向がある。

### 3.2　文脈指示

文脈指示とは現場ではなく、会話や文中に先出した人・物・事物などに言及する際に用いられる場合である。文脈指示において本文では主に照応用法について考察した。日本語の照応用法の「その」は、照応の仕方によって「外延レベルの照応」と「内包レベルの照応」に分類できる。第7章では具体的に「内包レベルの照応『その』」は中国語との対照は議論した。

結果は表(5)のようになる。

表(5)　文脈指示における指示詞がさす事柄と日中指示詞の働き

<table>
<tr><th>照応用法の「その」</th><th>日本語指示詞</th><th>関係</th><th>中国語指示詞</th></tr>
<tr><td rowspan="2">内包レベルの照応<br><br>（第 7 章）</td><td>持ち込み機能<br>（必須）</td><td rowspan="2">非対応<br>⇔</td><td>用いることが出来ない</td></tr>
<tr><td>言い換え機能<br>（必須）</td><td>用いることが出来ない</td></tr>
</table>

第7章では、日本語では「内包レベルでの照応」の「その」は照応の仕方に基づき、「持ち込みの『その』」と「言い換えの『その』」とに分かれる。この分類をふまえて、中国語指示詞照応用法との相違を分析し、日本語の「その」に対して、中国語では「内包レベルでの照応」の用法を持たないという結論が得られる。類型を表す指示詞を使用するか、先行文脈から持ちこまれた内容を第2文脈で明示するかになる。

日中指示詞は一見類似しているように見えるが、そもそも各自の言語の中では異なる役割を果たしている。この論文の考察結果からみれば、両言語の中で中国語指示詞は現場指示の分野の働きに偏り、一方、日本語指示詞は主に文脈指示のほうに働いていると言えよう。

## 4　残された課題

第 7 章では日本語「内包レベルでの『その』」と中国語の対照を具体的に考察したが、「外延レベルでの『その』」と中国語“这+量詞+名詞”“那+量詞+名詞”の対照に言及していない。日本語「「外延レベルでの『その』」と中国語の対応状況によって、三つのパターンに分けられる。

Ⅰ　日本語の指示詞が必須ではないが、中国語の指示詞が必須である場合

（1）a. わたしは犬を飼っていた。{その/φ}犬は突然死んだ。

b. 我养过一只狗。{那只/*φ}狗突然死了。

Ⅱ　日本語も中国語も指示詞が必須である場合

（２）a. 本屋で本を読んでた。その後、{その/*φ}本を買った。

b. 在书店看了一本书。之后，买下了{那本/*φ}书。

Ⅲ　日本語も中国語も指示詞が必須ではない場合

（３）a. 昨日先生から借りた本を読み終わった。

{その/φ}本は難しくて、理解できないところがたくさんある。

b. 昨天从老师那儿借的书看完了。

{那个/φ}书太难了，有很多不懂的地方。

（１）（２）（３）はともに言語表現が前後の文脈に出現する言語表現と同一の対象を指し示す関係にあることを表す照応用法である。例（１a）の第２文の照応詞「犬」は第１文の「犬」と照応し、指示詞「その」が必須とされていない。指示詞をつけても付けなくても第１文の「飼っていた一匹の犬」という意味になる正文であり、文の意味も変わらない。しかし、中国語の“狗”に訳すと例（１b）のように不自然な文になる。第２文の中国語の“狗”は、その前に指示詞をつけなければ「犬という動物」すなわち「犬一般」になる。また、（２）のように日本語も中国語も第２文の指示詞の不使用で非文となるパターンもある。両方とも指示詞を付けないと、非文となる。逆に、（３）のように日本語文も中国語文も自然な文であり、日本語の指示詞「その」、中国語の指示詞“那本”はいずれも指示詞の使用は必須とされていない。

以上のように（１）において日本語文では指示詞が用いられなくても特に問題に対して中国語文では指示詞では“那只”が必須であり、（２）において日本語も中国語も指示詞の使用が必須となり、（３）において日本語も中国語も指示詞が用いられなくても特に問題はない、と三種類の日中対応パターンが見られる。今後はこのような相違について「先行詞の定性」「文脈による付与された特定性」「主格」などの面を中心に比較対照し考察したい。

また、中国語の中で最も一般的で典型的な指示詞は“这”“那”系指示詞である。中国の最大規模の漢字統計頻度表によれば、“这”は第10位、“那”は第118位にラン

クインしている(徐丹1988)[1] 。この論文の考察結果によって、中国語指示詞は日本語指示詞と比べ、特に現場指示において当言語の中では日本語指示詞の持っていない機能を果たしており、より多くの役割を果たしていると見られる[2]。今後はこの推測が検証できるように、さらに多くの「対応―非対応」という視点に焦点を当て、日中指示詞を対照、分析する。

そして、その結論の上で、日本語の指示詞(接続詞は除外)は日本語の中での位置づけを考察する。最終的に、日本語教育現場に貢献できるような成果を作りたいと思っている。

[1] 原文:“我国最大规模的汉字统计频度表明:“这”位于第 10 个常用字，出现次数为 138，426;“那”位于 182 位，出现次数为 28，882。

[2] 本文の結論に限る推測である。日本語指示詞の使用率も高いが、この論文で明らかにした中国語が持っている現場指示の諸機能に関して、日本語が持っていない、または必須とされていない。

# 引用文献

（日本語文献）

庵　功雄(1997)「「は」と「が」の選択に関わる一要因」『国語学』188 国語学会

庵　功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』 くろしお出版

庵　功雄・張　麟声(2007)「日本語と中国語の「冠詞」についての覚書」『一橋大学留学生センター紀要』10　一橋大学留学生センター

井上　優(1993)「日本語の「ぼかし表現」をめぐって　―文法論からのアプローチ―」『日语学研究(3)』（北京日本学研究中心）今日中国出版社

岡村和江(1972)「代名詞と何か」『品詞別日本文法講座』2 明治書院

加藤晴子(2008)「中日対訳コーパスにみる「こ、そ、あ」と“这”、“那”の非対応」『応用言語学研究』10 金沢大学人間社会環境研究科

金水　敏・木村英樹・田窪行則 (1989)「日本語文法セルフ・マスター・シリーズ4」『指示詞』 くろしお出版

金水　敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『日本認知科学の発展』3 （認知科学会） 講談社

金水　敏(1991)「CalsonのOntologyと日本語」『KANSAL　LINGUISTLC　SOCLETY』11 KANSAI LINGUISTIC SOCIETY

金水　敏・田窪行則(1992)『日本語研究資料集　指示詞』 くろしお出版

神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』 大修館

木村英樹(1983b)「指示と方位―「他那本書」の構造と意味をめぐって―」『中国語学・文学論集』 東方書店

木村英樹(1992)「中国語指示詞の「遠近」対立について－「コソア」との対照を兼ねて」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』 くろしお出版

久野　暲(1973)『日本文法研究』 大修館書店

黒田成幸(1979)「(コ)・ソ・アについて」『英語と日本語と』 くろしお出版

阪田雪子(1971)「指示語「コ・ソ・ア」の機能について」『東京外国語大学論集』21 東京外国語大学

佐久間鼎(1936)『現代日本語の表現と語法』 厚生閣

佐久間鼎(1951)『現代日本語の表現と語法(改訂版)』 厚生閣

讃井唯允(1988)「中国語指示代名詞の語用論的検討」『人文学報』198　東京都立大学人文学部

正保　勇(1981)「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』8　国立国語研究所

田中　望(1981)「「コソア」をめぐる諸問題」『日本語の指示詞』8　国立国語研究所

長田久男(1974)「連文の諸相(1)－コ･ソ･ア系統の指示詞による意味の持ち込みという現象―」『岡山大学教育学部研究集録』38、40　岡山大学教育学部

堀口和吉(1978a)「指示詞「コ・ソ・ア」考」『論集日本文学日本語 5　現代』 角川書店

堀口和吉(1978b)「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8 大阪外国語大学

丹羽哲也(2006)『日本語の題目文』 和泉書院

三上　章(1955)『現代語法新説』 刀江書院

山梨正明(1992)『推論と照応』 くろしお出版

李　智媛(2009)「中国語の指示代詞「这・那」の日本語訳への考察―「コ・ソ・ア」との対訳を中心に」(厦门大学硕士学位论文) 中国学位论文库

梁　慧(1986)「「コソア」と「这」「那」―日本語・中国語の比較対照研究―」『都立大方言学会会報』116　都立大学方言学会

劉　月華・潘　文娯・故　韡著　相原茂監訳(1997)『現代中国語文法総覧』 くろしお出版

呂　叔湘主編　菱沼透［ほか］訳(2003)『中国語文法用例辞典』 東方書店

張　麟声(2001)『日本語教育のための誤用分析――中国語話者の母語干渉20例』スリーエーネットワーク

史　隽(2008)「文脈における日中指示詞の対照研究」『一橋大学留学生センター紀要』11 一橋大学留学生センター

史　隽(2011a)「指示詞の照応用法に関する日中対照研究」『日本語/日本語教育研究』2 ココ出版

史　隽(2011b)「中国語“这么 QN”と“那么 QN”構造における指示詞の機能―日本語との対照を兼ねて」『日中言語研究と日本語教育』4 好文出版

**(中国語文献)**

梅　祖麟(1986)「关于近代汉语指代词—读吕著《近代汉语指代词》」《中国语文》6　商务印书馆

方　梅(2002)「指示词“这”和“那”在北京话中的语法化」《中国语文》4 商务印书馆

李　婷(2005)「小议汉语指示词的区分基准」《绥化学院学报》6 绥化学院

吕　叔湘(1964)「近代指示词“这”的来源」《中国语文》4 商务印书馆

吕　叔湘(1980)《现代汉语八百詞》商务印书馆

吕　叔湘(1982)《中国文法要略》商务印书馆

吕　叔湘(1985)《近代汉语指代词》学林出版社

吕　叔湘(1990)「指示詞的二分法和三分法」《中国语文》6 商务印书馆

秦　礼君(1995)「汉日语指示词的语法差别」《外语研究》3 南京国际关系学院

徐　丹(1988)「浅谈这/那的不对称性」《中国语文》2 商务印书馆

张　伯江・方 梅(2001)《汉语功能语法研究》 江西教育出版社

朱　英贵(2009)「论复指与同位」《四川师范大学学报》4 四川师范大学

陈　志文(1964)「近代汉语指示词“这”的来源」《中国语文》6　商务印书馆

沈　家煊(1999)《不对称和标记论》 江西教育出版社

盛　文忠(2010)「汉日语关系从句与指示词语序的类型学差异」《日语学习与研究》2 对外经济贸易大学

曹　秀玲(2000)「汉语“这/那”不对称的语篇考察」《汉语学习》4 延边大学

崔　应贤(1997)「“这”比“那”大」《中国语文》2 商务印书馆

杨　诎人(2007)《现代日语系统语法》 世界图书出版公司

叶　文龙(1988)「“这”的功能嬗变及其他」《语文研究》 1　山西省社会科学院

尹　航(2007)「汉日指示词之比较」《运城学院学报》 1　运城学院

王　宏(1985)「日汉语指示词的对应関係」《日语学习与研究》5 对外经济贸易大学

**(英語文献)**

Anderson, Stephen R. & Edward L. Keenan (1985) Deixis. In Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description,* Volume III: Grammatical categories and the lexicon, Cambridge: Cambridge University Press.

Fillmore, Charles J. (1968) “The case for case,” in E. Bach & R. Harms (eds)

*Universals in Linguistic Theory*, New York: Holt, Rinehart & Winston.

John Lyons, (1972) *New horizons in linguistics,* Harmondsworth, Middlesex [u.a.] : Penguin Books.

# 参考文献

（日本語文献）

相原　茂(1990)「“这”“这个”及び“这块”など」『中国語』2　大修館書店

庵　功雄(1996)「指示と代用」［Ｊ］『現代日本語研究』3 大阪大学現代日本語学講座

庵　功雄(2001)「談話・テキスト」『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク

庵　功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク

石井　誠(1998)「日中対照指示詞の研究」『国文学解釈と鑑賞』63－1 至文堂

井上　優(2006)「日本語から見た中国語『日本語学』25-3 明治書院

大野美千代(1978)「文章に使われた指示語：コ系・ソ系の機能差」『東京女子大学日本文学』48 東京女子大学日本文学研究会

奥津敬一郎・徐　昌華(1982)「日本語と中国語の比較構文―「ホド」を中心として―」『都大論究』19　東京都立大学国語国文学会

奥津敬一郎(1986)「形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社

金水　敏(1986a)「名詞の指示について」『築島裕博士還暦記念国語学論集』 明治書院

金水　敏(1986b)「連体修飾成分の機能」『松村明教授古希記念国語研究論集』 明治書院

金水　敏(1990)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6－4 言語処理学会

金水　敏(1998)「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学　国文篇』39 大阪女子大学国文学科

木村英樹(1983a)「『こんな』と『この』の文脈照応について」『日本語学』2－11　明治書院

木村英樹(1990)「中国語の指示詞―『コレ/ソレ/アレ』に対応するもの―」『日本語学』9－3　明治書院

木村英樹(1996)『中国語はじめの一歩』 ちくま新書

近藤泰宏(1990)「構文的にみた指示詞の指示対象」『日本語学』 9-3　明治書院

迫田久美子(1993a)「コミュニケーションにおける『あれ』の用法と機能」『日本語教育』80 日本語教育学会

迫田久美子(1993b) 「話し言葉におけるコ・ソ・アの中間言語研究」『日本語教育』81 日本語教育学会

迫田久美子(1996)「指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程－対話調査による縦断的研究に基づいて－」『日本語教育』89 日本語教育学会

迫田久美子(1997)「日本語学習者における指示詞ソとアの使い分けに関する研究」『第二言語としての日本語の習得研究』1 凡人社

迫田久美子(1998)『中間言語研究―日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』溪水社

高橋太郎(1956)「『場面』と『場』」『国語国文』25-9 京都大学文学部国語国文学研究室

高橋太郎(1990)「指示詞の性格」『日本語学』9－3 明治書院

高橋太郎・鈴木美都代(1982)「コ・ソ･アの指示領域について」『研究報告集』3（国立国語研究所報告集71）国立国語研究所

田窪行則(1990)「談話管理の理論－対話における聞き手の知識領域の役割」『言語』19－4 大修館書店

堤　良一(2002)「文脈指示における指示詞の使い分けについて」『言語研究』122 日本言語学会

鶴田常吉(1924)『尋常小学国語読本を資材として　日本口語法』 南郊社

中みき子(1990)「小説における日・中指示詞の機能の差異について」『京都外国語大学研究論叢』35 京都外国語大学

新村朋美(1992)「指示詞の習得」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』4 早稲田大学

馬場俊臣(1992a)「指示語―後方照応の類型について」『表現研究』55 表現学会

馬場俊臣(1992b)「指示語の文脈展開機能」『日本語学』11-4 明治書院

馬場俊臣(1993)「指示語系接続詞」『語学文学』31 北海道教育大学語学文学会

林　四郎(1972)「指示代名詞『この』『その』の働きと前後関係」 『電子計算機による国語研究Ⅳ』国立国語研究所

堀口和吉(1990)「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』9－3 明治書院

牧野美奈子(1993)「中国語の指示詞とテクスト」『中国語学』240 日本中国語学会
松浦恵津子(1997)「指示語『ソンナ』と『ソウイウ』について」 『言語文化と日本語教育』13 お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
三谷惠子(2006)「南スラヴ語の指示代名詞とブルゲンラント・クロアチア語について」『Dynamis ： ことばと文化』10 京都大学大学院人間・環境学研究科
望月八十吉(1986)「中国語の指示詞」『中国語学』177 日本中国語学会
森田良行(1967)「指示語の指導」『講座日本語の文法 4 文法指導の方法』 明治書院
森田良行(1990)「指示詞について」『日本語学と日本語教育』94 凡人社
守屋三千代(1992)「指示語と視点」『日本語学』11-9 明治書院
安田喜代門(1928)『国語法概説』中興館
山田孝雄(1908)『日本文法論』賓文館(1942.13 版)
安　龍洙(2001)「日本語学習の指示詞の使用意識に見られる特徴－韓国人学習者と中国人学習者を比較して－」『第二言語としての日本語の習得研究』4 凡人社
李　杰(2004)「日中指示詞の対照研究(1)中国人日本語学習者のコソアの習得における困難点についての分析」『福岡教育大学国語科研究論集』45 福岡教育大学国語国文学会
李　杰(2005)「日中指示詞の対照研究(2)中国人日本語学習者のコソアの習得における困難点についての分析」『福岡教育大学国語科研究論集』46 福岡教育大学国語国文学会
路　玉昌(2000)「コ・ソの文脈指示について―発話内容が先行表現となっている場合」『日本と中国ことばの梯　佐治圭三教授古稀記念論文集』くろしお出版
胡　俊(2010)「文脈指示における日本語と中国語の指示詞についての対照研究－論説文の場合－」『地域政策科学研究』7 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科
高　芃(2006)「中国語の指示代詞“这”“那”の虚化について」『多元文化』6 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
高　革萍(2002)「指示詞の日中対照－中国人学習者による誤用を参考に－」『早稲田日本語研究』10 早稲田大学国語学会
高　麗雅(1986)「指示詞『コ・ソ・ア』についての一考察－コノ・ソノ・アノを中心として」『日本語教育』60 日本語教育学会
王　亜新(2006)「ソ系指示詞の指称功能と漢訳」『日本語研究』4　東方書店

**(中国語文献)**

刁　世兰(2006)「“这”、“那”的下指用法探析」《新余高专学报》1 新余高等专科学校

归　文娟(2008)「英汉指示代词的对比研究」　南京师范大学硕士学位论文

贺　筠・王　道英(2008)「“这”、“那”类的预指现象」《山东文学(下半月)》7　山东文学社

蒋　华(2004)「现代汉语“这/那”类指示代词的多维度考察」(湖南师范大学博士论文) 中国学位论文库

蒋　华(2005)「指示代词“这”的上下指差异研究」《安庆师范学院学报：社会科学版》24－3　安庆师范学院

徐　方敏(2006)「汉语多项定语的顺序及其在日汉翻译中的应用」《外语研究》南京国际关系学院

徐　麗華(2007)「指示詞“这”的主観情感性」［Ｊ］《文学教育》5 华中师范大学

徐　一平(1999)《日本語言》　高等教育出版社

曾　美艶(2004)「結構助詞“的”与指示代詞“这/那”的文法共性」『語言教学与研究』1　東方書店

王　道英(2005)『“这”、“那”的指示功能研究』学林出版社

王　丽娜(2007)「英汉指示词对比研究与翻译」(上海海事大学硕士学位论文) 中国学位论文库

王　彩丽(2005)「论汉日英三种语言中多项定语语序的异同」《日语学习与研究》S1　对外经济贸易大学

**(英語文献)**

Fillmore, Charles J. (1982). “Towards a descriptive framework for spatial deixis.”, in R. J. Jarvell & W. Klein (Eds.), *Speech, place and action: Studies in deixis and related topics* , London: Wiley.

Halliday, M.A.K. & Hasan, Ruqaiya. (1976). *Cohesion in English*. London ：Longman.

## データ資料

### 日中対訳小説リスト

| | 原書名 | 著者 | 原著出版社(年) | 訳書名 | 訳者 | 出版社(年)<br>(出版社を略す) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 蒲団 | 田山花袋 | 新潮文庫(1952) | 棉被 | 黄鳳英 | 江蘇人民(1987) |
| 2 | 坊ちゃん | 夏目漱石 | 筑摩書房(1992) | 哥儿 | 劉振赢 | 人民文学(1982) |
| 3 | 羅生門 | 芥川龍之介 | ほるぷ出版(1976) | 罗生门 | 文潔若 | 人民文学(1981) |
| 4 | 鼻 | 芥川龍之介 | 筑摩書房(1971) | 鼻子 | 文潔若 | 中国世界語(1998) |
| 5 | 砂の女 | 安部公房 | 新潮社(1962) | 砂女 | 楊炳辰 | 珠海(1997) |
| 6 | 青春の蹉跌 | 石川達三 | 新潮社(1974) | 青春的蹉跎 | 金中 | 雲南人民(1981) |
| 7 | 黒い雨 | 井伏鱒二 | 新潮社(1966) | 黑雨 | 柯毅文ほか | 湖南人民(1982) |
| 8 | あした来る人 | 井上靖 | 新潮文庫(1961) | 情系明天 | 林少華 | 北岳文芸(1988) |
| 9 | 野火 | 大岡昇平 | 創元社(1952) | 野火 | 王杞元等 | 昆侖(1987) |
| 10 | 死者の奢り | 大江健三郎 | 新潮文庫(1958) | 死者的奢华 | 李慶国 | 光明日報(1995) |
| 11 | 飼育 | 大江健三郎 | 新潮文庫(1958) | 饲育 | 沈国威 | 光明日報(1995) |
| 12 | 雪国 | 川端康成 | 三笠書房（1953） | 雪国 | 侍桁译 | 上海译文（1981） |
| 13 | 破戒 | 島崎藤村 | 筑摩書房（1968） | 破戒 | 柯毅文 | 人民文学（(1982) |
| 14 | 痴人の愛 | 谷崎潤一郎 | 角川文庫（1947） | 痴人之爱 | 郭来舜ほか | 陝西人民（1988） |
| 15 | 三四郎 | 夏目漱石 | 角川書店（1951） | 三四郎 | 吴树文 | 上海訳文（1983） |
| 16 | 雁の寺 | 水上勉 | 文春文庫（1974） | 雁寺 | 何平 | 海峡文芸（1985） |
| 17 | 越前竹人形 | 水上勉 | 中央公論（1964） | 越前竹偶 | 呉樹文 | 上海訳文（1993） |
| 18 | ノルウェーの森 | 村上春樹 | 角川文庫（1993） | 挪威的森林 | 林少華 | 漓江（1987） |
| 19 | 破戒裁判 | 高木彬光 | 角川文庫（1974） | 破戒裁判 | 祖秉和 | 群众（1981） |
| 20 | 恍惚の人 | 有吉佐和子 | 新潮社（1972） | 恍惚的人 | 秀丰 | 人民（1977） |
| 21 | 砂の器 | 松本清張 | 文藝春秋（1971） | 砂器 | 胡澎 | 上海訳文（1985） |

## 中日対訳小説リスト

| | 原書名 | 著者 | 出版社(年)<br>(出版社を略す) | 訳書名 | 訳者 | 出版社(年) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 上海的早晨[1] | 周而復 | 人民文学(1958) | 上海の朝 | 岡本隆三 | 至誠堂(1964) |
| 2 | 吶喊 | 魯迅 | 人民文学(1973) | 吶喊 | 竹内好 | 筑摩書房(1955) |
| 3 | 彷徨 | 魯迅 | 人民文学(1973) | 彷徨 | 竹内好 | 筑摩書房(1956) |
| 4 | 骆驼祥子 | 老舎 | 人民文学(1955) | 駱駝祥子 | 立間祥介 | 岩波書店(1980) |
| 5 | 霜叶红似二月花 | 茅盾 | 华工书店（1943） | 霜葉紅似二月花 | 立間祥介 | 岩波書店(1980) |
| 6 | 青春之歌 | 楊沐 | 北京(1958) | 青春の歌 | 島田・三好 | 青年出版社(1977) |
| 7 | 小鮑庄 | 王安憶 | 上海文艺(1986) | 小鮑荘 | 佐伯慶子 | 徳間書店(1986) |
| 8 | 金光大道 | 浩然 | 人民文学(1972) | 輝ける道 | 神崎勇夫 | 東方書店(1974) |
| 9 | 活动变人形 | 王蒙 | 人民文学(1987) | 応報 | 林芳 | 白帝社(1993) |
| 10 | 盖棺 | 陳建功 | 北京文学(1979) | 棺を蓋いて | 岸陽子 | 早稲田大出版(1993) |
| 11 | 辘轳把胡同 9 号 | 陳建功 | 北京文学(1981) | 轆轤把胡同九号 | 岸陽子 | 早稲田大出版(1984) |
| 12 | 钟鼓楼 | 劉心武 | 人民文学(1985) | 鐘鼓楼 | 蘇琦 | 恒文社(1993) |
| 13 | 插队的故事 | 史鉄生 | 山东文艺（2001） | 遥かなる大地 | 山口守 | 宝島社(1994) |
| 14 | 轮椅上的梦 | 張海迪 | 中国青年(1991) | 椅子の上の夢 | 飯塚容 | 新潮社(1991) |
| 15 | 人到中年 | 諶容 | 百花文艺(1980) | 北京の女医 | 田村年起 | 第三文明社(1984) |
| 16 | 人啊，人 | 戴厚英 | 花城(1980) | ああ、人間よ | 大石智良 | ｻｲﾏﾙ出版会(1988) |
| 17 | 红高粱[2] | 莫言 | 作家(1996) | 赤い高粱 | 井口晃 | 徳間書店(2003) |
| 18 | 倾城之恋[3] | 張愛玲 | 花城（1997） | 傾城の恋 | 池上貞子 | 平凡社(1995) |

[1] シリーズ《上海的早晨》より
[2] シリーズ《张爱玲全集》より
[3] 《莫言文集》（1-5 巻）より